花　見　月　遺　跡

県単高速ネットワーク大規模幹線道路改良
事業に係る埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

1984・3

石川県立埋蔵文化財センター

花　見　月　遺　跡

県単高速ネットワーク大規模幹線道路改良
事業に係る埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

石川県立埋蔵文化財センター

例　　言

1　本報告書は石川県鹿島郡鳥屋町花見月に所在する花見月遺跡の緊急発掘調査報告書である。

2　本遺跡は県単高速ネットワーク大規模幹線道路改良事業（主要地方道志賀田鶴浜線）に係るもので発掘調査の費用は県土木部道路建設課が負担した。

3　本遺跡の発掘調査は石川県立埋蔵文化財センターが実施した。調査は、藤田邦男、福島正実、平田天秋（以上石川県立埋蔵文化センター）が担当し、宮下栄仁（石川考古学研究会々員）、福谷祐敬（押水町教育委員会研修生）、田畑　弘各氏の協力を受けた。

4　発掘調査にあたっては次の諸氏の指導と援助を受けた。記して謝意をのべる。
唐川明史（石川考古学研究会幹事）、津田耕吉（石川考古学研究会会員）、土肥富士夫（七尾市 文化課）、石川県七尾土木事務所、中村組、㈱壁屋土石。

5　出土品の整理作業は宮下、平田があたり遺物の記名・復元・実測・トレース、遺構図のトレースなどを行った。

6　本書の編集は宮下、平田があたり次のように執筆分担した。
宮下栄仁（第IV章第１、２、３節）、平田天秋（第１章第１、２節、第II章、第III章、第V章）

7　本書の遺構、遺物実測図、写真図版の指示は次のとおりであるが、変更したものについては、その都度明示した。

(1)　方位は全て磁北を表示する。

(2)　水平基準は海抜高で表示する。（単位　m）

(3)　遺物実測図はほぼ1/3縮尺であるが、遺構図、地形図についてはその旨明示した。

目　　次

例　言
第Ⅰ章　遺跡の位置と環境……1
　第１節　位置と環境……1
　第２節　鳥屋窯跡群の分布……3
第Ⅱ章　調査に至る経緯……18
第Ⅲ章　層序と検出した遺構……21
　第１節　層序……21
　第２節　検出した遺構……24
第Ⅳ章　出土遺物……29
　第１節　縄文土器……29
　第２節　須恵器・土師器・その他……31
　第３節　瓦塔……42
第Ⅴ章　まとめ……43

挿　図　目　次

第１図　花見月遺跡の位置……1
第２図　位置と周辺の遺跡……2
第３図　窯跡群と古墳群の分布……4
第４図　深沢支群の遺物（石川考古学研究会々誌第９号より転載）……5
第５図　春木３号窯の遺物（石川考古学研究会々誌第９号より転載）……5
第６図　池崎窯の瓦塔（七尾市史第４巻より転載）……6
第７図　後山窯跡群の位置……7
第８図　末坂Ａ地点の遺物……8
第９図　三ツ池Ｂ地点の遺物（1/3）……9
第10図　末坂Ｃ地点の遺物（1/3）……9
第11図　七尾高等学校保管の遺物（1/3）……10
第12図　春木Ｄ地点の遺物（1/3）……11
第13図　春木Ｅ地点の遺物（1/3）……12

第14図　瀬戸Ｆ地点の遺物（1/3）……12
第15図　花見月Ｇ地点の遺物（1/3）……13
第16図　花見月Ｈ地点の遺物（1/3）……14
第17図　花見月Ｉ地点の遺物（1/3）……15
第18図　花見月Ｊ地点の遺物（1/3）……15
第19図　花見月Ｋ地点の遺物（1/3）……16
第20図　花見月Ｌ地点の遺物（1/3）……17
第21図　若狭見Ｍ地点の遺物（1/3）……17
第22図　後山窯跡群の遺物（石川考古第126号より転載）……18
第23図　試掘トレンチ配置図（1/5,000）……19
第24図　調査前の地形図……24
第25図　Ａ区遺構配置図……25
第26図　Ｂ区遺構配置図……26
第27図　Ａ、Ｂ区土坑実測図……27
第28図　Ａ－５号土坑実測図……28
第29図　Ｂ－４号焼土坑実測図……28
第30図　縄文土器実測図（1/3）……30
第31図　縄文土器実測図（1/3）……31
第32図　須恵器実測図（1/3）……33
第33図　須恵器実測図（1/3）……35
第34図　須恵器実測図（1/3）……36
第35図　須恵器実測図（1/3）……37
第36図　須恵器実測図（1/3）……38
第37図　須恵器実測図（1/3）……39
第38図　須恵器・土師器・その他実測図（1/3）……40
第39図　瓦塔実測図（1/3）……41
第40図　高松町若緑イナバ山２号窯跡表採瓦塔（1/3）……43
第41図　花見月Ｎ地点採集の瓦塔と須恵器（1/3）……44

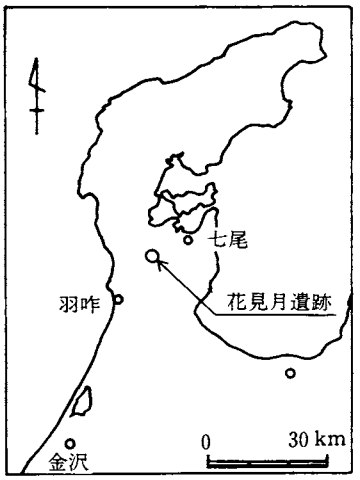
図　版　目　次

図版１　調査前近影
図版２　Ａ区調査風景、Ａ区溝跡
図版３　Ａ－２号土坑、Ａ区土層
図版４　Ａ区縄文、Ａ－５号土坑
図版５　Ｂ区全影、Ｂ区近影
図版６　Ｂ－４号焼土坑
図版７　Ｂ－４号焼土坑
図版８　Ｂ－３号土坑、Ｂ－１号土坑、Ｂ区土層、Ｂ－５号土坑、Ｂ－２号土坑、Ｂ区土層
図版９　出土須恵器
図版10　出土須恵器
図版11　出土須恵器
図版12　出土須恵器
図版13　出土須恵器
図版15　瓦塔
図版16　出土須恵器不明品
図版17　須恵器不明品、泥塔、土師器、縄文式土器
図版18　縄文式土器
図版19　縄文式土器
図版20　窯壁、鉱滓
図版21　末坂Ａ地点、末坂Ｃ地点、春木Ｅ地点の須恵器
図版22　花見月Ｇ地点、花見月Ｈ地点の須恵器
図版23　花見月Ｉ地点、瀬戸Ｆ地点、花見月Ｊ地点の須恵器
図版24　花見月Ｋ地点の須恵器
図版25　花見月Ｌ地点、若狭見Ｍ地点、三ツ池Ｂ地点、春木地内の須恵器
図版26　県内出土の瓦塔

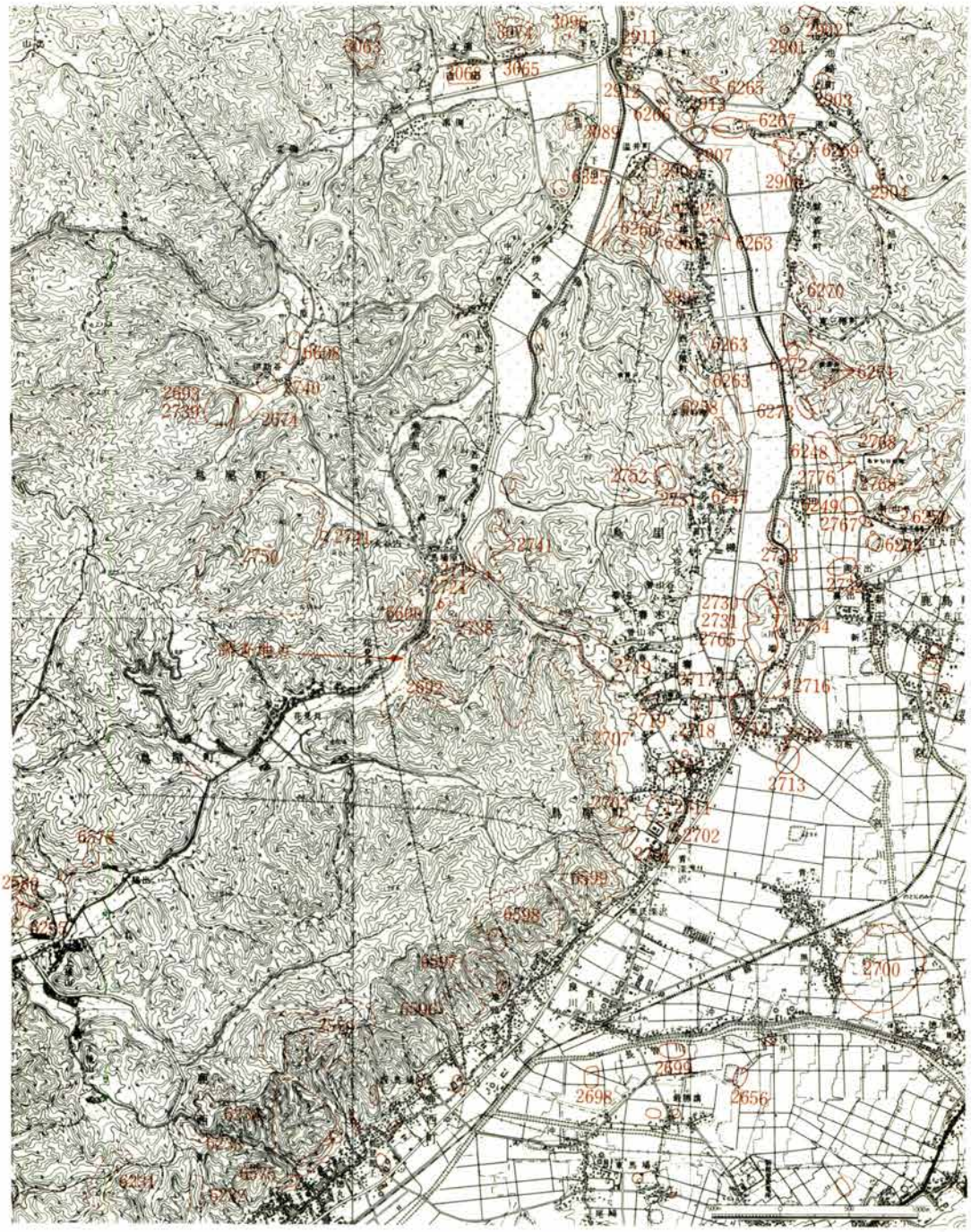
第Ⅰ章　遺跡の位置と環境

第1節　位置と環境

花見月遺跡は鹿島郡鳥屋町花見月に所在する。能登中央部を縦断している断層、邑知地溝帯の北側を連ねる眉丈山系（最高187.9 m）は、その北東側で標高を減じながら同町付近で消滅している。本地域に至っては、地溝帯縁辺の他地域よりもかなり複雑に小谷、小扇状地がいりみだれている。また、地溝帯も本町付近でその幅を減じながら七尾湾に至る。同町新庄付近からは、二宮川の北流によって生じた小沖積低地が連がり鹿島郡田鶴浜町を経て日本海に注いでいる。七尾市満仁町付近で合流する、その支流の伊久留川による狭い沖積平地が前述の邑知地溝帯と同方向に平行して南西側から北東側に走っている。本遺跡はこの伊久留川に望む南東側斜面にある。また、この谷は能登半島基部を東西に縦断する地溝帯に対する裏街道として古代より重要な地位を占めていたものと推察される。従来から能登における二大窯業地帯であると言うことから、窯跡の発見にのみ目を奪われ、他の遺跡が少ないような憾みがないとは言えなかった。しかし、昭和51年度に石川考古学研究会の実施した古墳群のローラ作戦的分布調査により500基にも及ぶ新たな古墳が発見され、鳥屋町いや能登の古代史を一変させた。その後も石川考古学研究会員の緻密な現地踏査により新遺跡の発見が相次いでいる地域である。昭和54年版「石川県遺跡地図」でみると、遺跡総件数では石川県で第4位、1 km² 当りの件数では第1位にランクされる。(「石川考古」56. 3橋本）これらのデーターからみても本町は遺跡の件数の多い地域と言える。しかしながら、これらの内訳をみてみると上記の窯跡、古墳の数量を差し引くと何も残らないような状況となる。縄文時代の遺跡では、現時点で知られている遺跡は非常に少なく4遺跡を数えるのみである。これは、本町の約1/3の面積を占める地溝帯部分での遺跡の発見が遅れていることと、山地部分の踏査が進んでいないことによるものと考えられる。また、地溝帯部分については先年鹿島バイパス関連で発掘調査を実施した徳前C遺跡（一部鳥屋町）のように包含層が地下2～3 mの地点に存していると言う状況などから、なかなか表面からの観察だけでは発見しにくい。それでも熱心な石川考古学研究会員の踏査により伊助谷遺跡、若狭見遺跡が最近までに発見されている。縄文中～後期の伊助谷遺跡は遺存状況も良く多くの遺物を出土する。また、若狭見地内の丘陵端部からは楕円押型文が採集されている。他には、打製石斧、石鏃を出土した新庄神社遺跡と4次にわたる発掘調査が実施された徳前C遺跡(黒氏サクラマツ遺跡）のみである。弥生時代についても縄文時代同様に不明の点が多くまた遺跡の発見例も少ない。低地とくに地溝帯内部に進出するものと考えら



第1図　花見月遺跡の位置



第２図　位置と周辺の遺跡

縄文時代

2700	黒氏サクラマツ遺跡（徳前Ｃ遺跡）
2733	新庄神社遺跡
仮称	若狭見遺跡
2740	伊助谷Ａ遺跡

弥生、古墳時代

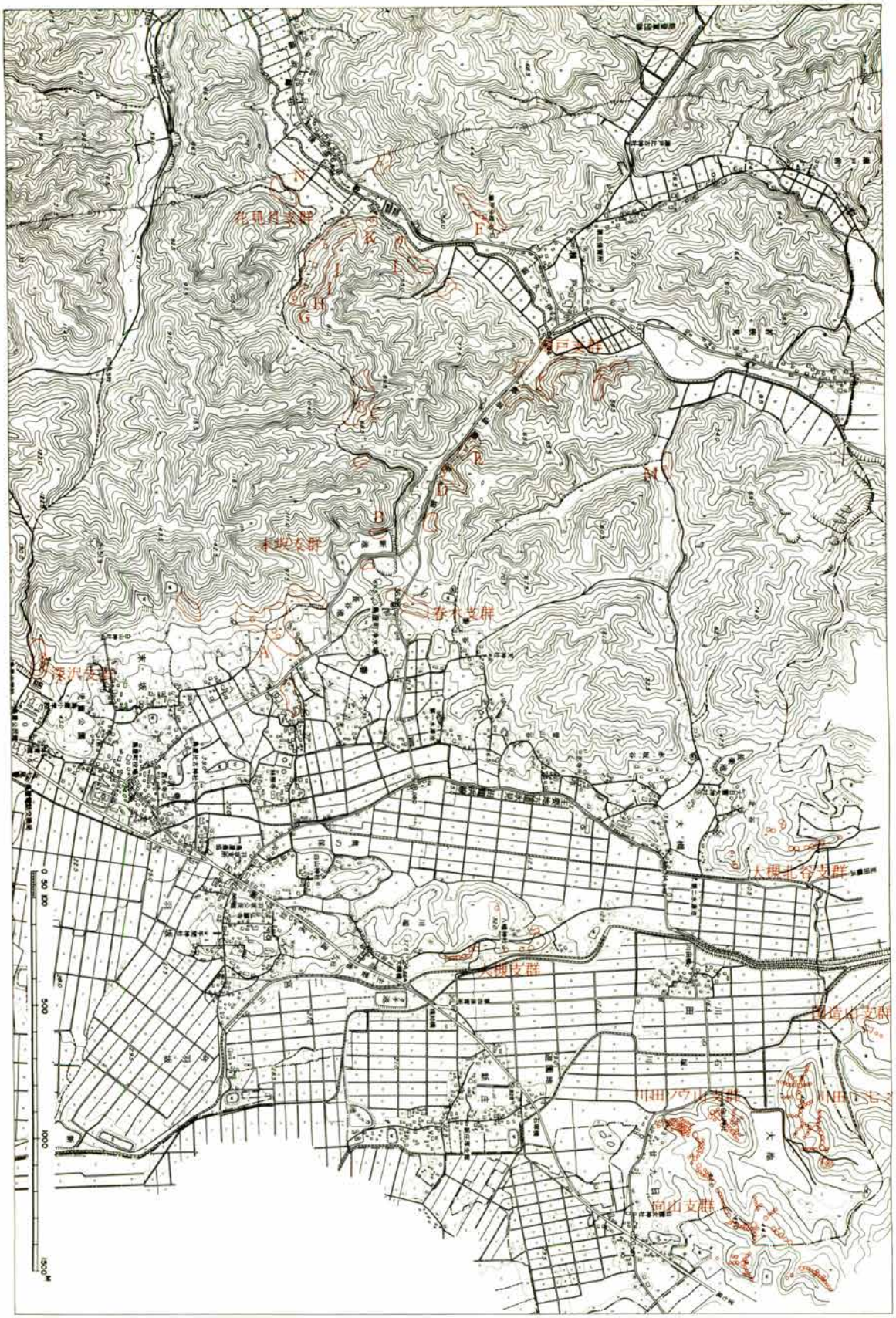
2700	黒氏サクラマツ遺跡（徳前Ｃ遺跡）
2714	羽坂Ｂ遺跡
2732	新庄弥生遺跡
6248	川田Ａ遺跡

6249	川田B遺跡
6250	川田向山遺跡
	古墳
6596～98	良川古墳群
6599	黒氏深沢古墳群
2754	大槻古墳群
2768	川田古墳群（向山支群）
2768	川田古墳群（ソウ山支群）
6271	川田古墳群（七の宮支群）
6247	大槻古墳群（北谷支群）
	須恵器窯跡
2701	鳥屋中学校庭窯跡
2703	深沢窯跡群
2707	末坂窯跡群
2719	春木窯跡群
2741	瀬戸窯跡群
2692	花見月窯跡群
	城館跡、寺跡、その他
2776	川田中世陶器出土地
2752	大槻防塁遺跡
2717	安楽寺跡（江戸）
2718	春木斉藤館跡
2698	免田中世城遺跡
2751	長楽寺跡

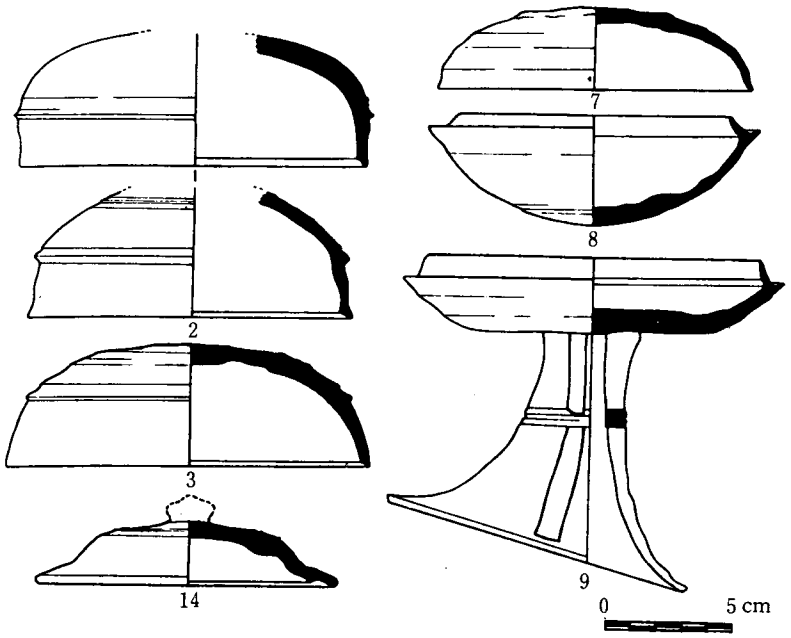
れるが、調査例も少なく不明である。わずかに縄文時代同様に先年発掘調査を実施した徳前C遺跡（黒氏サクラマツ遺跡）の例しかない。この遺跡は縄文前～中期、弥生後～古墳時代、奈良時代と一部中世にまたがる広大な複合遺跡であり弥生時代から古墳時代に関しても地溝帯内部への進出が伺い知れる。今後、地溝帯内部の調査、二宮川流域の調査が進むにつれて多くが発見される可能性を秘めた地域と言える。古墳時代についても平地の集落遺跡に関するものは皆無でそのほとんどが古墳で占められている。昭和51年に実施した石川考古学研究会の主要古墳群分布調査の結果により本町の古墳時代史は一変したと言える。石動山に源を発する二宮川が地溝帯を横切り新庄を経て田鶴浜町に至ることは前述したとおりであるが、この両側の丘陵上に多数の古墳群が発見されたのである。それらのうちの大槻支群は弥生後期の土器を出土する方形台状のもの7基、古式土師器を検出した前方後方墳が1基と他に円墳3基からなっている。またその北東側の川田向山支群は170基の円墳よりなり、その北側の川田ソウ山支群では前方後方墳1基と円墳31基、さらに北側の川田七の宮支群では実に105基の円墳、その対岸の大槻北谷支群は14基の円墳より成立している。さらに下流域の七尾市、田鶴浜町に至るまで東三階・国造山支群、温井・町屋支群と連綿として分布している。これら古墳群の中でも典型的な後期群集墳である川田向山古墳群などへの須恵器の供給も鳥屋窯跡群よりなされたものと考えられる。また、最近では眉丈山系の東端、良川、深沢地内でも多くの古墳群が発見されている。一方、古墳時代から平安時代にかけての窯跡については後述するが、深沢、末坂、春木、瀬戸、花見月地内を中心に今後100基を超す窯跡群となる可能性が大である。集落遺跡においては調査を実施した徳前C遺跡のみである。奈良前半期の掘立柱建物8棟を検出している。この集落で消費された須恵器についても同窯跡群の春木地区から供給されたものと考えられる。また律令期についても、その最大の消費地、国府、国分寺の置かれた七尾への主な供給源も鳥屋窯跡群がその大半を荷なっていたのも想像にかたくはない。

第2節　鳥屋窯跡群の分布（第3図）

本町が須恵器窯跡の群集地帯であることに最初に着目したのは、石川県嘱託、故上田三平氏で

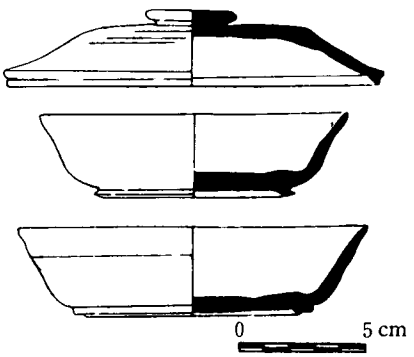


第3図　窯跡群と古墳群の分布

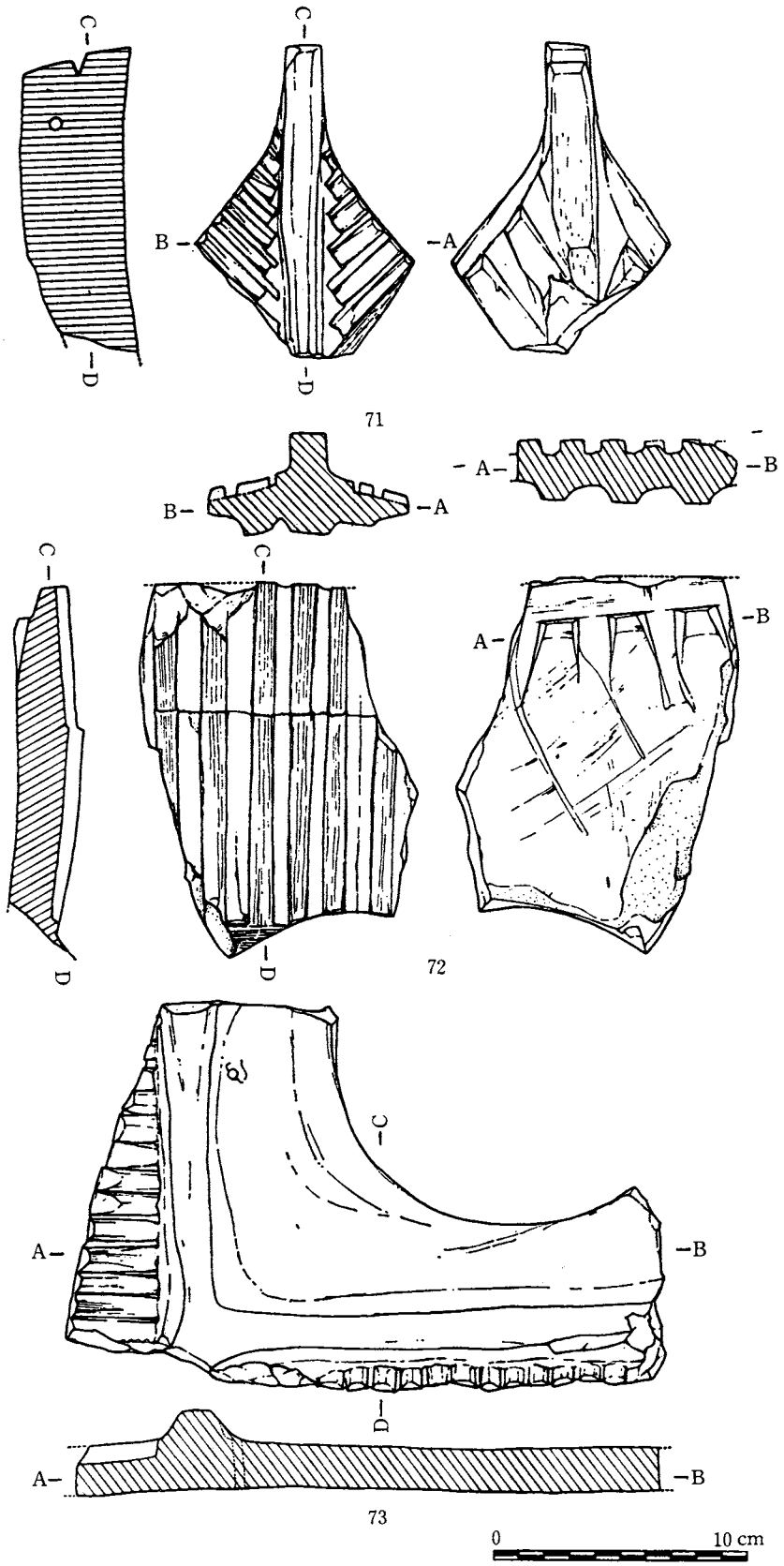


第4図　深沢支群の遺物（石川考古学研究会々誌第9号より転載）

あった。氏は大正12年に「石川県史蹟名勝調査報告」第一輯に付録として「古代製陶所遺址」の項を設け、「鹿島郡鳥屋村字末坂付近ニ製陶遺址アリ、又同郡相馬村字瀬戸東南渡谷ノ山麓ニ祝部土器片ヲ多数堆積セル所数ヶ所アリ。黒土ノ中ニ土器破片ヲ包含シ窯ヲ密閉セシ粘土塊ヲ含有シ、田地ニ土器破片ヲ埋蔵セリ。破片ニ依テ調査スルニ朝鮮土器破片及祝部土器多ク、中ニハ竈ノ口止メニ使用セリト認ムル粘土塊アリ。然レドモ此地ノ土器ハ容器ノ種類及技巧上ヨリ見テ製作年代ノ稍新シキモノナリト認メラル。」と報告がなされている。次いで昭和28、29年鳥屋町史の編纂にあたり考古班として参加された高堀勝喜氏は「鳥屋町の須恵器窯址」の一項で町内の遺跡を総括的に検討し須恵器窯跡の群集地であることを強調され、瀬戸ササヲ窯跡出土の須恵器を紹介されている。ついで、昭和35年春木地内の武原織物第二工場の拡張作業中に須恵器の出土が報ぜられ、故嵯峨井亮氏により須恵器窯跡であることが確認され、春木2号窯と命名された。昭和36年8月に石川考古学研究会、鳥屋町教育委員会とにより春木2号窯東方15mにある春木3号窯跡の発掘調査が実施されている。なお、本窯の調査については、「能登鳥屋古窯跡群の調査」（第一次）石川考古学研究会々誌第9号1975により八世紀前葉の時期とされている。また、その付録に深沢1、2号窯の出土遺物を紹介し、それぞれ六世紀初葉、六世紀末葉の年代

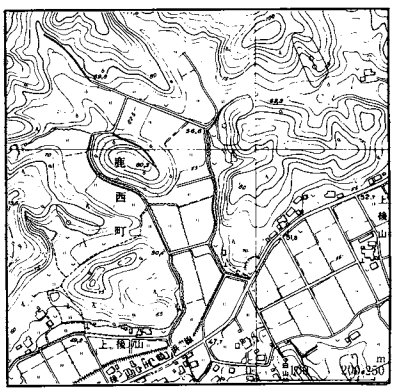


第5図　春木3号窯の遺物
（石川考古学研究会々誌第9号より転載）



第6図　池崎窯出土の瓦塔（七尾市史第四巻より転載）

としている。現時点で30基とも100基とも言われているが、明確な位置の確認作業が遅れている。そのような状況の中で知り得る窯跡群を概観してみる。現時点で鳥屋窯跡群の最西端で、唯一地溝帯部に面している窯跡に黒氏深沢支群がある。鳥屋小学校後背の通称ベッソ谷に所在し、昭和48年に石川県教育委員会が発掘調査を実施している。調査の結果4基の窯跡が確認され六世紀～七世紀代のものであった。以前に鳥屋中学校の校庭拡張工事中にも窯跡が発見されたとのことであるが詳細については不明である。(鳥屋中学校庭窯跡) 現在本窯跡群中で最古の時期を含む支群である。末坂地内で眉丈山系は北に移行し、その高さを減じ、やや起伏の激しい丘陵斜面となる。末坂支群は、これら丘麓部に点在する。第8図の須恵器も本群に入るものとみられるが、現在のところ3基が想定される。三ツ池に望む丘麓部にも古くより遺物が採集されており、湖岸にも窯壁などが散乱するが地点が明確ではない。七尾高校保管のものについても、どの地点からの採集なのか判然としない。また、三ツ池より花見月に抜ける山道沿にも5基以上が確認できる。本群は10基を超すものとみられる。一方、県道春木線の北東側に所在する春木支群では、石川考古学研究会が発掘調査を実施した春木3号窯がある。3基が並列していたようであるが、1号窯については壁土採集により消滅したとみられている。鳥屋町浄水場北側の県道により分断されている丘陵南東側斜面にも3基程度が数えられる。また県道春木瀬戸線より北東側の斜面にも、その県道により灰原の一部や、窯体の一部が切断されて3基以上は存する。本群も10基を超すものとなろう。県道春木瀬戸線と県道後山田鶴浜線が交差する瀬戸地内では、伊久留川の右岸の西斜面に7基以上が存する。また、対岸の瀬戸分校(現保育所)後の南東斜面にも3基以上が存在している。この瀬戸支群についても10基を超す群となる。花見月地内では三ツ池から県道後山田鶴浜線に抜ける山道沿南西斜面(今回調査地点より上流域)には少なくとも6基以上の窯跡が所在している。伊久留川に面する北西斜面でも5基を数えることができるが、老人いこいの家の敷地造成にあたって少なくとも3基が調査もせずに破壊されてしまったのは悔まれる。対岸の林道近くの南斜面にも1基が確認できる。また、石川考古学研究会員の津田耕吉氏は同じく花見月地内の今回調査地点のさらに南西側の谷斜面で瓦塔片とともに須恵器片を採集している(第41図)。この地点でも1基が想定される。花見月支群は14基を数えるが未踏査地区もあり今後かなりの基数が発見される地域と言えよう。以上のべてきた窯跡は全て眉丈山系の山麓斜面に営まれたものであるが、眉丈山系を南北に分断する二宮川の右岸、川田地内あかむけ池の近くに1基存在するとのことであるが、実見していないので不明である。同じく二宮川右岸の七尾市池崎地内通称タキヤチ地内に2基以上が存在する。鳥屋窯跡群の中枢部から北に約5kmの地点である。周辺には現時点でほかに



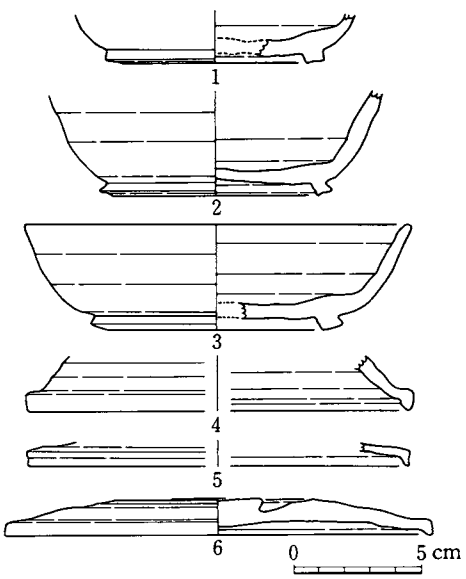
第7図　後山窯跡の位置

窯跡はなく池崎窯は単独に存している。周辺の分布調査が今後に残された課題でもあり、また二宮川右岸の国造山丘麓の状況が不明のため一応、鳥屋窯跡群の一支脈と見ておく。七尾市史第IV巻によれば多くの須恵器の他に、3点の瓦塔片が出土している。著者は輪島市洲衛窯とほぼ同時代とし、平安時代中期の年代観を与え、本窯を能登国府、能登国分寺への供給窯として位置づけられている。また、伊久留川の上流、窯跡群中枢部より約4km南西の鹿西町後山地内でも、少なくとも4基以上の窯跡が存在している。花見月支群の上流域の伊久留川両岸については充分に踏査を実施していないが、後山窯跡までは連続して存在する可能性が高い地域である。また、中枢部より西方約5.5kmの志賀町倉垣地内に倉垣コマクラベ窯跡がある。志賀町史の編纂にあたり灰原のトレンチ調査を実施している。出土した遺物では須恵器とともに土師器の黒色土器を併焼しているとし、また須恵器などの形態上の特徴から、著者は須恵器生産の最期の時期を想定されている。倉垣、矢駄、安津見地内ではコマクラベ窯跡以外には現在知られておらず独立して存在するようである。本窯までを鳥屋窯跡群に含めるかどうかは今後の検討課題としたいがその影響下に発生したものと充分考えられる。今後未踏査区域の二宮川流域、伊久留川流域の瀬戸以北、瀬戸、伊助谷周辺でさらに発見される可能性を残していると言える。また、分布図作製にあたっては津田耕吉氏の協力を得た。

以下に現地踏査に際して見聞した状況とあわせ、採集遺物の説明をすることとする。(第8図～第22図)

末坂A地点の遺物（第8図）

末坂より三ツ池に通ずる道路によって分断されているが、本丘陵の南東側斜面に少なくとも3基は存在する可能性が高い。道路の北東側の竹林の中には窯跡の陥没痕が二ヶ所に認められ、灰原もその前面に半円形をなしているようである。1～3は高台付坏で1には断面四角形の高台が貼付される。2は高台底径6.0cmを測りよく踏ん張った高台を貼付する。腰部からの立ち上りもかなり強く身も深い。口縁部については欠失しており不明である。3は口径15cm、器高4.2cm、底径6.3cmを測るもので、1と同様に断面四角形の高台を貼付している。腰部からの立ち上りはゆるく外反し端部は丸くおさまるものである。4～6は坏蓋で全形を知り得る6で口径16.8cm、器高1.5cmを測るが、つまみの部分が陥没しており、実際はもう少し高いものと思われる。体部約1/2の天井部にヘラケズリを施す。つまみは扁平なボタン状を

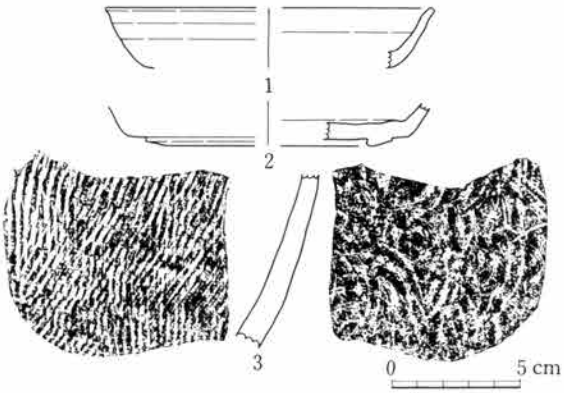


第8図　末坂A地点の遺物

呈するものである。

三ツ池B地点の遺物（第9図）

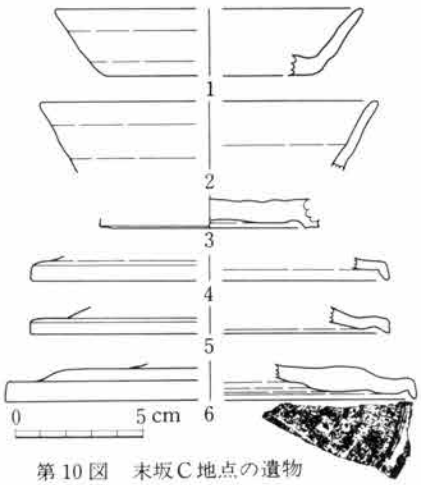
三ツ池の東側斜面で水面に近い地点で遺物は採集される。当該地はかなり急な斜面となっており築窯は困難とみられるが、近隣に適地もなく不明な点が多い。再度確認の必要があるが実現できなかった。1、2とも小片であるが、高台付坏みられる。1は高台部を欠失するが高台付坏の可能性が高い。2は扁平で巾広の低い高台を貼付している。3は甕胴部片である。



第9図　三ッ池B地点の遺物

末坂C地点の遺物（第10図）

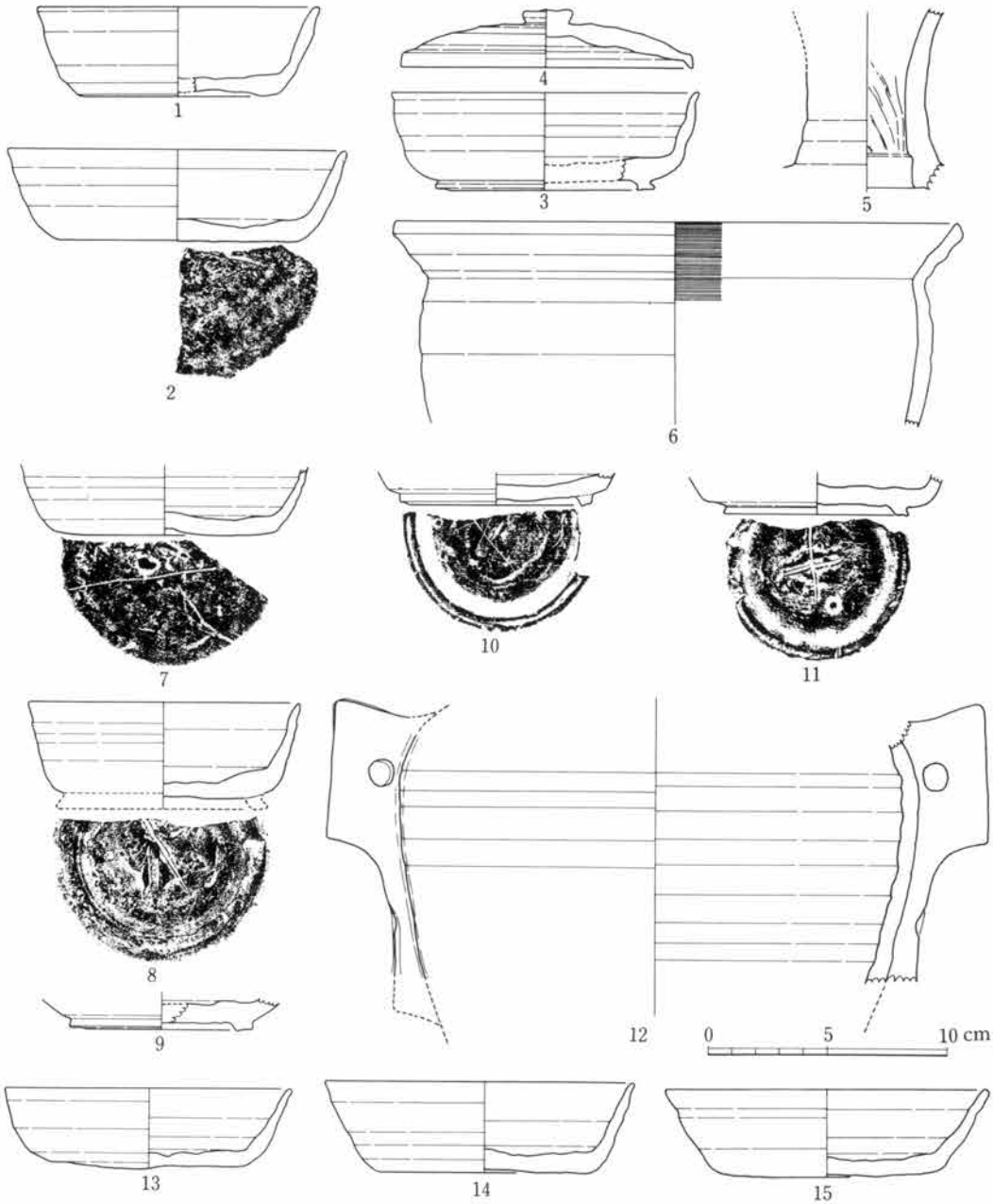
三ツ池の新池より花見月にぬける山道で丁度、両方からの中間地点で峠状をなす地点に存する。峠にかかる三ツ池側に一ヶ所と登った地点が、かなり傾斜もゆるくやや平坦な場所であり、その南東側斜面に二ヶ所の窯体の陥没痕跡が観察される。本窯跡群中では最高位に位置するものと思われる。山林の中であることもあり保存状態も良く表面にはあまり遺物は散布していない。窯跡片が草木の下に散在している。図化できたのも小片で、1、2は無台の坏、3は高台付の坏片である、蓋も全形を知り得るものはなく、口縁端部が屈曲するもので器肉は全体に薄く仕上げられているようである。6は屈曲も強く端部も鋭い。器肉は4、5よりは厚く、内面にヘラ記号がある。



第10図　末坂C地点の遺物

七尾高等学校保管の遺物（第11図）

同校に保管されている遺物で鳥屋町関係では次のものがある。I、ラベルにガリ版刷で「鳥屋町春木（三ツ池）窯跡　昭和28．4．26（No　）七高郷土研究クラブ」と記載のあるもの六点がある。II、墨書で「春木三ツ池出土　昭和二十九年五月五日」あるいは、「春木三ツ池出土　1954．5．5」あるいは「春木三ツ池ヨリ出土　1954．5―5」のおのおの二点、三点、二点がある。III、墨書で「鳥屋町春木二七・一〇」が二点、「鳥屋町春木山地　二七・一〇」が一点ある。以上の16点が保管されているが、記入された地区は本窯跡群の中でも最も多くの窯跡の所在することを考えるとどの窯跡と断定することはできないし、またIとIIは記載内容が同一であるが採集期日の違いから同一地点のものとも言えないが現在の三ツ池の周辺であることには間違いない。また



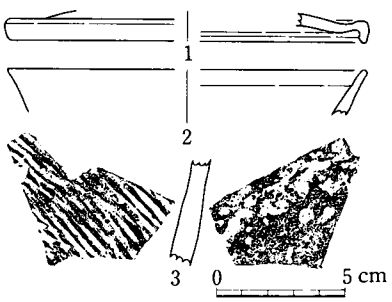
第 11 図　七尾高等学校保管の遺物

Ⅲについては、春木のみの記載でなお一層窯跡の断定はできない。以上のような状況であるが、ここでは一応参考資料として掲載させていただき若干その資料について説明をする。図の 1 ～ 6 は同日同地点採集遺物として扱えるものである。坏(無高台)1 は、口径 11.6 cm、器高 3.7 cm、底径 7.8 cm、2 は口径 14.2 cm、器高 3.8 cm、底径 10.0 cm を測るもので、いずれも器肉が厚く、体部の立上りも強い。1 の体部下位ではヘラ削りが施こされている。3 は高台付の坏で口径 12.8

cm、器高 4.1 cm、底径 8.0 cm を測る。身については、先の無高台坏と同様に体部の立上りは強く、体部の内外面にナデによる凹凸が顕著である。また高台は貼り付によるものである。4の蓋は、口径 12.2 cm、器高 2.4 cm を測り、つまみは扁平な宝珠形（ボタン状）をなす。天井部には粗いヘラ削りを施し他はナデである。端部は、やや外方へ屈曲して端部は断面三角形をなす。内面の口縁端部近くに重ね焼痕が見られる。5は瓶類の頸部片である。内面には成形時のシボリ目がかすかに見られ、そののち粗いナデを施している。6の甕は口径 23.5 cm を測るものであり外面では成形時の凹凸が甚しい。IIについては記載人が三名と言うことで同一地点での採集遺物として扱える。図化したのは7～12の6点であるが他に甕の胴部片が1点ある。7は無台坏であるが、口縁部を欠失していて全形は知り得ないが、体部の立上りは強い。底部にヘラ記号を有する。8は高台付坏の貼付した高台部を欠失するものである。体部立上りは強い。また特に内面では成形時のナデによる凹凸が顕著である。底部にヘラ記号を有する。9～11は、いずれも高台部分のみであるが、共通して高台の貼付が雑である。10、11の底部に「×」のヘラ記号を有する。12は、双耳瓶の耳の部分の破片である。ヘラ削りにより角ばって成形された大きな耳を胴部に貼付している。IIIについては春木地内のどこでの採集遺物か不明である。13～15の三点でいずれも無台の坏で、それぞれ口径 11.8 cm、12.5 cm、13.2 cm、器高 3.4 cm、3.8 cm、3.7 cm、底径 8.4 cm、9.2 cm、9.0 cm を測るもので器形、調整なども似通っている。以上が、同校保管の遺物であるが、IとIIについては採集年次に約1年のひらきがあるが、遺物観察の結果、同一窯跡からの可能性が大きい。

春木D地点の遺物（第12図）

県道瀬戸春木線に面し丘陵南側斜面に築窯されているものとみられる。県道の改良工事のために焼成部が切断されている。その上方は浅い谷地形を呈しておりまた、須恵器片、窯壁片が小量散布しており他の窯跡が存在する可能性が高い。灰原は切断されて存在しないこともあって遺物はあまり採集できない。図化し得たものも小破片で1は坏、2は坏蓋、3は甕の胴部片である。

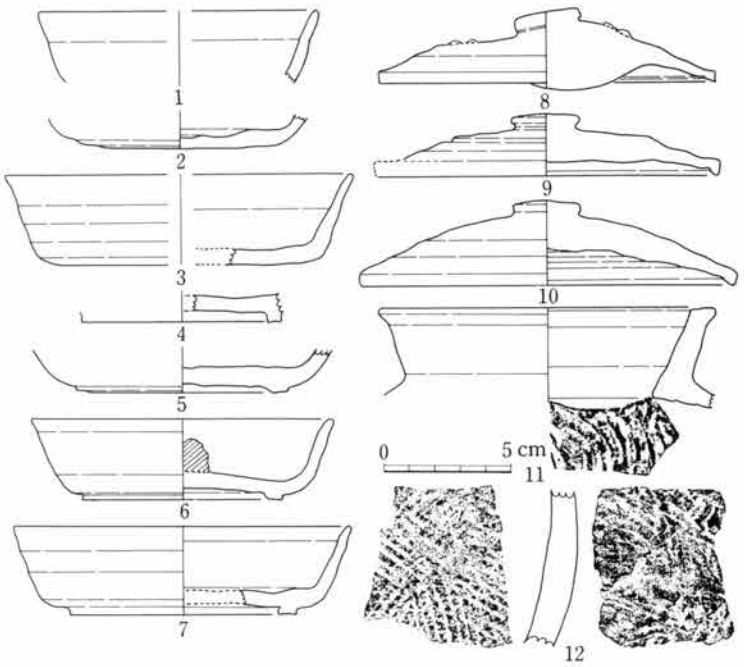


第12図　春木D地点の遺物

春木E地点の遺物（第13図）

県道瀬戸春木線中の養豚場の南東側で丘陵の南西斜面に存しており、一部県道の拡幅工事のために灰原の先端部が若干損壊している。1～3は無台の坏であるが全形を知り得るものはない。4～7は高台付の坏で、5では非常に低い高台を貼付している。6は完形であるが、坏内面に窯壁片が融着しており、また焼きひずみが大きい。腰部もよく張り、外傾度も強い。底部には断面四角形の低い台部を貼付している。口径 12.0 cm、器高 3.2 cm、高台径 8.0 cm を測るものである。7も同様のもので口径 13.4 cm、器高 3.5 cm、高台径 9.0 cm を測るもので低く断面四角形

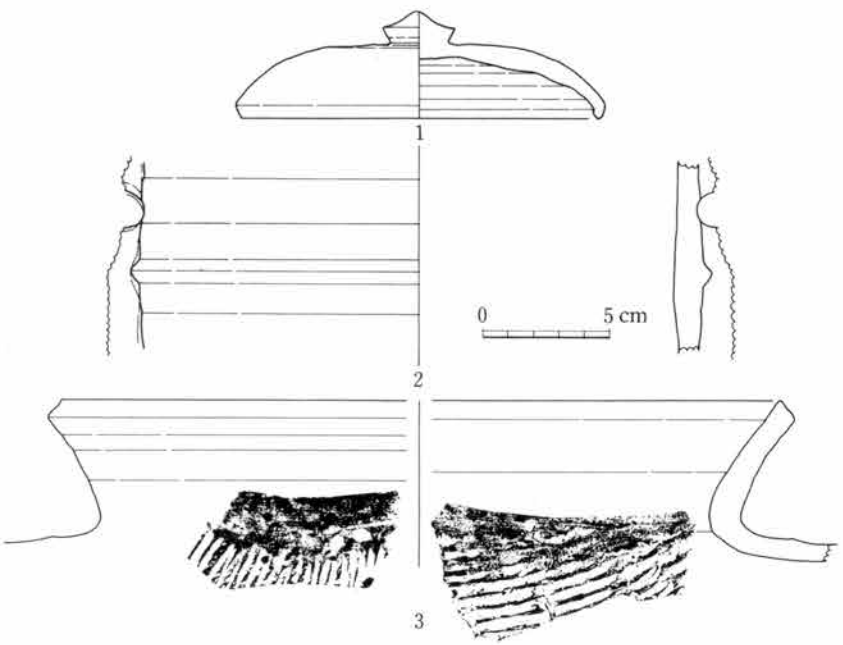
の高台を貼付している。8は口径13.3 cm、器高3.0 cmを測るものであるが、中央部に焼きぶくれのためにゆがみがみられる。つまみはボタン状の扁平なものであり、口縁端部は屈曲して断面三角形で鋭い。内外面ともにナデ調整で茶褐色を呈する。また体部外面に窯壁の融着物がある。9は口径13.4 cm、器高2.5 cmを測り成形、調整は8に近い。10は口径12.6 cm、器高3.4 cmを測るもので、器肉は非常に厚い。11は横瓶の口頸部とみられる。口径11.2 cmを測り、口縁端部では水平に近い面をもつ。体部内面には同心円状のタタキを施す。



第13図　春木E地点の遺物

瀬戸F地点の遺物（第14図）

瀬戸分校（現保育所）後背の南側斜面あり、用水、山道、炭窯の築窯などによりかなりの損壊を受けている。そのために特に用水中には多くの遺物が散布している。遺物散布の拡がり方から言っても、かなりの数の窯跡が存在しているものとみられる。1の蓋は、口



第14図　瀬戸F地点の遺物

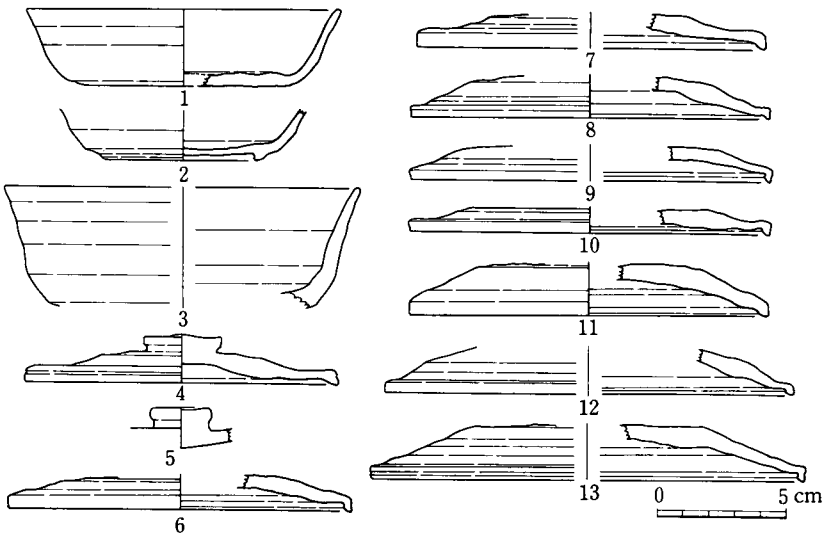
径14.2 cm、器高4.3 cmを測り、宝珠形のつまみを有する。つまみは径2.8 cmを測り鋭角的につくられ鋭どく稜をなす。体部はゆるやかに丸みをもった張りをみせ、口縁端部は内面に屈曲し、ぶ厚く丸い。2は双耳瓶で耳の部分に一条の突帯を貼付している。耳の形状は欠損していて不明であるが、かなり大きなものと推定される。内外面ともにナデ調整である。3は、口径57 cm以上に後元できる甕の口頸部である。頸部は強く外反し端部は平滑な面をもつ。外面には平行タタキ、内面でも平行タタキを施すが粗い。4は口径75.0 cmを測る大形の甕の破片である。口縁部は外反し、端部はつまみあげにより断面三角形をなす。口頸部の外面と内面には粗いハケ状具でカキ目を施す。特に内面頸部くびれ部分に甚しい。体部では外面に平行タタキ、内面では同心円状のタタキを施す。

花見月支群

今回、調査を実施した地点より上流域には連綿として須恵器、窯壁片が散布している。本山地の南西斜面では、大きく言って六ヶ所の地点で遺物の散乱状況がみられ、六基の窯跡の存在を想定しているが、実数はその倍近くになると推定される。窯跡前には夏でも冷い伊久留川の支流が北西流し、その上流域は、アベサンショウウオの生息地となっている。炭焼窯の築造や近年の県公造林などによって表面に表われた遺物を分布図に基づいて若干の説明を加える。

花見月G地点の遺物（第15図）

現在のところ私見上の最上端に位置するものである。造林事業の際に出土したものと思われ、採集したものでは、坏1点、高台付坏2点、坏蓋10点の計13点である。1の坏は、口径12.3 cm、器高3.0 cm、底径8.2 cmに復元できる破片で、体部はやや強く外傾し口縁部にいたりゆるく外反する。器肉は全体的に薄く仕上げている。2は高台付坏で底径5.8 cmを測る。体部はゆるく外傾し、高台は萎縮した後世の削り出しに近い形状のものを貼付している。全体に器肉は薄い。3は大振りの高台付坏の体部片である。4～13までは坏蓋の破片で全形を知り得るものはないが、ほぼ全形を復元し得る4についてみると、口径12.4 cm、器高1.9 cmを測り扁平な宝珠形のつまみを有するものである。口縁はゆるく内屈

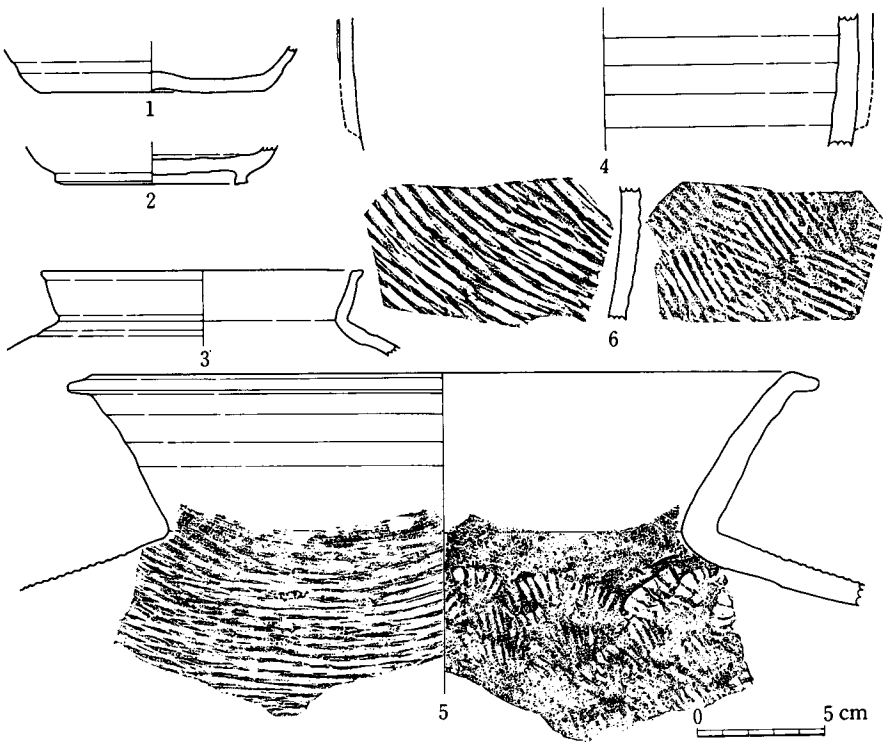


第15図　花見月G地点の遺物

し、端部は丸くおさまる。天井部 1/3 程度に雑なヘラ削りを施している。他は、口縁端部の形状に種々のものがある。断面三角形の鋭いもの、端部に面をもつもの、端部の丸いものなどである。全体に器肉も薄く、器高の低いものが大半を占めるようである。

花見月H地点の遺物（第 16 図）

1は、坏の底部片で全形を知り得ることができない。底径 8.8 cm を測る。底部はヘラ切り離しで、体部はゆるく外傾し口縁部に到るものと思われる。器壁は全体的に薄い。2は高台付坏で底部径 6.6 cm を測る。底部にはヘラ切り痕を残し、断面四角形の内屈する高台を貼付する。3は、壺の口縁部の破片であり肩衝壺か薬壺の部分と見られる。全面ナデにより薄く、丁寧に仕上げられている。4は双耳瓶とみられるが全形は不明である。5は、長く、しかも外傾する口頸部を有する甕である。口縁端部は水平に、つまみ出されている。体部外面は平行タタキ、内面では、花見月K地点採集のものと同様に花文状のタタキが施されている。6、7も甕胴部片であるが、内面にも平行タタキが施されている。



第 16 図　花見月H地点の遺物

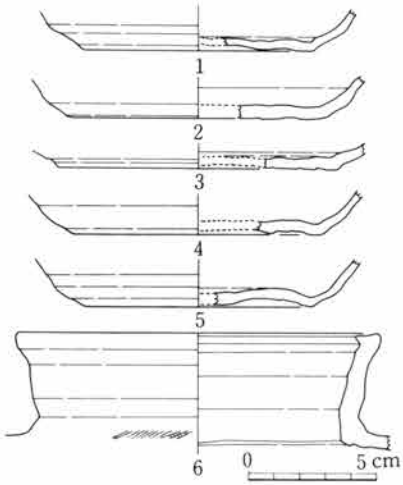
花見月I地点の遺物（第 17 図）

坏5点、瓶1点を採集した。坏も全形を知り得るものがなく、すべて底部片である。すべて、底部はヘラ切りで、体部の立上りもゆるい形となろう。器肉は薄く全体的に胎土も精良である。

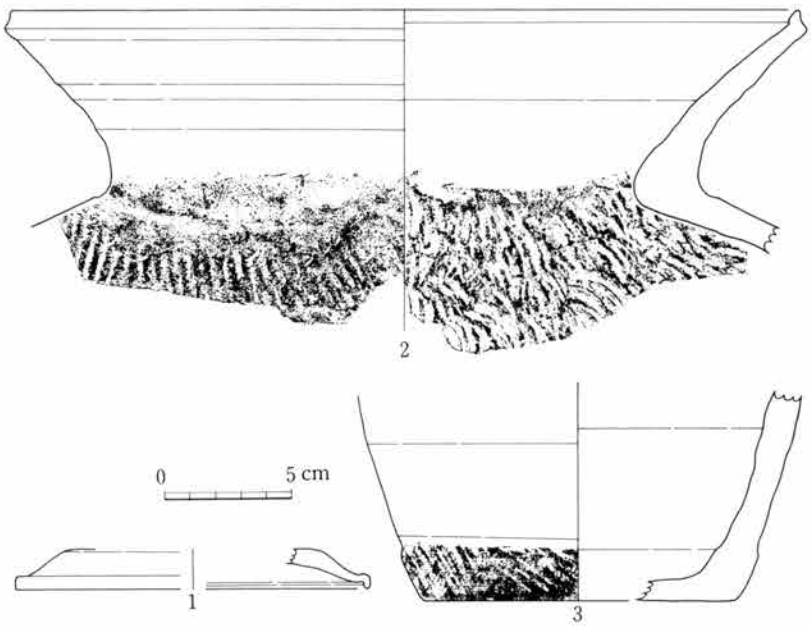
底径は 9.0 cm～11.0 cm を測る。7 は横瓶の口頸部とみられる。口縁端部は平坦で内面に端部がつまみ出される。体部内外面ではタタキが施されている。

花見月 J 地点の遺物（第 18 図）

1 は坏蓋で、口縁先端部は内面に屈曲する。小破片のため全形は知り得ない。2 は甕の口頸部で口径 31.0 cm を測る。口頸部は強く外傾し、口縁は面をもち端部はつまみあげられる。胴部外面では平行タタキ、内面では同心円タタキを施す。3 は底径 12.2 cm を測るもので双耳瓶の底部とみられる。外面底部近くには平行タタキが残る。



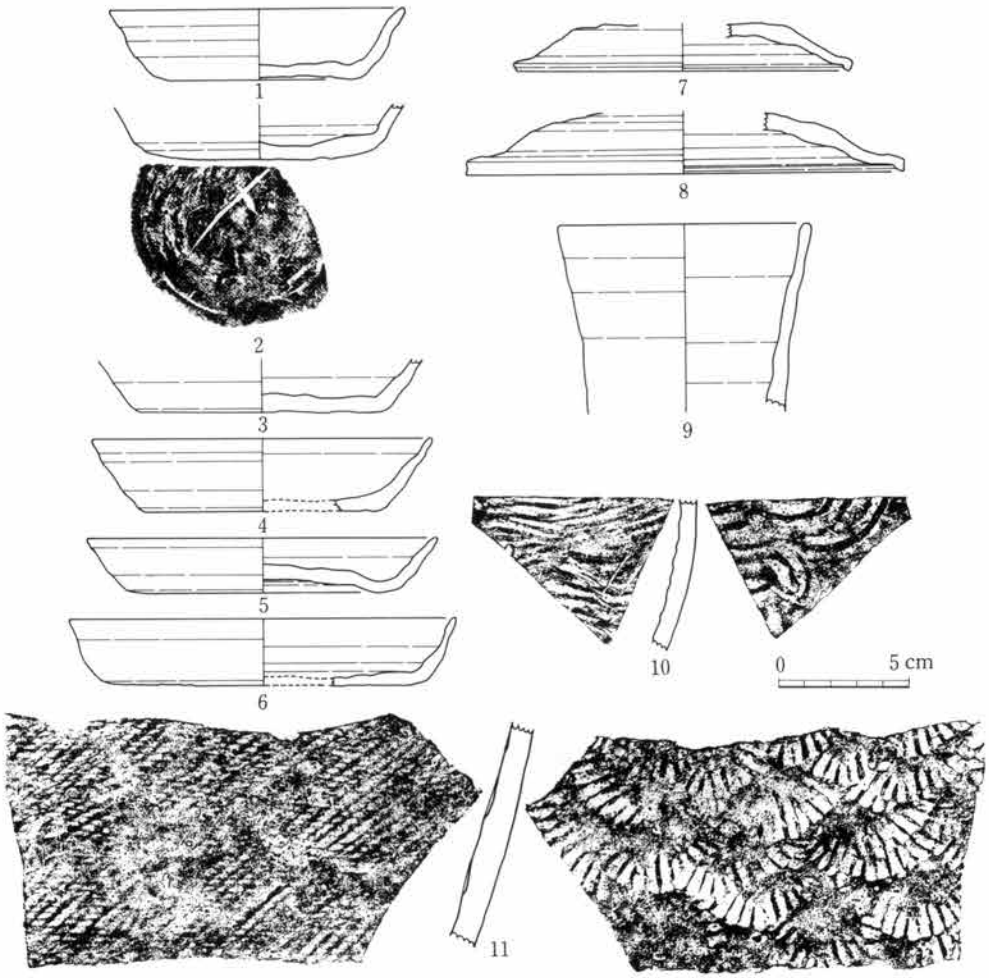
第 17 図　花見月 I 地点の遺物



第 18 図　花見月 J 地点の遺物

花見月 K 地点の遺物（第 19 図）

現在建設中の県道後山田鶴浜線と伊久留川とに狭まれた山麓西側斜面に存している。養鶏場に隣接した後背の斜面である。養鶏場の造成時、また斜面を横切っている用水路のために、かなりの須恵器、窯壁片が散布しているが、灰原の一部に損壊を受けている程度と思われる。浅い谷の先端でもあり、また周囲の斜面の傾斜からみて単独に一基が存しているものとみられる。採集した須恵器には、坏(無高台)、坏蓋、長頸瓶、甕の破片があるが坏が圧到的に多い。坏には、身の深いものと浅くて皿形に近いものとの二種類がある。1 は、口径 11.4 cm、器高 2.8 cm、底径 7.0 cm に復元できる 1/3 程度の破片である。底部は高台上にふくらみ底部はヘラ切りであげ底風に



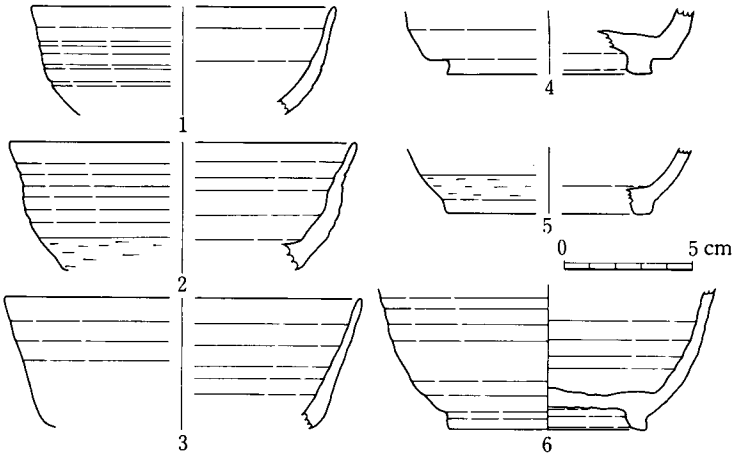
第19図　花見月K地点の遺物

なる。他はすべてヨコナデによるものである。2、3は底部のみの破片であり2の底部には箆記号がみられ、3の底部ではヘラ切り痕が渦巻き状に明僚に残存している。4～6は、口径13～15 cm、器高2～2.8 cmと口径に比して浅いものである。6は底部の切り離し、体部内外面の調整（ナデ）も丁寧であるが、特に体部内面ではヨコナデによる凹凸が甚しい。坏蓋7は口径13.0 cmに復元できるが、つまみの部分を欠失している。口縁端部は屈曲して角ばって巾広い。残存部はすべてヨコナデによるとみられ、天井部もまたヨコナデによると思われる。8もつまみの分を欠失するものであるが、口縁部はやや張り出し気味に屈曲し端部は鋭い。9は瓶類の口頸部の破片である。口径9.6 cmに復元できるが、内外面ともに降灰、自然釉のために観察不能である。10、11は甕類の胴部片であるが、10の内面のタタキは花文状（放射状）のものである。

花見月L地点の遺物（第20図）

鳥屋町老人いこいの家の敷地端（南西側）の小谷に面し窯跡が所在しているようである。小川

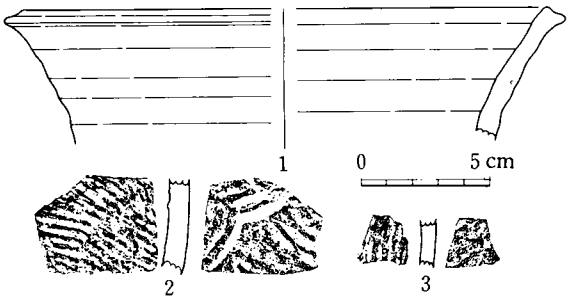
の中で遺物は採集される。すべて坏のみで全形を知り得るものはないが、図化できたものは6点で高台付坏とみられる。1、2は坏部であるが体部内外面、特に外面に調整段階についたとみられる凹凸が甚しい。2は体部下方、高台近くにヘラ削りが認められる。4～6は高台部であるが断面四角形のかなり厚いものを貼付している。底部には渦巻き状のヘラ切痕を残す。6でも解かるように高台からすぐ体部が強く立ち上りかなり身の深い坏形となる。内面に重ね焼きの痕跡を残す。



第20図　花見月L地点の遺物

若狭見M地点の遺物（第21図）

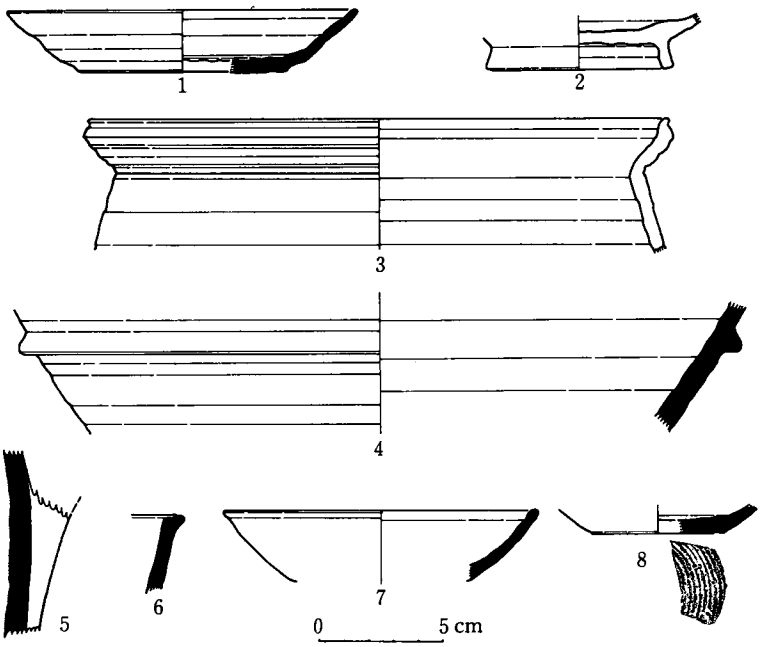
若狭見から大槻へぬける道路沿いの南側斜面に存在している。道路の拡幅によって切断されており焼成部の部分と推定され、その幅1mを測る。灰原が消失しており遺物は図化し得た3点の採集のみであった。1は甕の口縁部でゆるく外反し内外ともにヨコナデによる凹凸が顕著である。2、3は甕の胴部片である。



第21図　若狭見M地点の遺物

後山窯跡群の遺物（第22図）（第7図）

伊久留川の上流、鹿西町後山地内3地点4基以上の窯跡の存在が知られている。A地点では南側斜面を利用して構築されているものと思われる。第22図の1～3はA地点採集のもので1は須恵器坏、2、3は土師器である。集落遺跡との複合なのか判断しかねるが傾斜面での同時出土と言うことで土師器を併焼しているか、単独に土師器窯が存在するかのどちらかと考えられる。B、C地点は小谷を狭んで対峙している。B地点は地形的には、かなり勾配が急なので気がかりであるが、相当量の須恵器片と窯壁片が散布している。遺物は細片が多く図化できたのは8の一点のみで底部には糸切り痕を有する。C地点の緩やかな南西斜面には二ヶ所に集中して須恵器、窯壁片の散布する所がある。4～7がC地点の須恵器であるが、4は傾きが逆さの可能性もあるが、丁寧な造りの双身瓶の胴部とみられる。



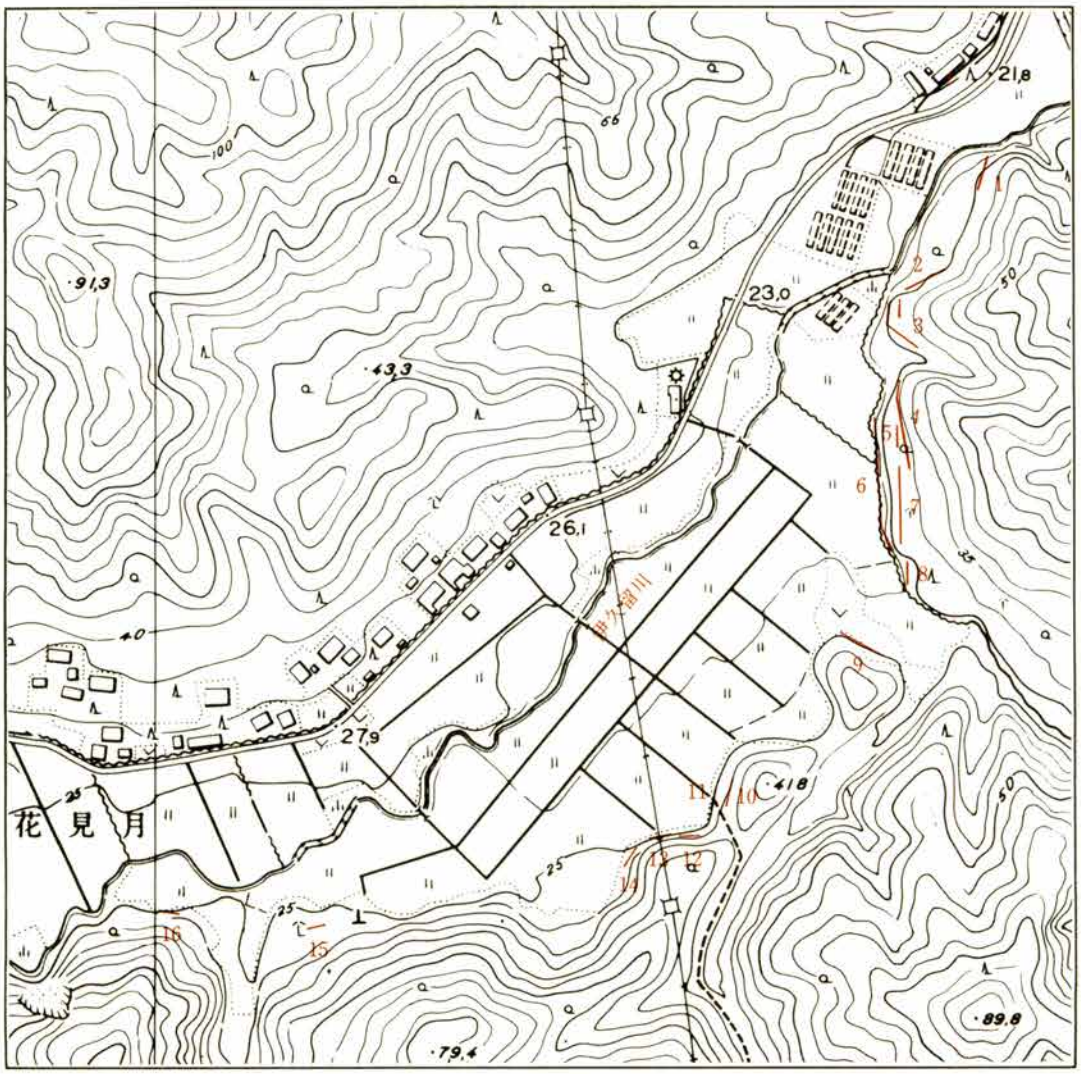
第22図　後山窯跡群の遺物（石川考古第126号より転載）

第II章　調査に至る経緯

第1節　経　　緯

能登有料道路上棚Ⅰ・Cから鹿西町後山、鳥屋町花見月、瀬戸、大槻地内を経て主要地方道七尾羽咋線と鳥屋町新庄地内で結ぶ県単高速ネットワーク大規模幹線道路改良事業が立案され、埋蔵文化財に関する協議がもたれるようになったのは、昭和55年度に入ってからである。計画路線のうちで特に鹿西町後山から鳥屋町瀬戸に至る同町花見月地内は多くの須恵器窯跡の所在する区域でもあり、また山麓を削平して新設される今回の計画では多くの埋蔵文化財がかかり、またその調査にも莫大な期日を要するので路線を変更するように再三申し入れを行ってきた。しかし、一部用地の買収の終った区域もあり、また正式ルートを発表した後でもあり部分的に着工せざるを得なくなり一般県道後山田鶴浜線との取付け部分の瀬戸地内140mについては、現地での立合い調査をすることとなったが、幸いにも埋蔵文化財は発見されなかった。つづいて、予定路線周囲の踏査を鹿西町後山から鳥屋町瀬戸地内にかけて実施した。その結果、後山地内では二地点にわたって約3基の窯跡の灰原が確認され、一部灰原の裾部に支障をきたす部分については、工法の変更を、また詳細な試掘調査の実施が必要な旨、回答をした。一方、花見月地内においても10数基の窯跡の灰原が確認され、事前の試掘調査による分布確認が必要であり、さらにその結果をもとに路線変更ができないか協議を続行することとした。昭和57年度に入って用地買収の完了と

ともに試掘調査の依頼が提出され、別添図（第23図）のように16のトレンチ（巾約1m）を設定し調査を行った。（昭和57年6月17日～7月17日）その結果は、3、4、5号トレンチ周辺部では、3号トレンチに須恵器片一点を検出した。その層序は、第I層表土15cm、第II層暗茶褐色土25cm、第III層濁褐色砂層15cm、第IV層の地山に到る。この須恵器片は第III層から出土したので、さらにその上方に二ヶ所の試掘穴を設定して調査にあたったが、遺構・遺物の検出はなかった。層序についても3号トレンチと同様で、その須恵器についても路線外の上方斜面からの流入とみられた。4号、5号トレンチもほぼ同様に遺構・遺物の検出はなかった。4～8号トレンチ周辺部は、15～16年前まで水田として耕作がなされていた部分で、丘陵斜面を削平して造成されたものである。7号トレンチでは、須恵器片、窯壁片が比較的多く出土した。トレンチ東方では削平を受けている部分もあって耕作土、床土のみの個所もあるが、西端では耕作土の他に包含層



第23図　試掘トレンチ配置図（数値はトレンチ番号）（1/5,000）

が残存しており、焼土床の検出があった。また5号トレンチ、6号トレンチでも数点の須恵器片を検出した。4号、6号トレンチは、旧用水路であるが、その崖面を精査したところ、いずれも数点の須恵器片が上方斜面からの流入として検出された。9号トレンチからは縄文式土器底部片一点が出土した。第Ⅰ層表土10cm、第Ⅱ層暗茶褐色土25cm、第Ⅲ層黒色土55cm、第Ⅳ層暗黒褐色土85cm以上となり、縄文式土器片は第Ⅲ層から検出した。なお、表土以下の土層については自然堆積層と考えられ、遺物は何らかの理由で流入したものと判断された。11号トレンチでは、須恵器片2点を検出した。出土状況に不明な点が多いので、さらに上方に9、10号トレンチを設定して調査した。表土下1m以上の黒色土が厚く堆積しており、それも自然堆積と考えられ路線外の上方斜面からの流入とした。14～16号トレンチでは遺構・遺物の検出はなかった。

以上の結果から県土木部に対して、7、8号トレンチ付近には埋蔵文化財が存在するので、その保存について協議したい。また、3号、8号、9号トレンチ周辺部では近隣に埋蔵文化財の所在する可能性が高いので事業実施にあたっては、充分に注意をし、埋蔵文化財を発見した場合には、当センターとすみやかに協議するようあわせて回答をした。一方、これを受けた道路建設課では、県の最重点路線であるので本年度中に発掘調査を済せてほしい旨、依頼があった。センターも事業年度中半と言うこともあり、新たに発掘調査計画に組み入れることは難しいとのことから次年度送りとなった。かくして昭和58年4月22日から発掘調査を開始した。

第2節　調査日誌抄

4月22日㈮　雨　事業主体者の七尾土木事務所で調査にあたっての打ち合せを行なう。流木の件、調査個所の優先順位の件、人夫の件、排土位置の件などの相談をする。

5月4日㈬　晴　現場事務所の仮設および調査器材の搬入をする、地元町会長へ調査にあたっての協力を要請する。一部搬入道路の補修と、調査前の地形測量について調査員と現地の踏査をして協議をする。

5月6日㈮　曇　草刈りを開始する。これより以降5月21日㈯まで草刈りと合せて地形測量（1/100、25cmコンター）を実施する。分布調査の時点では草木の繁茂のため詳しく解らなかった点が明らかとなってきた。自然の傾斜面が残存していると予想されていた地点が、水田造成時の盛土部分であったり、かなり傾斜面においても地すべりを起し崩壊しているなど排土処理が問題となってくるものと思われた。また、路線外上方斜面においては、新らたに灰原の一部が確認された。

5月23日㈪　晴　地形測量の最後のツメを行なう。調査前の写真撮影を行なう。調査にあたっての5m方眼の杭打ち、縄張り、ベルトコンベアの設置を行なう。

5月24日㈫　晴　先に協議した優先順位に従ってA区より排土を開始する。耕土および盛土中にかなりの須恵器片を検出する。

5月25日㈬　晴　盛土下に溝状遺構を検出する。これより以降6月3日㈮まで開田の際の1m

を超す盛土の排土に苦労する。A－3区盛土中より瓦塔片を検出する。

6月4日(土)　晴　A－3、5、6区の盛土の排土を続行する。試掘調査の時点では、盛土下の黒色土は自然堆積層と考えていたのであるが、本層より若干の縄文式土器を検出する。A区の中でも3、5、6区に限られるようであり、包含層が遺存するものと考えられる。これより6月17日(金)まで盛土の排土およびセクションベルトの断面図を作製する。

6月18日(土)　晴　盛土排土後、黒色土に切り込む溝状遺構の検出を行なう。窯壁片とともに大形の須恵器片が多く検出される。これらは検出状況より開田の盛土の際に埋め込まれたものと観察された。故意に岩石と同様に扱かわれたものと推定される。

6月22日(水)　曇　先に確認された縄文時代の包含層が残存するA－3、5、6区の調査を開始する。包含層ではあまり遺物は多くない。6月27日まで縄文包含層の遺物検出と遺構検出に努める。B区についても表土剝ぎを開始する。

6月28日(火)　晴　開田の際に損壊を受けたと見られる深鉢を伴なう土坑、集石土坑等が検出される。集石土坑の岩石は頭大から拳大のものが、積め込まれ、そのほとんどが、火を受けて、もろくなっている。これら遺構の写真撮影、遺構実測、遺物取り上げなどを7月2日(土)まで行なう。

7月4日(月)　晴　B区（11－G、H、12－H、13－G、H、14－G、H）の床土および盛土の一部を排土する。11－G、H、12－G、H、11－F、12－F区にかけて床土、盛土に混じって須恵器片が非常に多く検出される。開田の際の盛土が予想外に多く谷側では2mを超す個所もあり、その排土に難行し7月18日(月)までかかる。

7月19日(火)　晴　57年度の試掘調査で確認されていた焼土坑を検出する。焼土坑の検出とあわせて、セクションベルトの土層断面図などを作製する。焼土坑より斜面下方で検出された縄文期の土坑についても検出作業を続行する。これより7月30日(土)まで、焼土坑の検出、測図、写真撮影、縄文期の土坑の検出、セクションベルトの取りはずしなどを行ない、段々と終了に近づく。

8月1日(月)　曇　時々雨　調査区全域の遺構配置図を作製する。全体の整掃を行なう。また、個別の測図も行なう。8月4日(木)まで行ない全体の写真撮影も終了する。8月5日(金)に図面類の点検と器材撤収、現場の仮設小屋の撤去もあわせて行ない、現地での作業を一応完了する。

第Ⅲ章　層序と検出した遺構

第1節　層　　序

昭和57年6月に実施した試掘調査により部分的には確認済であったが、その大半は樹木の繁茂と永らく荒地となっていたために試掘調査時には確認することができなかった。昭和58年に入っ

第 24 図　調査前の地形図

て調査前の樹木の伐採が済むころから、古くの開墾により水田あるいは畑地と（A、B区とも）なっており旧地形を大幅に変えていることが判明してきた。また、前面を流れる伊久留川の支流の氾濫などにより刳り取られたり、小規模な切辷りを起していたりしていた。(調査にあたっての地区割は予定路線のセンター番号 1,100 番と 1,140 番を延長し 3 mごとに1、2、3…とそれに直交する軸も同様に西からA、B、Cとしその交点をA1のように呼称した。また、調査区を南北に分断する山道により南側をA区、北側をB区と便宜的に吸称した。)A区では、I－9、J－9、J－8の地点では県公造林により杉が植林されているが5～6年生である。その以前は水田であったようである。また、J－6、J－7ではほぼ旧地形であるが、下流の方に若干地辷りを起しており、その東側K－6、K－7は水田であったとみられるが竹藪と雑草が蔓り確認できない状況であった。I－9、J－8、J－9の旧水田部分では厚さ 15～20 cm の耕作土、さらに 20～30 cm の黒色土と黄褐色砂土の混じた盛土、さらに黄褐色砂土の移動した土層、その下部が旧表土の黒色土となるのが一般的であるが、部分的に若干の相違がみられる。また、旧表土の一部についても開田に際して削平された部分も多くみられ、黄灰色砂土が露われている。遺物とくに須恵器は第II層と第III層中に多く混じている。また、盛土と旧表土の間でも若干の須恵器と鉱滓、数片の縄文土器片を採集した。開田前に存在したA－1号溝、A－2号溝とくにA－1号溝については、上方斜面より搬入されたと考えられる木炭、窯壁、焼土、須恵器で充塡されていた。また、K－6、K－7の部分でも基本的な層序は変らないが、調査区の山側では盛土は 1.40 mを測る。その盛土下に縄文期の包含層が存在した。この黒色砂土の包含層も緩傾斜面であるために流失してなくなっていたり、開田の際に削平された部分もみられる。割合と良く遺存している所で、その厚さ 10 cm を測る程度である。検出したA－1号からA－5号土坑は全て地山とみられる黄灰色砂土の面で検出した。A－2号土坑の深鉢型土器の検出状況をみても上半がほぼ水平に欠損しており、開田の際かそれ以前に包含層の一部が削平されたことが伺える。一方B区では調査区西側の平坦地部と南、東側の斜面との部分とに分けられる。平坦面では 2 ～30 年生の杉が整然と植林され、その下が竹藪となっていた。植林以前は水田であったと思われる。南、東側斜面では竹藪で密生していた。H－10、I－10 では崖崩れを起していた。また、E－11、F－11 についても同様である。調査区東側では段状をなしその上に狭い平坦面があり用水路として使用されていたらしい。その崖面（J－12）に灰原の一部が露呈している。平坦面の北東側約 1/2 については、厚さ 2 ～30 cm の耕作土のみであった。この部分は開田の際に甚しく削平された部分である。斜面部分のF－12 では厚さ 2 ～30 cm の耕作土、つぎに 10～15 cm の黄褐色粘土、10～80 cm の黄褐色粘砂土、10～20 cm の濁黄褐色土、さらに 10～45 cm 暗茶褐色土、若干の黒色土の遺存する所があって地山とみられる黄褐色砂土となる。第1層から第6層までは開田の際の盛土とみられ最大でその厚さ 2 mを測る。また、その盛土は山側から谷側に向ってレンズ状を呈する。須恵器の多くは第3層から第5層の間で検出した。B－4号焼土坑は黄褐色砂土の地山を穿って築かれて

いた。他の土坑も黒色土下の無遺物層の地山とみられる面で検出した。本来、縄文期の包含層となる黒色土は平坦部では削平され遺存せず、斜面でも流失しており僅かにF－12、G－12、G－11に薄く遺存していた。縄文期の遺物も土器片の細片数点を検出したのみであった。

第2節　検出遺構

A－1号土坑　K－6地点で検出したもので平面形はほぼ円形を呈し、短径95 cm、長径92 cmを測る。もと平面形は正円形に近い形状であったものとみられる。深さは検出面より北側で56 cm、中央部で58 cm、南側で51 cmを測り、やや中央部がへこむ。坑底は楕円形で長軸58 cm、短軸34 cmを測る。土坑覆土は黒色土一層であり、縄文土器細片1点を検出した。無文、細片のため時期不明である。

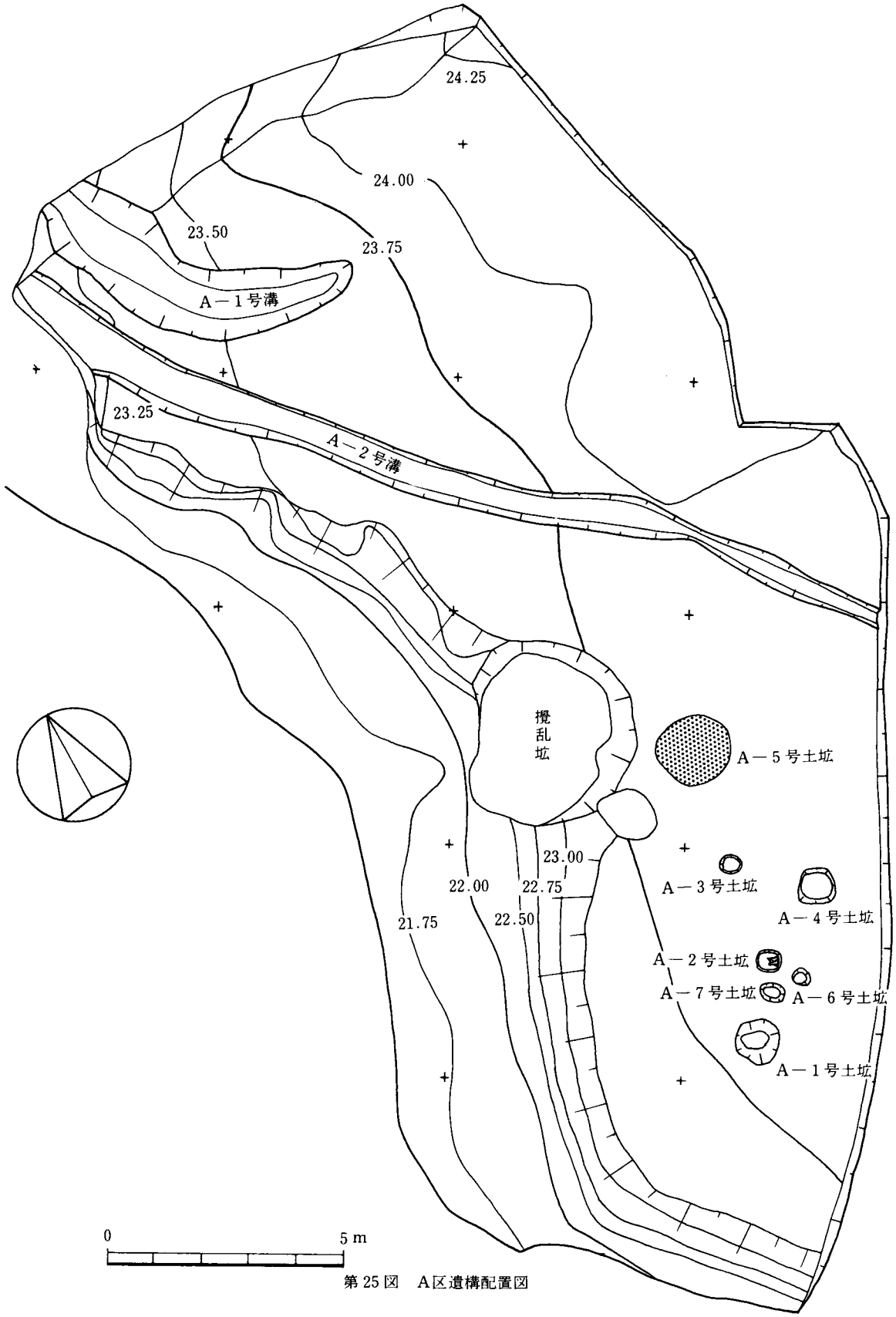
A－2号土坑　K－6地点で検出したもので平面プラン楕円形を呈するものである。長径56 cm、短径44 cmを測り、深さは検出した面より19 cmを測り坑底はほぼ水平である。東側に寄って縄文深鉢形土器1個体を検出した。上半と底部は欠損している。(第27図) 上半については包含層が削平された時に欠損したものとみられ、底部はもとより欠損していたものとみられる。口縁内面で深さ5 cm、残存胴部下端で14 cmを測り、壁に斜めに納置されたものとみられる。

A－3号土坑　K－6地点で検出したもので平面プラン楕円形で長径47 cm、短径40 cmを測り、深さは検出した面より13 cmを測り坑底はほぼ水平に近い。黒色土の覆土より縄文土器15点を検出したが、いずれも無文、細片のために時期を判別できるものはない。ただ遺物の器壁の薄さ、胎土などから後期の一群に含まれよう。

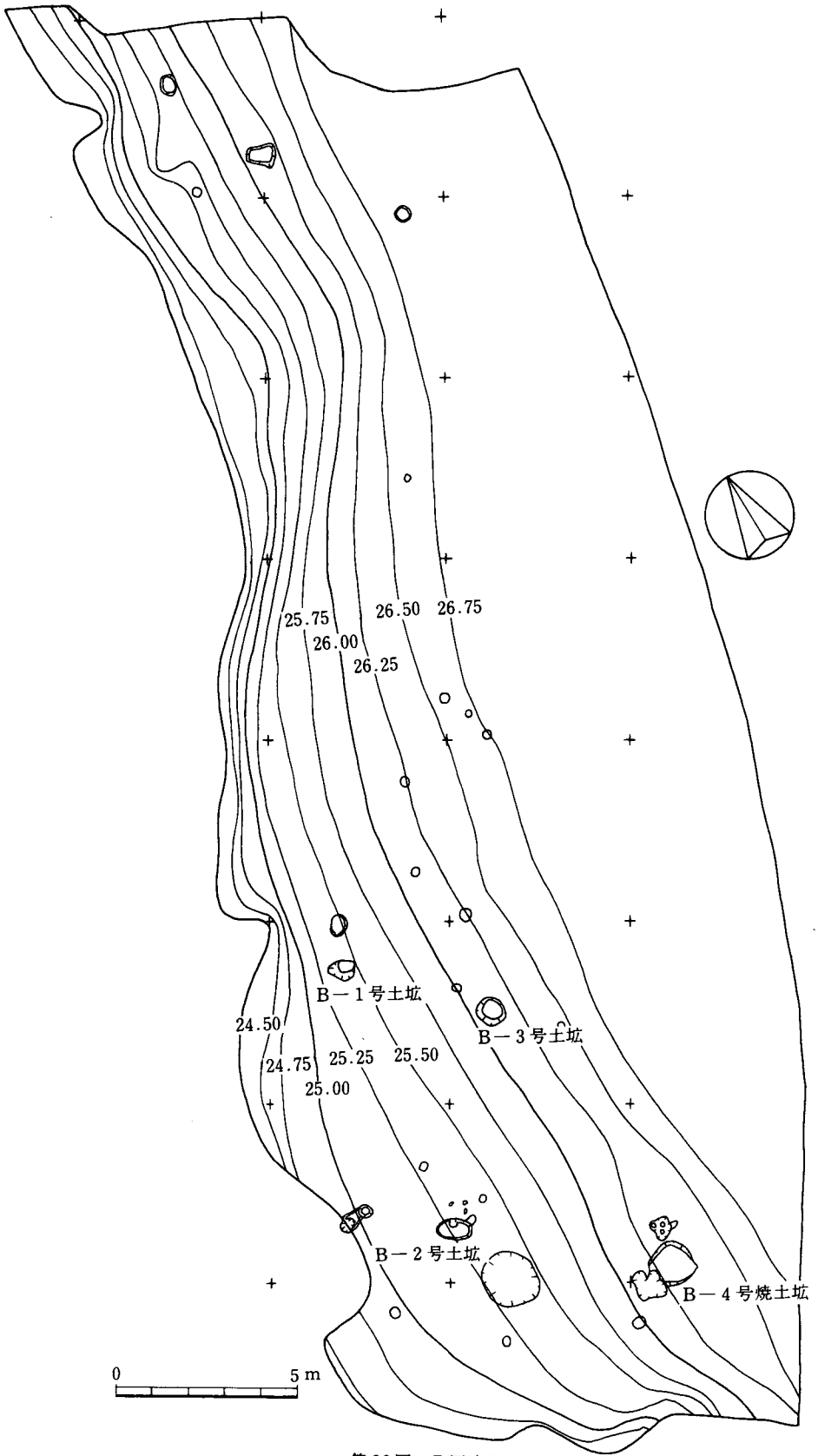
A－4号土坑　同じくK－6区で検出したもので、平面プランは長径77 cm、短径75 cmを測るがもとはA－1号土坑同様に正円形に近い形状のものであったと思われる。深さは検出した面より63～65 cmを測りほぼ水平である。坑底プランは、ほぼ円形に近く長径67 cm、短径57 cmを測るものである。遺物の検出はなかった。

A－5号土坑　K－7区で検出したもので平面プランはほぼ円形に近く長径160 cm、短径148 cmを測るものである。坑底は皿状に凹み、最高深度(坑底中央部)は48 cmを測る。坑内は黒色土の覆土とともに拳大から頭大の山石で充塡されていた。いわゆる集石遺構であるがほとんど石で充塡されていたと言ってもよい。山石は全部で1,150数個を数えたが、全部に加熱が加わっており、とりあげの際に割れるものが多かった。調査地点で岩石はほとんど見られなかったが、近くの丘陵斜面に露頭している通有の長石を多く含み長軸方向に割れ安いものである。また、伴出遺物は皆無であった。

A－1号溝　I－9、H－9にかけて検出したもので孤状を描く。下流端は山道に切られ、その部位で最大幅を示し190 cmを測り深さ145 cmを測る。この溝については、層序のところでも記述したが、開田の際に埋められたものである。A区での大半の遺物（須恵器）はこの溝より出土



第25図　A区遺構配置図

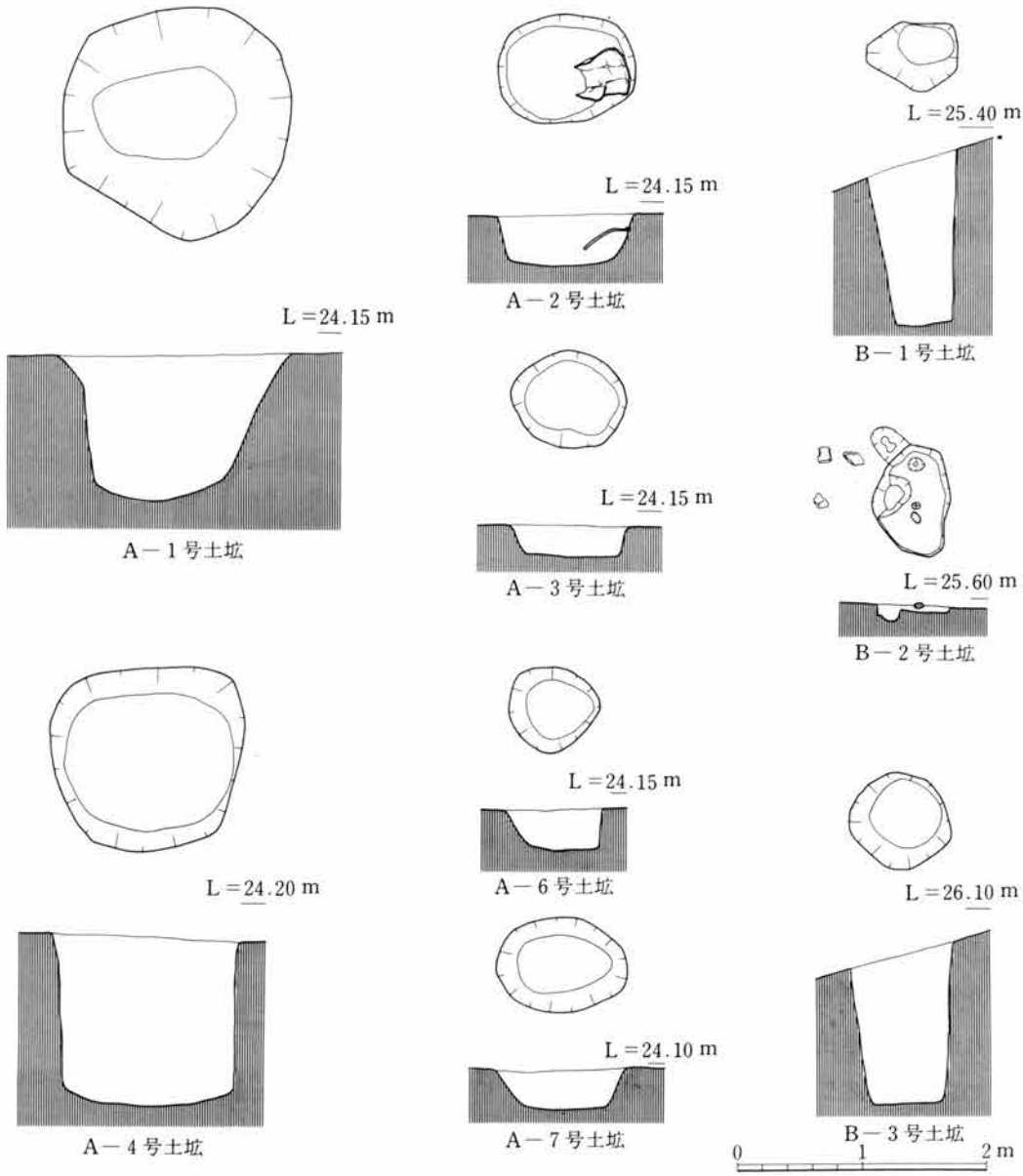


第26図　B区遺構配置図

している。現在の山道は斜面大きく切って作られているが、それ以前に使われた山道と思われる。A－2号溝についても、開田の際に同様に埋め戻されたものと考えられる。

B－1号土坑　F－13で検出したもので平面プランは不整形、長辺72 cm、短辺56 cmを測るものである。深さは検出した面から山側で140 cm、谷側で118 cmを測るが坑底はほぼ水平に近い。坑底プランは楕円形を呈し長径44 cm、短径32 cmを測るもので覆土は黒色土一層のみであった。遺物は縄文細片一点のみであった。時期を判別できるものではない。

B－2号土坑　F－12、G－12にかけて検出したもので平面形は不整形で長軸90 cm、短軸62

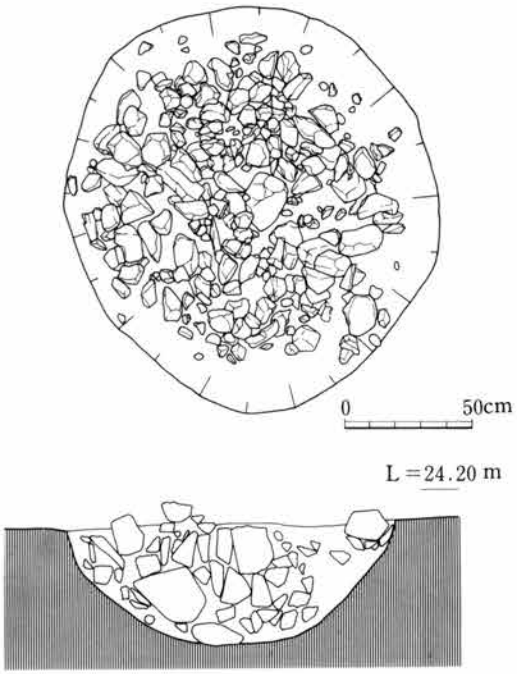


第27　A、B区土坑

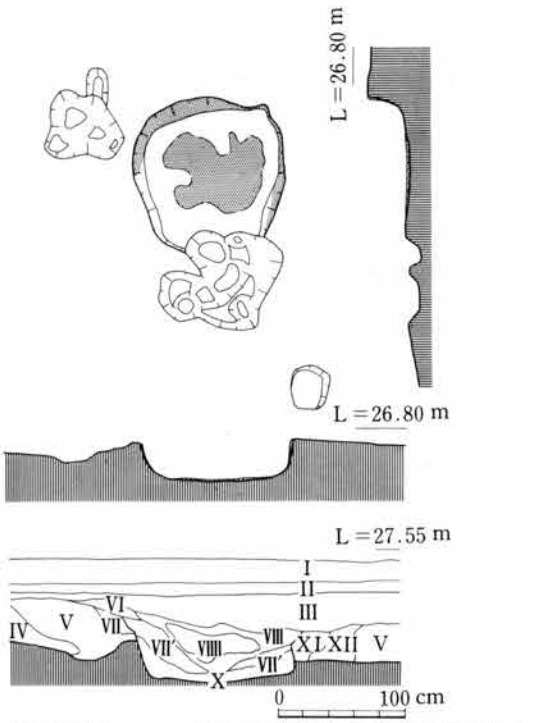
cmを測り、坑底は水平に近く深さも6cmと浅い。坑底北東、東寄りにそれぞれピットがある。それぞれ深さは17.0cm、18.0cmを測るものである。坑中央部に磨石1点が伴出する。

B－3号土坑　G－13で検出したもので平面プランは、ほぼ円形に近く長径80cm、短径74cmを測り、深さは検出面より山側で132cm、谷側で112cmを測るが坑底は水平をなしほぼ径52cmの円形をなす。覆土中から縄文土器細片を採集したが時期を判別できる資料ではない。

B－4焼号土坑　H－11、I－11で検出したもので、ほぼ円形の焼土坑とその前面の不整形なピット群とからなる。焼土坑は平面プランほぼ円形で南北116cm、東西112cmを測り、坑底もほぼ同様円形に近く104cm、100cmを測り壁の立上りも垂直に近い。深さは検出した面から北、東、南で32.1cm、27.7cm、25.6cmを測る。全体に焼けているが、とくに坑底中央部と壁では東、南側が顕著である。（壁については、全面に焼けていたのであるが、57年に実施した試掘調査で一部損壊をうけたものである。）その厚さも1～3cm程度である。覆土中央部にレンズ状に溜る黒色炭層中から2個体分の須恵器坏を検出した。炭は坑底面においても少なからず認められた。他には伴出遺物はなかった。前面の不整形なピット群には黄褐色砂土に混じって炭、灰が見られ前面に掻き出したものと思われる。ピットの深さは一定しておらず14.3cm、16.8cm、19.2cm、13.3cmを測り、それぞれ不整形なものである。



第28図　A－5号土坑



第29図　B－4号焼土坑

他に検出した遺構では、G－12、G－11に径154cmを測るほぼ円形に近く、深さも4～12cm程度の浅い皿状の土坑がある。風倒木痕と思われる。また、不整形な土坑、不明のピットなどがあるが個々の説明については省略する。

第Ⅳ章　出　土　遺　物

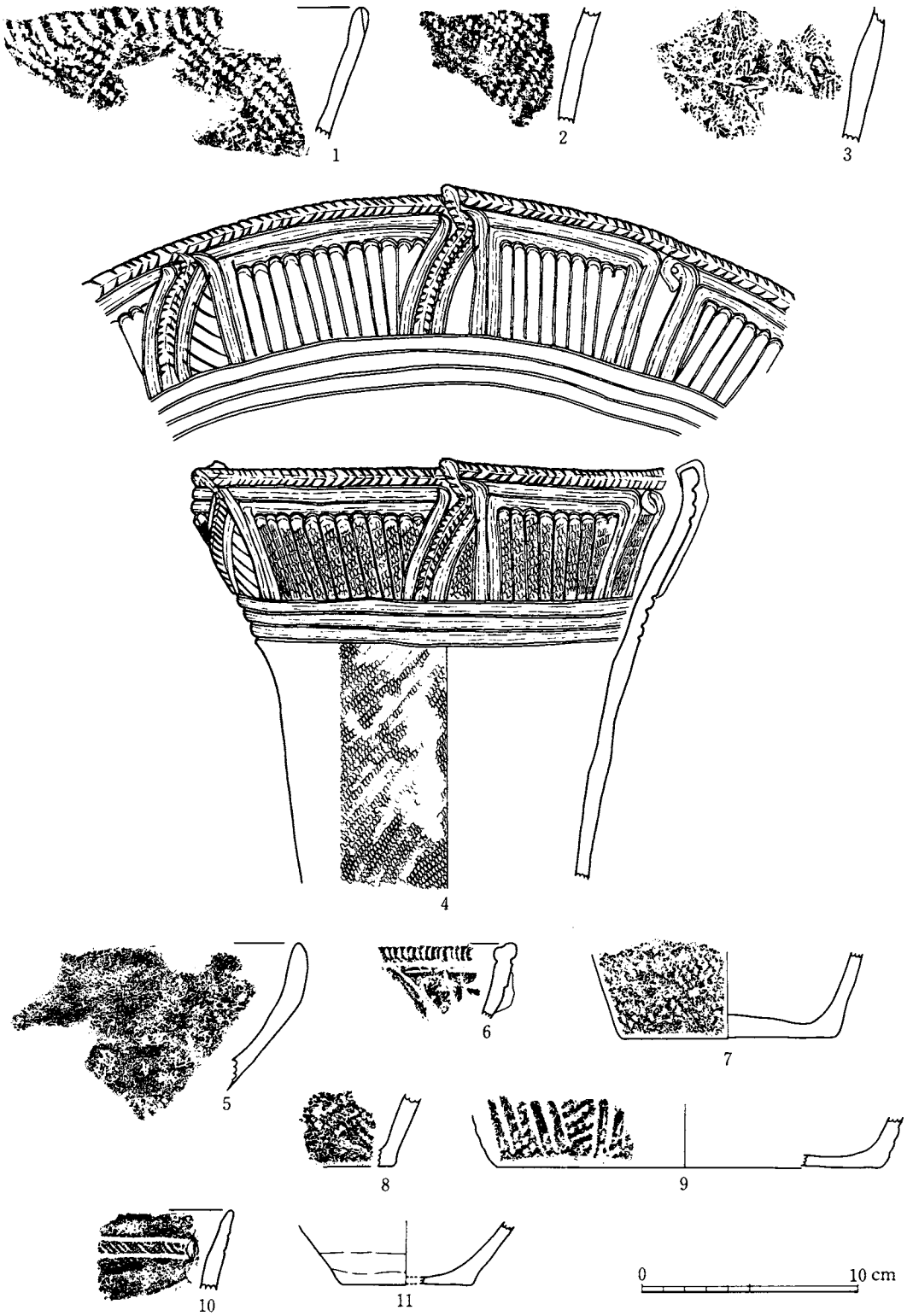
出土状況は、前述したように遺構に伴なって検出されたものは少なく、形態が判るものはA－2・4号土坑より検出した縄文土器と近世と考えられるA－1号溝より検出された須恵器である。その他は、耕作土か流土か、または開墾による盛土中より検出したものが大半を占める。以下、図化遺物について、簡単に説明する。

第1節　縄文土器（第30・31図1～13、図版18、19）

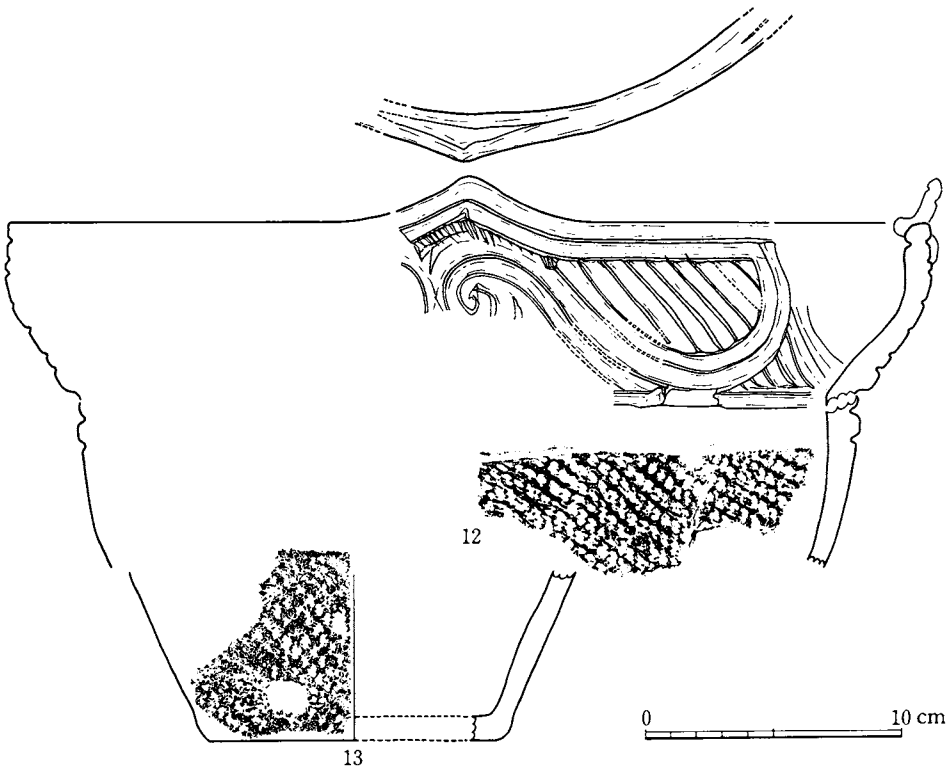
A区に集中して検出され、遺物量も少なく、石器類は検出されていない。

1～3はA－4号土坑よりの検出である。1は平口縁と考えられ、直線状に外傾し、端部は丸い。斜行縄文（RL）を施し、口縁部にきざみ目を施す。体部外面に煤が付着し、黄褐色を呈し、胎土は細粒砂を含み、焼成は普通である。2は、1と同一個体とも考えられる体部片で、羽状縄文を施す。3は、やや磨耗するが、不規則な波状の貝殻条痕？が施され、暗茶褐色を呈し、胎土は1～3mm程度の砂粒を含み、焼成は普通である。1～3は、器表面に繊維痕が認められる。以上の点から、これらは縄文前期初頭の佐波式と考えられるが、田鶴浜町吉田野寺遺跡[1]、能登島町半の浦縄文遺跡[2]に近似品がみられ、同型式でも新しい時期と考えられる。

4は、A－2号土坑より検出した深鉢形土器である。円筒形の胴部が上半部で外傾し、口縁部でやや内傾する。口径23.2cmを測る。文様は、口辺部に半截竹管を押し当てて花弁状部を作り出した約4.3cmと長目の蓮華状文を配し、半隆起線で囲む。線は平行沈線的で地文の縄文が残る。この蓮華状文を1単位とするなら、5単位に配分されるとみられる。現存3単位であるがそれぞれ異なり、口唇部に段をもち、逆「く」の字状に下がる隆帯で区画するもの。段をもたない隆帯で欠損して形状不明であるが口唇部に突起が付くもの。隆帯の下に「9」の字状に半隆起線が下るものがある。隆線上に綾杉文が刻まれ、頸部に3条の半隆起線を引き、胴部と区分する。胴部には、やや磨耗するが斜行縄文（LR）が施される。暗褐色を呈し、胎土は砂粒を含み、焼成は良い。5は、外傾し、直立して先細となる口縁部で、無文である。6は、やや外傾する口縁端部に隆帯を貼り巡し、口縁端部内面を半截竹管で押圧している。隆帯に爪形文を施す。7～9は、平底破片である。7・8には斜行縄文が、9には縦に半隆起線を施す。底部は無文である。10は、端部が先細となる口縁部片である。2条の沈線を施し、沈線間の斜行縄文を残し、その他を磨消して



第30図　縄文土器実測図（S＝⅓）



第31図　縄文土器実測図（S＝⅓）

いる。11は、外傾する無文の平底片であり、底部にヘラミガキを加えている。12は、胴部がやや彎曲し、口縁部で外傾し、直立する。口唇部に山状突起を付し、口辺部は入字状の渦巻状文を施し、残部は三叉状文を施す。渦巻状文の上下に半隆起線が巡り、下部には剝離痕がある。胴部は、斜行縄文（ＲＬ）を施す。13は、12の底部である。胎土・焼成は良い。

以上の点から、4は、上山田第III様式第6型式[3]、古府第II群上山田Ｉ式土器群[4]、赤浦第Ｉ期[5]に類似がみられ、12は、古府第VI群上山田III式土器群[6]に類似がみられる。属する年代は若干の問題もあるが、縄文中期中葉と考えられる。5～9も同期のものであろう。10、11は縄文後期中葉と考えられる。

第2節　須恵器・土師器・その他

坏（第32図1～13、図版9）

1～3は、大きく外傾し、直線的に立ち上がる口縁で、器壁が薄い。1（A－1号溝）は、強い横ナデ凹凸を成す。口径は、順に12.8cm、13.0cm、13.6cmで器高2.7cm、2.8cm、2.5cmを測り、胎土は密で、焼成は2がやや不良である。4は、底径6.8cmと小形で、器壁が厚い。底部はやや丸く、ヘラ切り後に丁寧な静止ナデ調整されている。青灰色を呈し、胎土、焼成は良い。5～9は、底部破片であるが1～3と同じタイプと考えられる。6・7は、体部と底部の境界に段を有

し、6には明瞭なヘラ切り痕が残る。5・7の底部には、回転板より離す際に付いたと思われるヘラ状工具による圧痕が残る。10・11は、糸切り痕を残す底部破片で、体部と底部の境界に稜を成す。淡青灰色を呈し、胎土は1～3mm程度の砂粒を含み、焼成は並である。12・13は、大きく外傾する口縁部破片で、器壁が薄い。口径は、12が11.6cm、13（A－1号溝）が12.6cmを測る。灰色を呈し、焼成は良い。胎土は13が大粒の砂粒を含む。

高台坏（第32図14～30、図版9）

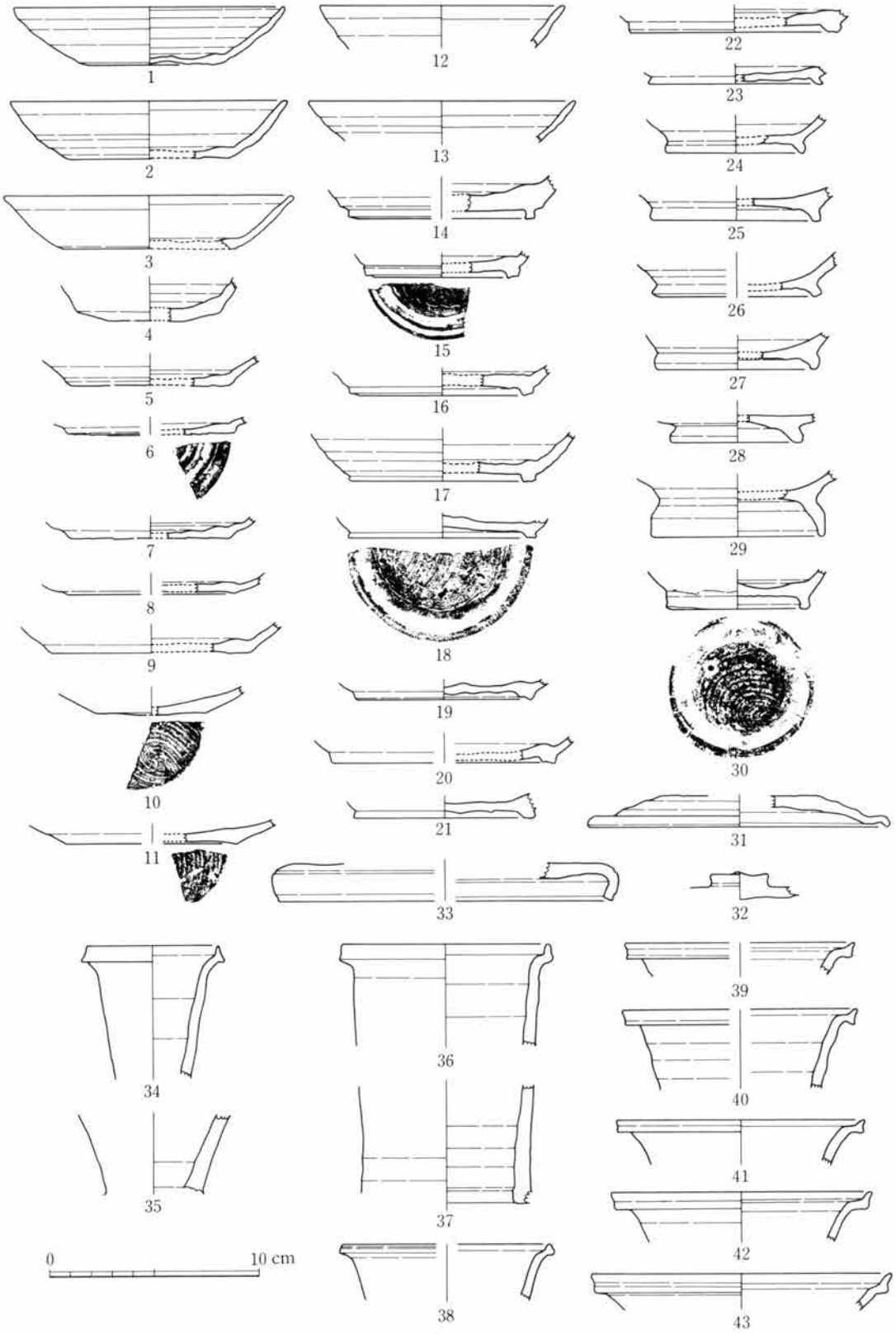
すべて底部破片である。14は、垂直に付き、幅の狭い(0.4cm)高台である。底部のやや内方で高台が貼られ、体部と底部の境界に稜を有し、器壁が厚い。高台高0.5cmを測り、胎土、焼成は良い。15～17は、やや垂直に付く高台で、端部内側で接地する。器壁は比較的厚い。15の底部に爪先による圧痕が残る。高台径は、15が7.4cm、16・17が8.8cm、高台高は、順に0.5cm、0.4cm、0.3cmである。胎土、焼成は良い。18（A－1号溝）は、外に張り出す高台で、底部は糸状なもので定方向への切り離しをしている。爪先による圧痕が残る。高台径9.0cm、高台高0.3cmを測り、胎土は1～2mm程度の砂粒を含み、焼成は良い。19～22は、低平な高台を有する。19・20はやや垂直に付き、強い横ナデで凹凸を成す。21・22は外に張り出す高台で、やや丸味をもつ。胎土は1～2mm程度の砂粒を含み、21は焼成がやや不良である。23は、外に張り出す断面逆三角形の高台が付く。高台径8.2cm、高台高0.4cmを測る。24は、高台径6.4cm、高台高0.5cmを測る。25～28は、高台高が0.6～0.8cmと高く、27は内彎ぎみであるが、外下方に直線的に下がる高台が付く。高台の器壁は厚く、内面には丁寧な横ナデ調整を施す。胎土、焼成はやや良い。29は外下方に内彎ぎみに下り、高台高が1.7cmと高い特異な高台が付く。高台径8.0cmを測り、胎土焼成はやや良い。30は、底部に糸切り痕を残す。高台径6.8cm、高台高0.9cmを測り、調整はやや粗雑である。

坏蓋（第32図31～33、図版11）

31は、残存器高1.5cmの偏平なものである。口縁端部が屈曲し、天井部平担面にはヘラ削りを施す。強い横ナデ凹凸を成す。胎土には1～2mm程度の砂粒を含み、焼成は良い。32は、偏平なボタン状なつまみで、つまみ径3.7cm、つまみ高0.7cmを測る。33は、短頸壺の蓋と考えられる。平担な天井部より屈曲し、内傾して下がり、口縁端部に面をもつ。口縁端部と天井肩部に浅い沈線が巡る。残存器高1.8cmを測り、青灰色を呈し、胎土・焼成はやや良い。

壺・瓶（第32～35図34～88、図版10・11）

34・35は、長頸壺の口頸部破片である。頸部は外傾し、口縁下で屈曲して直立する。口縁端部は先細となる。口径6.2cmを測り、淡青灰色を呈し、胎土には1～3mmの砂粒を含み、焼成は良い。35は、頸部径が基部で4.6cmを測る。36・37は、頸部が垂直な瓶である。36は、口縁下で外上方に開き、屈曲して直立し、端部が丸い口縁を成す。口径9.8cmを測り、降灰により暗青灰色を呈す。胎土は粗雑で、焼成は良い。37は、外面に降灰釉がかかる。38～51は、双耳瓶の口頸部



第 32 図　須恵器実測図（S＝⅓）

破片である。38は、口縁端部が丸い。39～44は、口縁端部が外反するものである。口径は39・40が不明で41から順に11.6cm、12.2cm、14.0cm、15.2cm を測る。39・41・44には降灰釉がかかる。45～49は、直立する口縁で、47～49は、端部が丸く、直立部が短い。胎土には１～３mm 程度の砂粒を含み、焼成は良い。50・51は、外反する口縁を成し、口径18.0cm と大形で、器壁も厚い。

52～56は、頸部破片である。52には、断面に接合痕を残す。54～56は、頸部径が基部で11.4cm を測り、器壁が厚い。焼成は良く、56は胎土がやや粗雑である。

57～63は、双耳瓶の耳部破片である。粘土板を指頭により貼り付け、ヘラ状工具で形に切断した痕が明瞭に残る。59は、貼り付け部分をナデ調整で丁寧に消すが、58は、貼り付け痕を明瞭に残す。57～59には0.8～１cm の貫通孔が、61～63にも貫通孔が穿たれる。この他に２点ある。

64は、肩部に断面三角形の凸帯が巡るものである。調整、胎土はやや粗雑である。65～69は、双耳瓶の棚部破片である。粘土紐の貼り付けによるものである。65には貼り付け痕を残す。65は下段、66～68は上段の棚と考えられる。65は、棚径22.0cm を測る。66は、肩部に２条の浅い凹線が確認できる。67は、内面にカキ目に近い横ナデ調整され、棚径26.2cm を測る。68は、内面に円弧状のタタキ痕が僅かに残る。69（A－１号溝）は、胴部から底部である。底部から12cm 上に下段の棚が巡り、内外面とも強い横ナデ凹凸を成す。底部径13.6cm、胴部最大径29.0cm、棚径25.0cm を測り、外面は降灰釉で暗緑灰色を呈す。胎土には１～２mm 程度の砂粒を含み、焼成は良い。

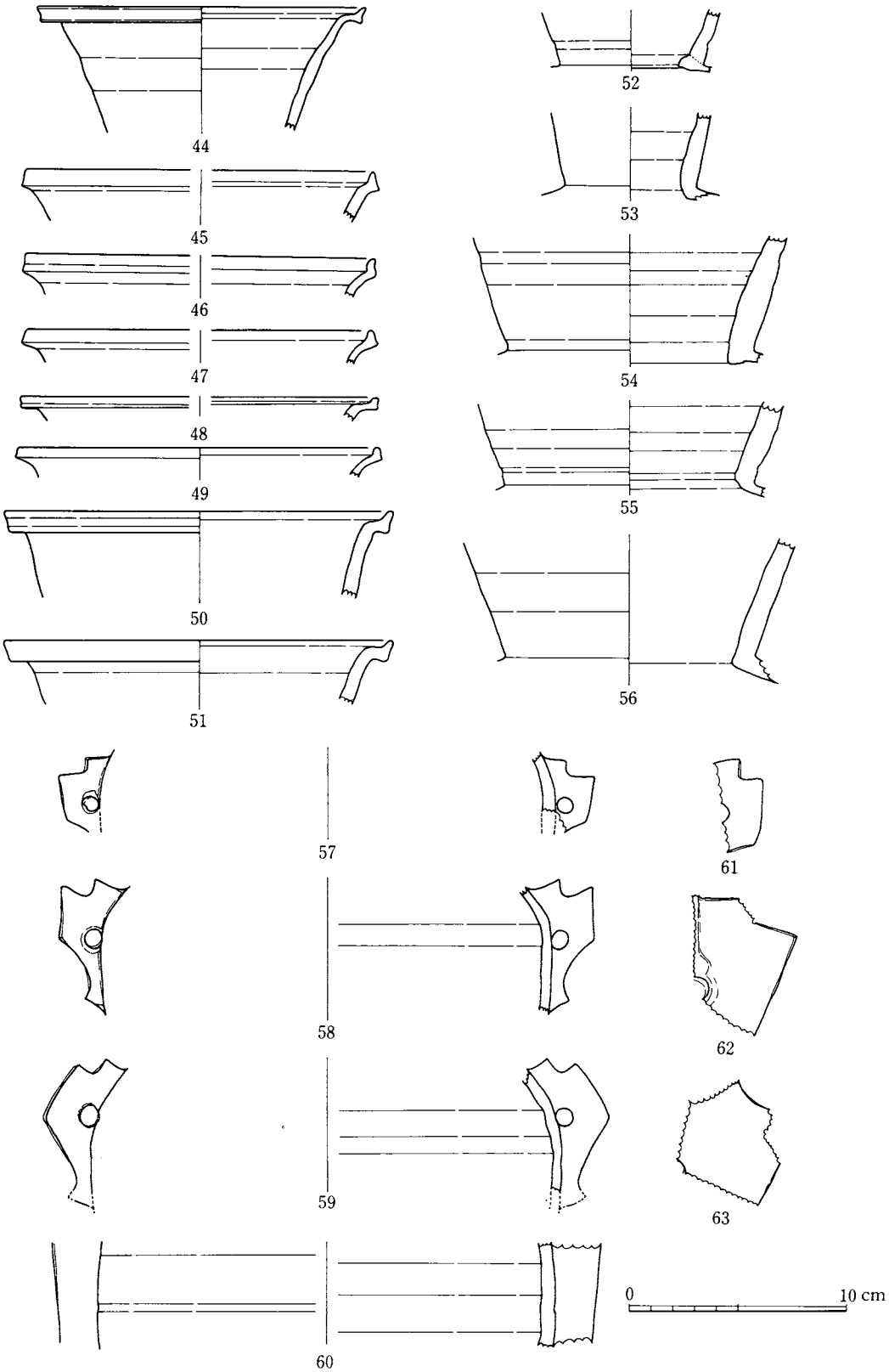
70～75は、底部破片である。強い横ナデ凹凸を成す。70（A－１号溝）は、重ね焼きか、焼成台として使用したものか判らぬが、底部に坏破片が融着する。底部径9.4cmを測る。71は、底部径10.0cm を測り、底部にヘラ先による調整痕を残す。72（A－１号溝）は、降灰釉が流れ淡緑灰色を呈す。隣接土器片が融着する。75は、内面に横ナデ後に、斜方向にハケ状工具による粗い調整痕がある。

78（A－１号溝）は、口縁部を欠損する高台付長頸瓶である。丸味の胴部に外傾する頸部と外に張り出す高台が付く。強い横ナデ調整され、外面に降灰釉がかかる。高台径8.0cm、胴部最大径15.7cm、胴部高16.0cm を測る。胎土は１～３mm 程度の砂粒を含み、焼成は良い。79～88は、高台付瓶の底部破片である。外に張り出す高台で、81は糸切り底である。

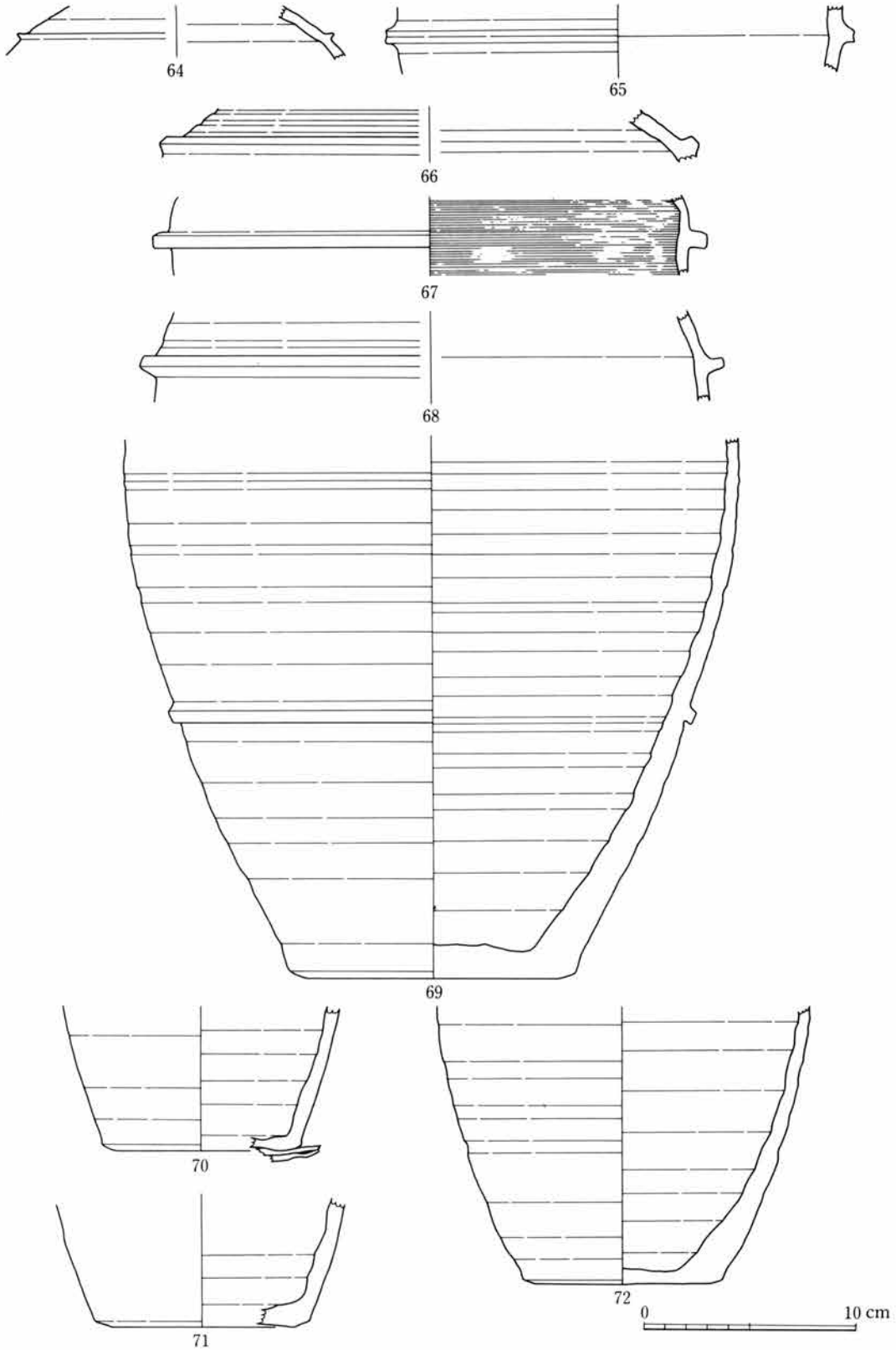
甕（第36～38図89～116、図版 13）

89～99は、口縁部破片である。89・90は、口縁部が外反し、端部に面をもつ。91・92・96は、口縁内側に凹線を巡すもので、92の頸部に刺突列点文を施す。93・94は、屈曲して端部に面をもつ。97は、外反して端部が丸くなる。98・99（A－１号溝）は、器壁が厚く大形品である。100～102は、頸部破片である。103～111は、胴部破片である。大半は平行タタキであるが、103は、内面が同心円状タタキを施す。口縁部調整時か、その以前に偶然に付いたと思われる５～６条位の腰の弱い櫛状か、縒糸状なものによる不規則な圧痕が残る。111は、内面に剝脱痕がある。

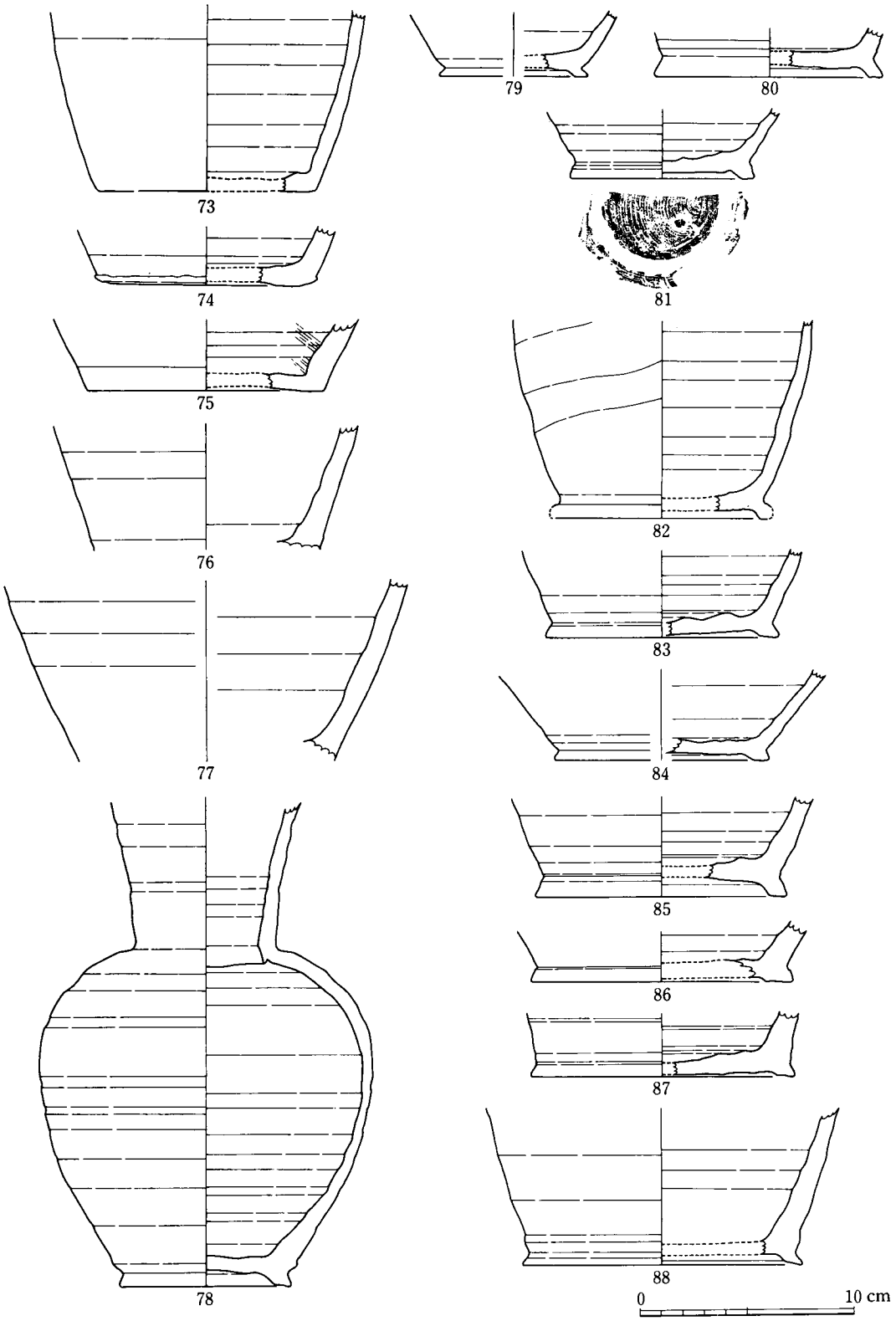
112～116は、土師器形態を成すものである。112は、内傾し断面三角形の凸帯が巡り、口縁端部がやや凹む。113は、外傾し屈曲して外反する口縁を成す。114～116は、外反し屈曲して直立する



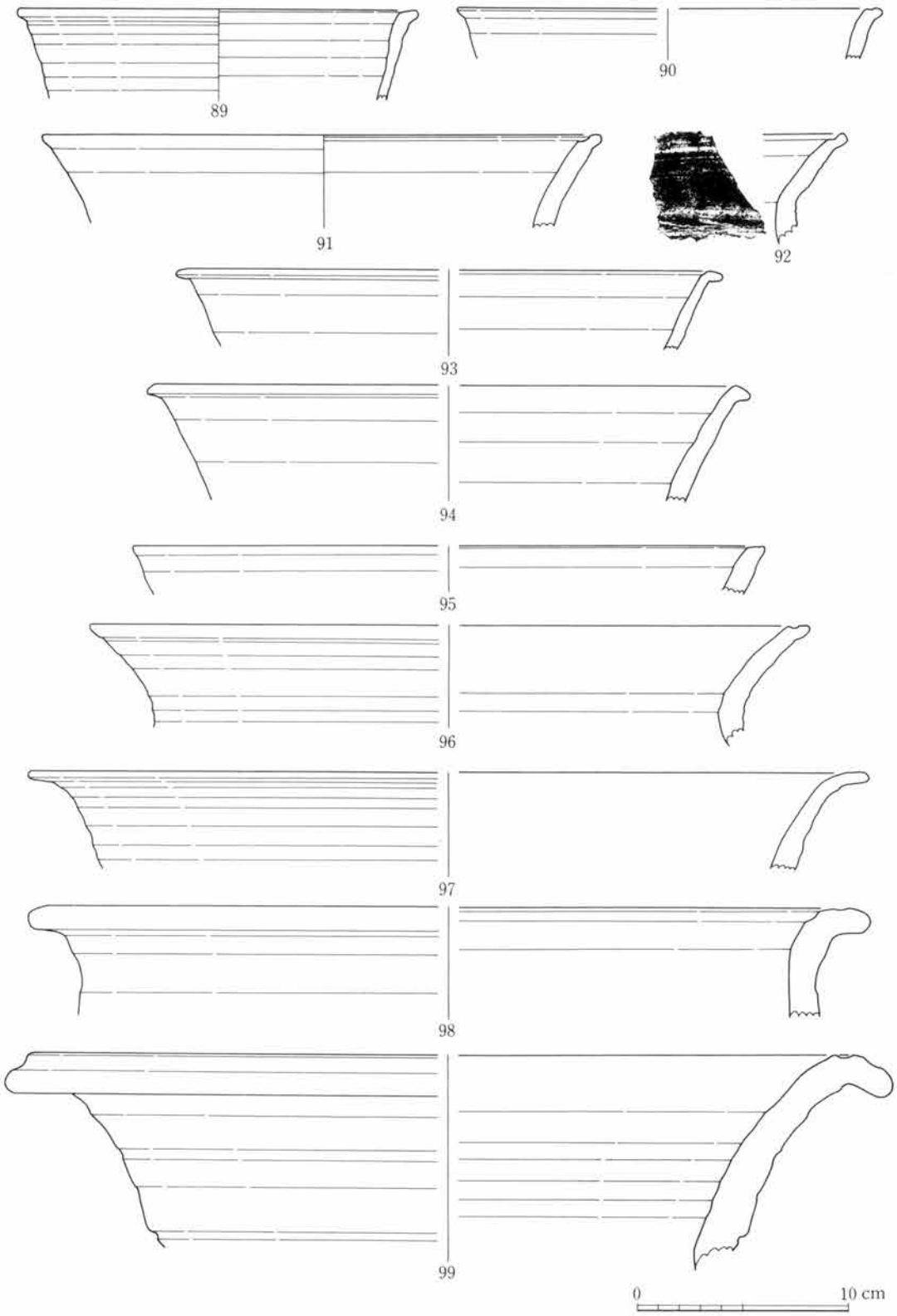
第 33 図　須恵器実測図（S＝⅓）



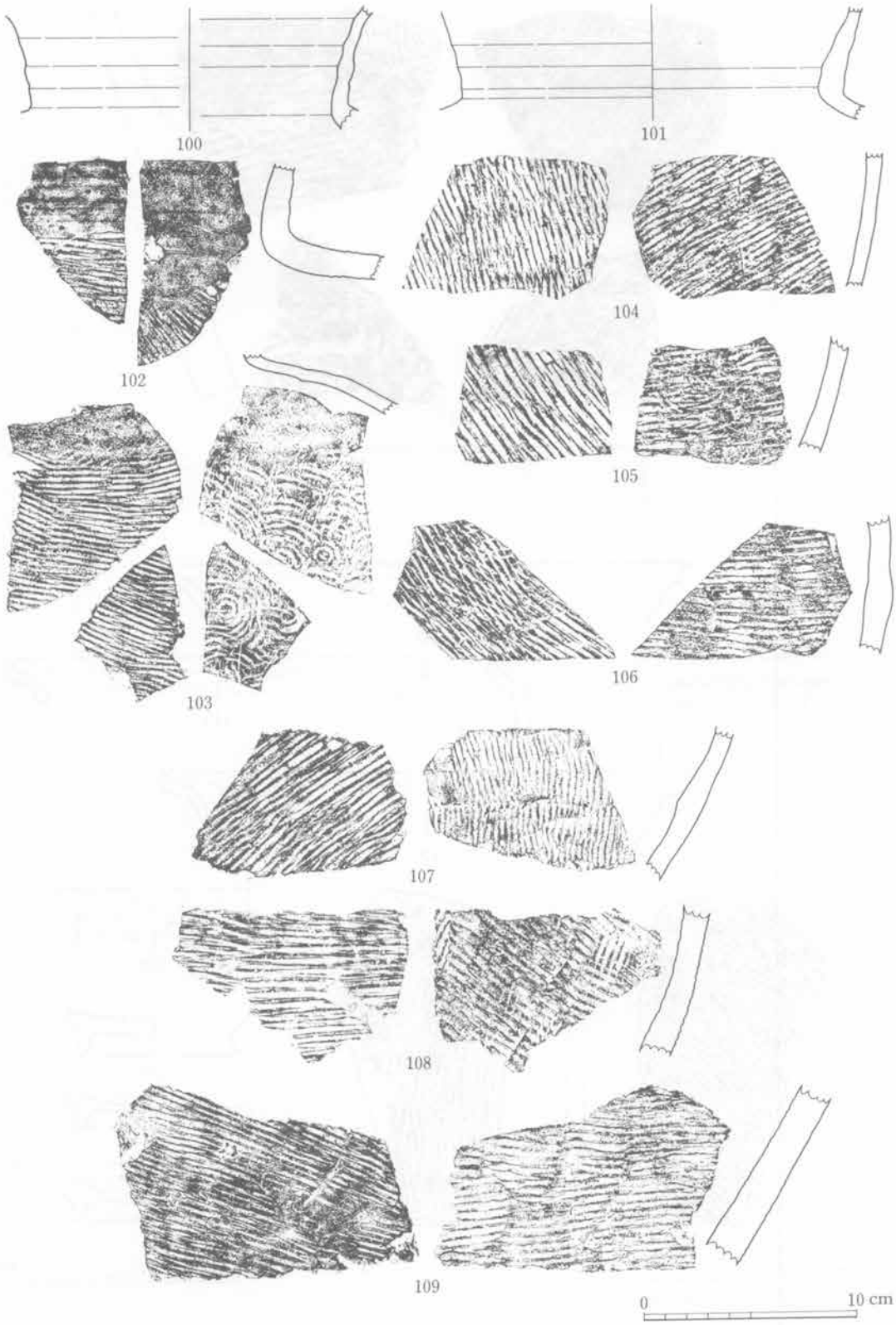
第 34 図　須恵器実測図（S＝⅓）



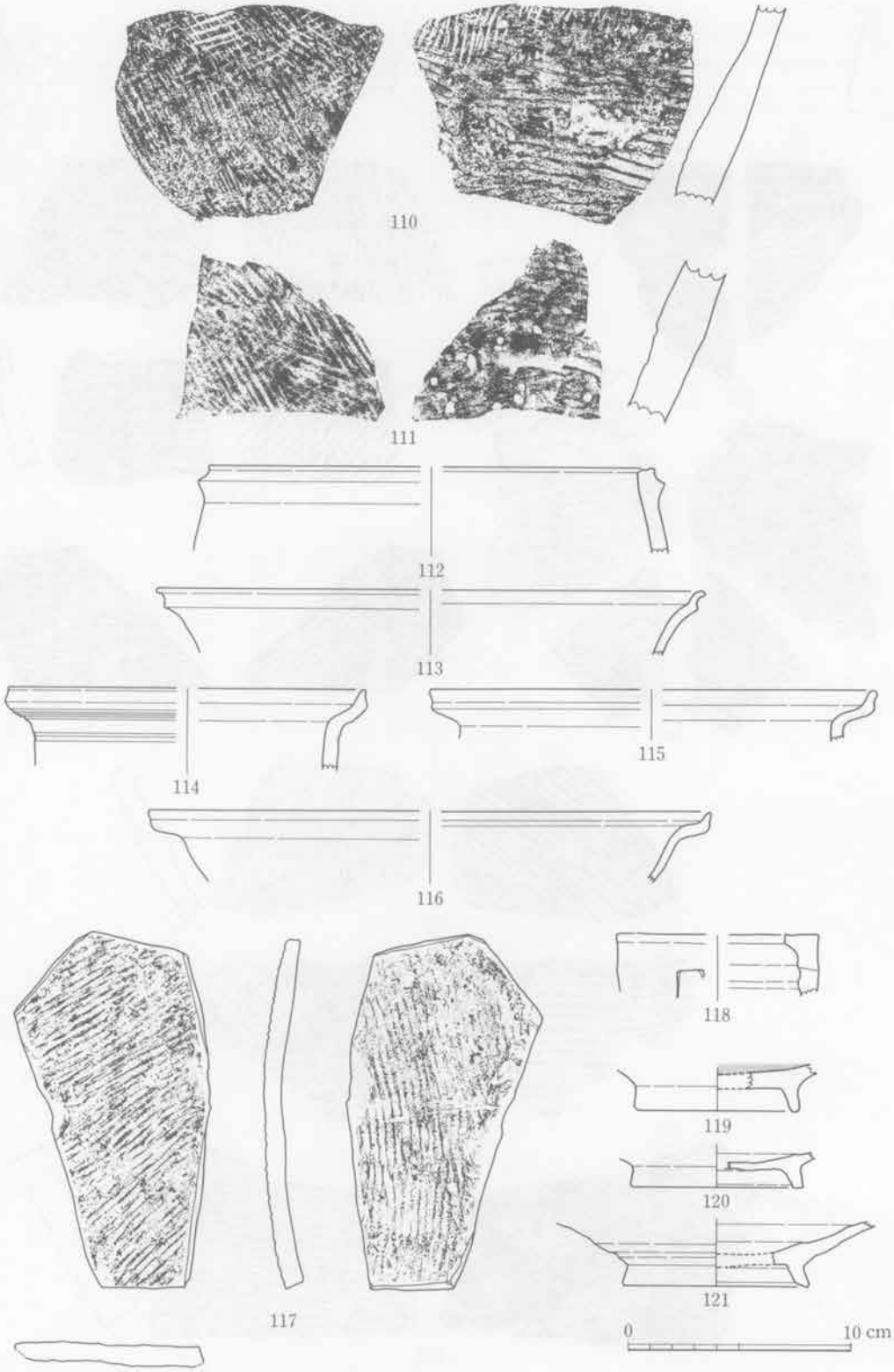
第 35 図　須恵器実測図（S＝⅓）



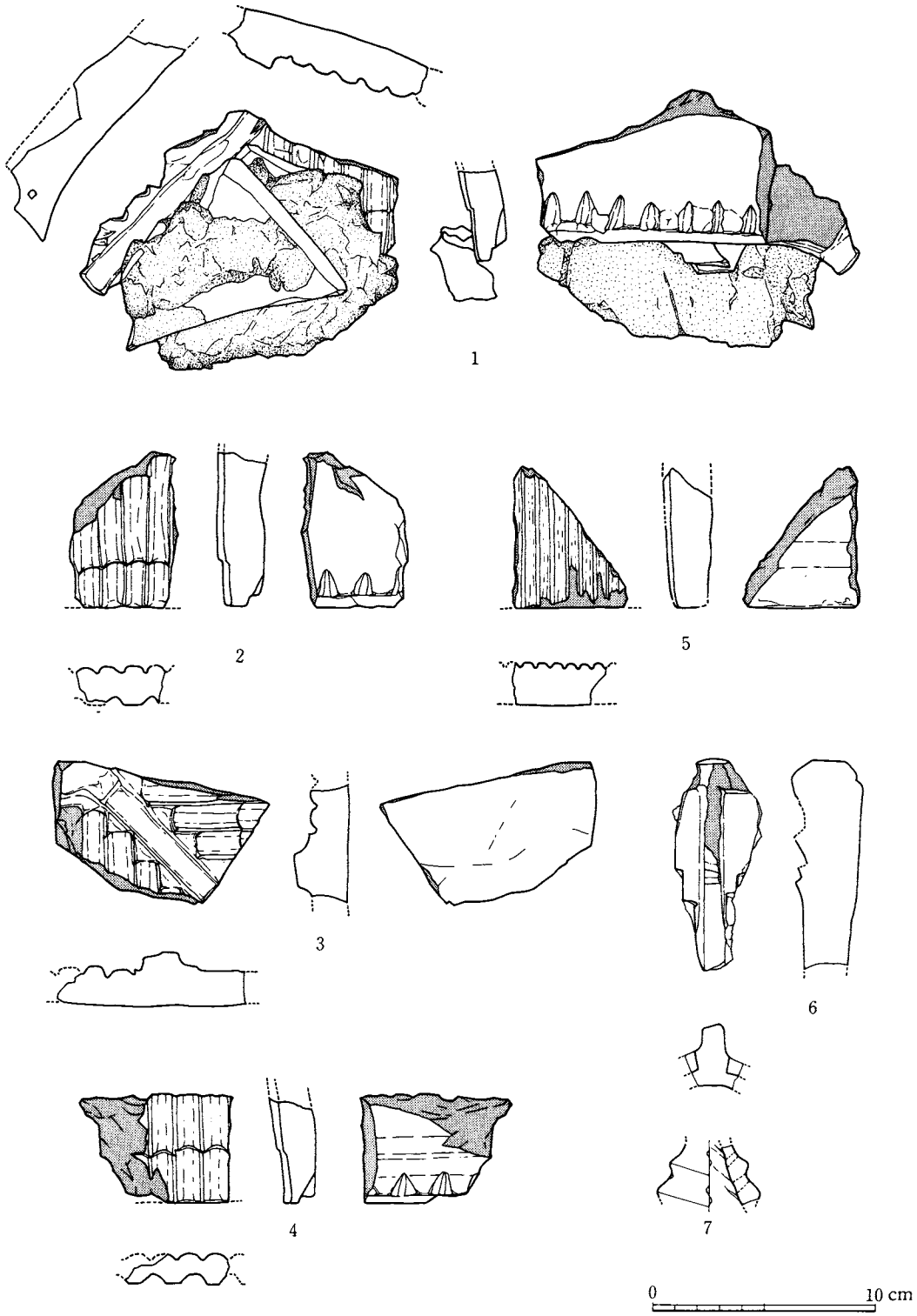
第 36 図　須恵器実測図（S＝⅓）



第 37 図　須恵器実測図（S＝⅓）



第38図　須恵器・土師器・その他実測図（S＝⅓）



第 39　瓦塔実測図（S＝⅓）

口縁で、116は鉢形を成す。

その他（第38図117・118、図版16）

117（A－1号溝）は、甕の胴部を成形時に五角形に切り、焼成されたもので、内外面とも平行タタキで降灰がかかる。他にも同様なもの6点がある。(図版16) 118は、上部平担面が剝離した台か、逆にして脚の両方が考えられる。

土師器（第38図119～121、図版17）

高台を有する坏の底部破片である。高台断面は「ハ」の字形態を呈する。119は、内面黒色土器である。高台径は順に、7.2cm、7.6cm、8.2cm、高台高1.1cm、1.0cm、0.9cmを測る。胎土焼成はやや良い。

第3節　瓦　塔[7]（第39図1～7、第40図、図版15・26）

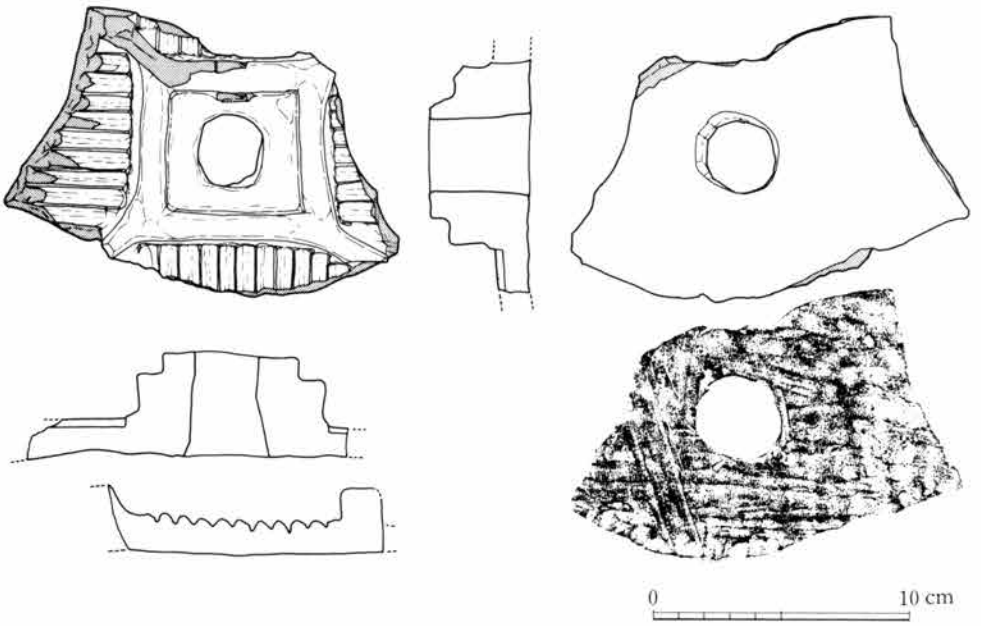
いずれもA区より検出された。多重塔の一部と考えられるが小破片で全形を窺えるものはない。1(A－1号溝)は、隅棟から屋根部の破片である。隅棟は残存で11.0cmを測る。隅棟先は反り、鋭角となる。下方を内側に切り反らせて隅木を表現する。隅木先端に3mm程度の孔が穿たれ、風鐸等の装飾に用いるものと考えられる。屋根部は丸瓦で、軒先より2.3cmに段を付けてつぎ目を表現し軒反りがある。下面には斜めに切り込みを入れ、垂木を表現する。垂木間隔1.5cmを測る。2・4は、屋根部破片で1と同様につぎ目を付け、下面に垂木を表現する。2は、軒反りがない。垂木間隔1.5～1.8cmを測る。3は、隅棟上面から屋根部の破片である。上面は段をもち高くなり水平にしている。屋根部にはつぎ目を表現する。5は、屋根部破片である。表裏面とも省略化され、つぎ目、垂木の表現はない。1～4は丸瓦幅約1cmを測るのに比べ、5は0.5cmと狭い異形のものである。全て丸瓦の表現は、半截竹管により施されている。

6は、軸部の破片と考えられる。上端を直角に屈曲させた軸部に粘土板を貼り付け角柱とし、上部に階段状（2段残存）に切り込みを入れ斗栱を表現している。左右の軸壁にも切り込みを入れ斗栱を表現している。指頭とヘラ状工具で調整されるが粗雑である。

1～6は、須恵質で、ヘラ状工具と半截竹管とナデにより調整され、胎土には1～3mm程度の砂粒を含み、共伴の須恵器大甕の胎土と同様である。焼成は良い。

7は、円錐形で中空のものに外面を螺施状の凸帯が巡り、層塔を表現する泥塔の小破片と考えられる。粘土紐の貼り付によるもので最大径4.5cm、凸部と凹部間が0.6cmを測る。凹部に3～4mm程度の孔が推定で四方向（下2、上1箇残存）に穿たれると思われ、装飾用と考えられる。同様のものが能登国分寺跡[8]より出土しているが、段を成し層塔を表現し、四方向に孔が穿たれている。窯跡出土、孔の用途等から多重塔の九輪部とも考えられる。

第40図は、河北郡高松町の若緑イナバ山2号窯跡より表採したものである。多重塔の最上層屋蓋部である。四方の軒先を欠損するため、大きさは不明である。上部には、5.3×4.8cm、高さ



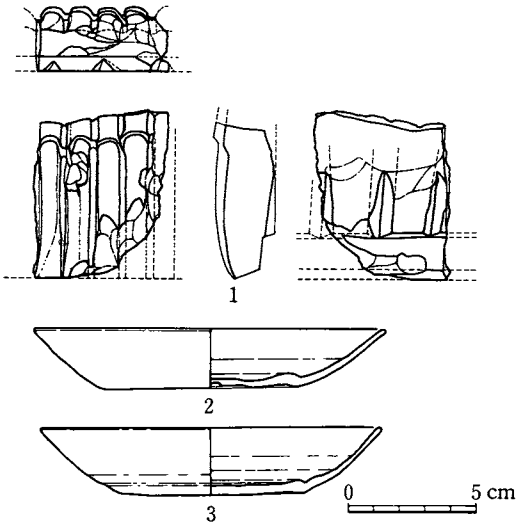
第40図　高松町若緑イナバ山2号窯跡表採瓦塔（S＝⅓）

0.8cmの方形の露盤を表現している。中心に2.5～2.9cmの円形の孔が穿たれている。屋根は幅0.8cm程度の半截竹管により丸瓦を表現している。下面は、ヘラ削りで厚さを調整した痕が明確に残っている。円孔の周囲はナデ調整される。胎土、焼成とも良く優品である。

第V章　ま　と　め

試掘分布調査時点の予想では、平安時代に属する平窯一基と他の窯跡の灰原の一部が、予定路線内に含まれる見込みであったが、本調査の結果、縄文時代の遺構、遺物の検出もあった。縄文時代の遺構、遺物は、A区、B区ともに検出されたが、概してA区の遺存状態が良好であった。丘陵裾部の小河川によって開析された低位の段丘（？）上に営なまれたものである。地形よりみて、巾約2～30m、長さ約50～100mのやや起伏のある狭い遺跡の最先端部を調査したことになるものと推定される。住居跡などの部分は調査範囲には含まれておらず、調査によって検出されたA－2土坑の埋甕、A－5土坑の集石遺構などと他の土坑は集落外に設けられた施設と考えられる。出土々器より前期初頭から後期中葉のものが見られ、かなりの長期に亘る集落跡の存在が想定されるが、調査面積が僅少のため不明である。縄文時代遺跡の数少ない鳥屋町にあっては貴重な発見であったと言える。今後、このような小河川流域においての縄文時代遺跡の発見の可能性が高まったと言える。

また一方、平安時代では、窯跡、灰原そのもの自体は調査区に含まれなかったが、斜面上方からの転落、開田の際の移動などにより出土した須恵器類には種々の器種が含まれている。これらは、鳥屋窯跡群の中での本支群の特徴を良く表わしているものと考えられる。それらは、日常容器、瓦塔、不明品とに分けられる。その中で、瓦塔を焼成している鳥屋窯跡群での窯跡としては、調査区の対岸、南側の南東斜面に一基存在している。第41図に示したように屋根の部分の破片である。(本図は、津田耕吉、唐川明氏の提供によるものである。)また、前述したが本窯跡群の北端にあたる七尾市池崎窯跡からも、かなりの量が出土している。(第6図参照) 一方、消費遺跡としての県内での出土遺跡には、野々市町末松廃寺跡[9]、津幡町加茂廃寺跡[10]、羽咋市柳田シャコデ廃寺跡[11]、高松元女むかい遺跡[12]、志雄町子浦蓮華山遺跡[13]、押水町押水中学校々庭遺跡[14]、辰口町下開発遺跡[15]が現在のところあげられる。このうち元女むかい遺跡については窯跡の可能性も考えられる。県内では、寺跡と寺院跡以外の遺跡のほぼ半々から出土していることになる。それらは、当然のことながら信仰の対称として製作され消費されたものであるが、本遺跡出土のものは生産遺跡のものであり、それも、すべて失敗品である。花見月支群、池崎窯跡で生産された瓦塔は、どこでどのようにして消費されたかは今後の調査研究を待つしかない。近隣の消費遺跡では、能登国分寺跡の塔跡出土のものがあるが、本例にしても従来から池崎窯跡で生産された可能性が高いと見られてきた。それでは、本遺跡も含めて、花見月支群で生産された多くの瓦塔の使用された遺跡が問題となってくるのであるが、地溝帯部の調査の現状を考えると、今後の発掘調査を待つしかない。また、第39図6は、壁面の角度が直角よりも大きく六角塔になる可能性が非常に高く考えられる。



第41図　花見月 N 地点採集の瓦塔と須恵器
(津田耕吉氏採集、唐川明史氏実測、トレース)

第38図117は、須恵器の甕胴部片を不整五角形に面取りしたものである。他にも、図化しなかったが、同様の用途不明品が7点ある。(図版16、17) これらの用途についてはまったく不明であるが、 敲打具として考えられなくもない。他の図化しなかったものの中には、内外面ともにタタキ痕を消去しているものもあり、この推測も当を得ていないようである。

遺物の項でふれることができなかったが、図版20で示したように、かなりの量の鉱滓がA地区から出土しており、近くに窯跡のみならず製鉄跡も所在する可能性も付記しておく。

註

(1) 土肥富士夫他『吉田野寺遺跡』七尾鹿島広域圏事務組合（1983年）

(2) 津田耕吉「能登島半の浦遺跡」註(1)文献

(3) 高堀勝喜、西野秀和他『上山田貝塚』宇ノ気町教育委員会、石川考古学研究会（1979年）

(4) 高堀勝喜、南　久和、宮本哲郎『金沢市古府遺跡第４・５次調査報告』金沢市教育委員会（1974年）

(5) 四柳嘉章、唐川明史、桜井憲弘、杉畠孝博他『赤浦遺跡』七尾市教育委員会（1978年）

(6) 註(4)に同じ

(7) 各名称は石村喜英『仏教考古学講座』第３巻「塔　塔婆一瓦塔」（1976年）を参照した

(8) 黒崎　直他『能登国分寺跡』七尾市教育委員会（1973年）

(9) 河原純之、吉岡康暢他『末松廃寺』野々市町教育委員会　末松廃寺調査団（1967年）

(10) 吉岡康暢「石川県津幡町加茂廃寺調査予報」『津幡町史』津幡町役場（1973年）

(11) 高野太一郎氏採集品

(12) 嵯峨井　亮「石川県羽咋郡高松町出土の瓦塔と同押水町出土の鉄鉢形須恵器について」『石川考古学研究会会誌　第13号』石川考古学研究会（1970年）

(13) 秋田喜一「羽咋郡押水町発見資料二点に就いて」『石川考古学研究会会誌　第８号』石川考古学研究会（1956年）

(14) 註(13)に同じ

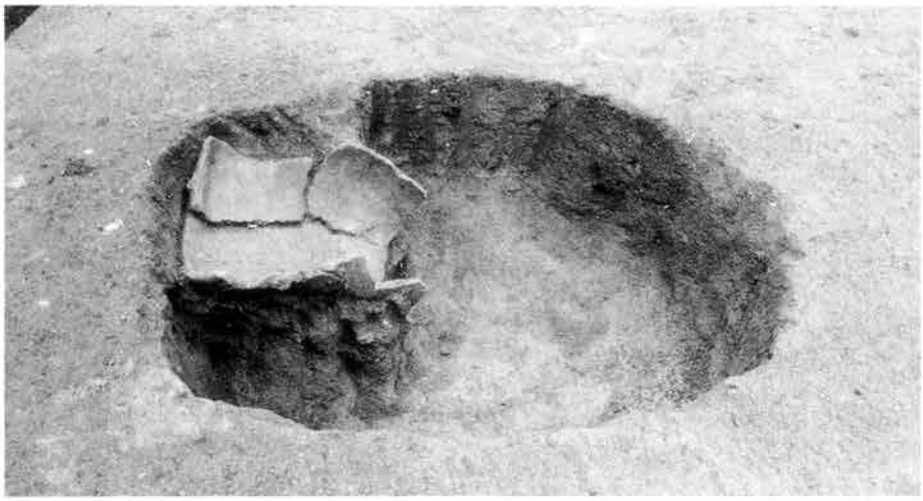
(15) 東　泰一氏の教示による。

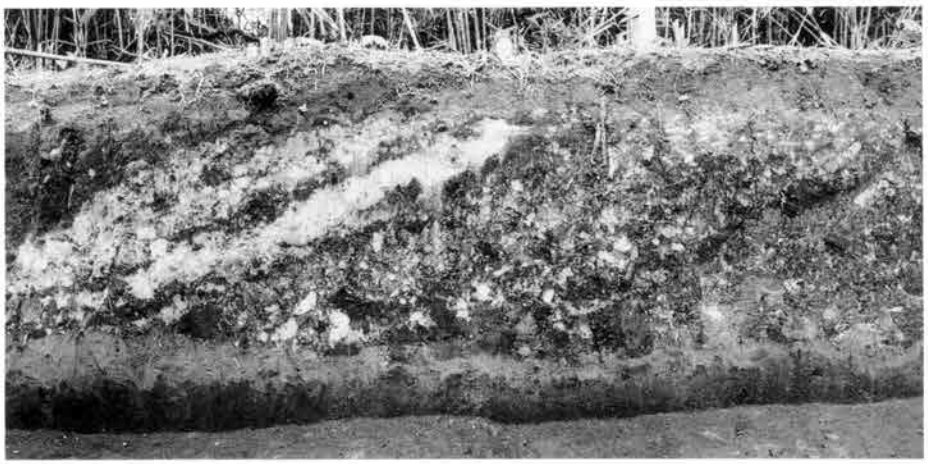
調査前遠影

調査前近影

A 区 調 査 風 景

A 区 溝 跡



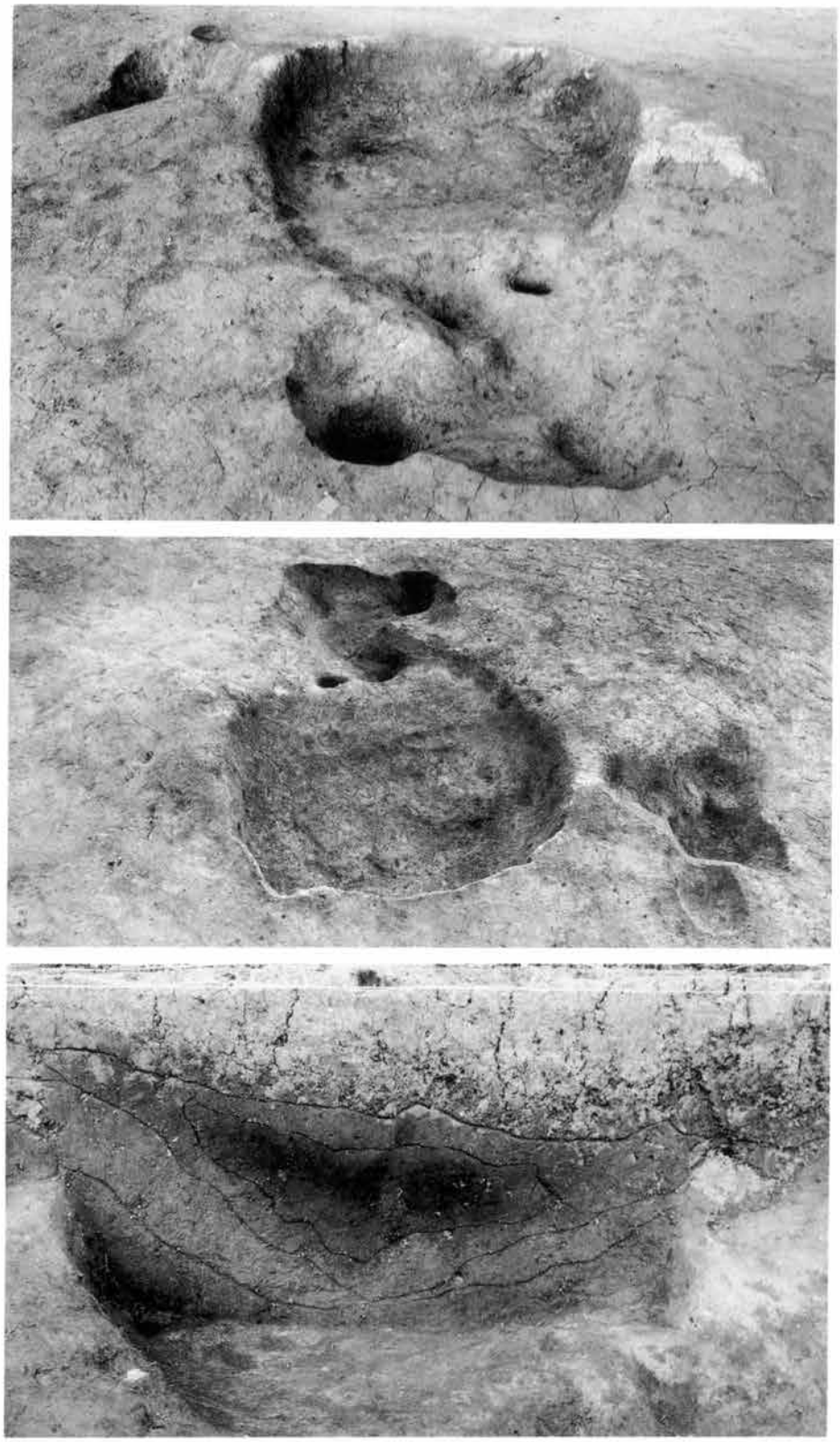


上，中:A－2号土坑　下:A区土層

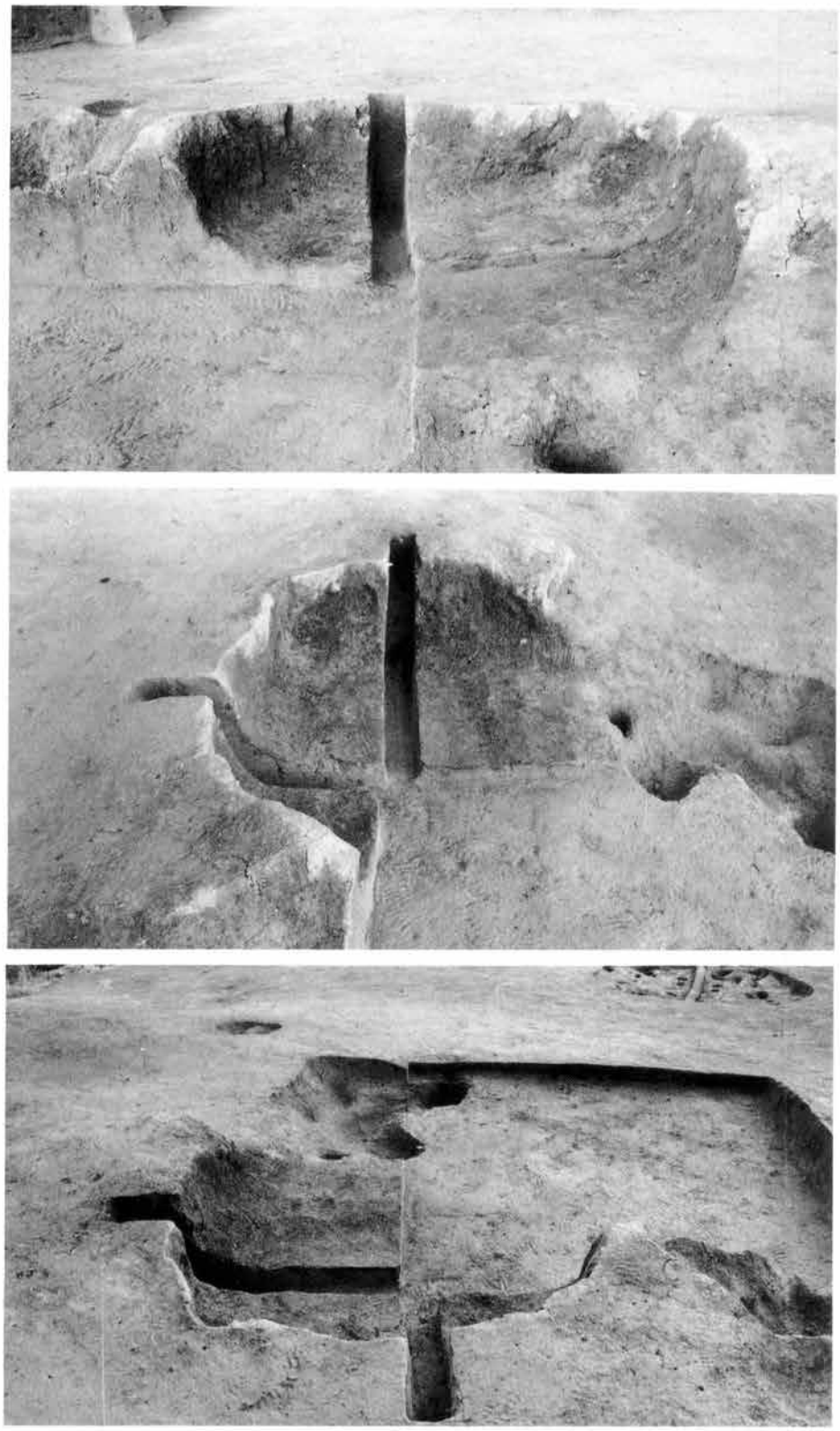
上:A区縄文　　下:A－5号土坑

B 区 全 影

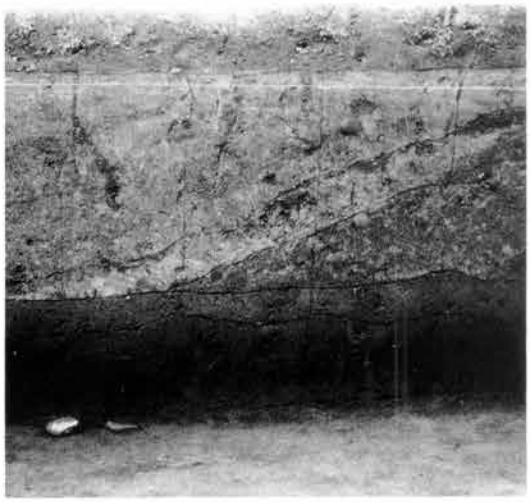
B 区 近 影



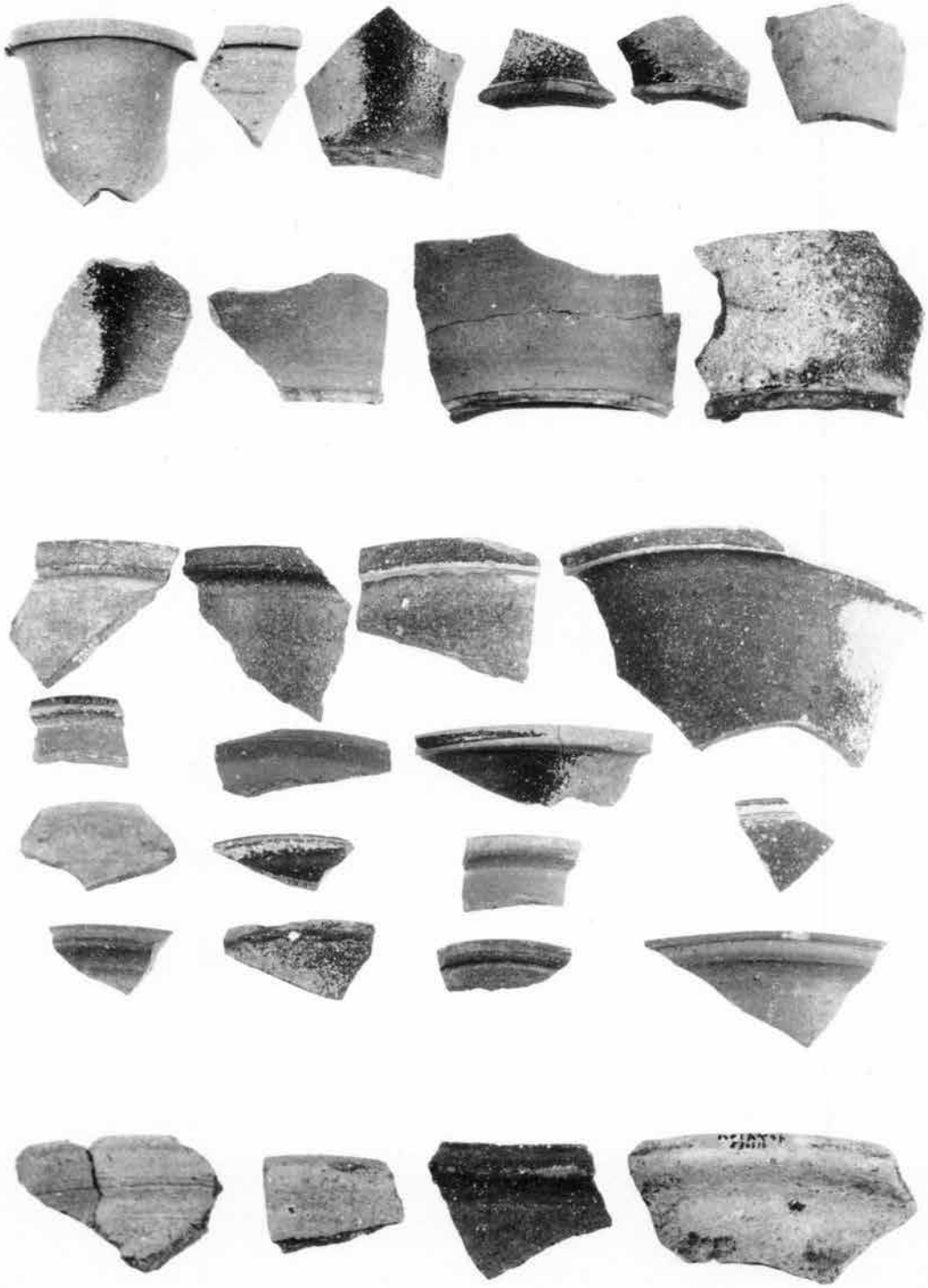
B—4号焼　土　坑



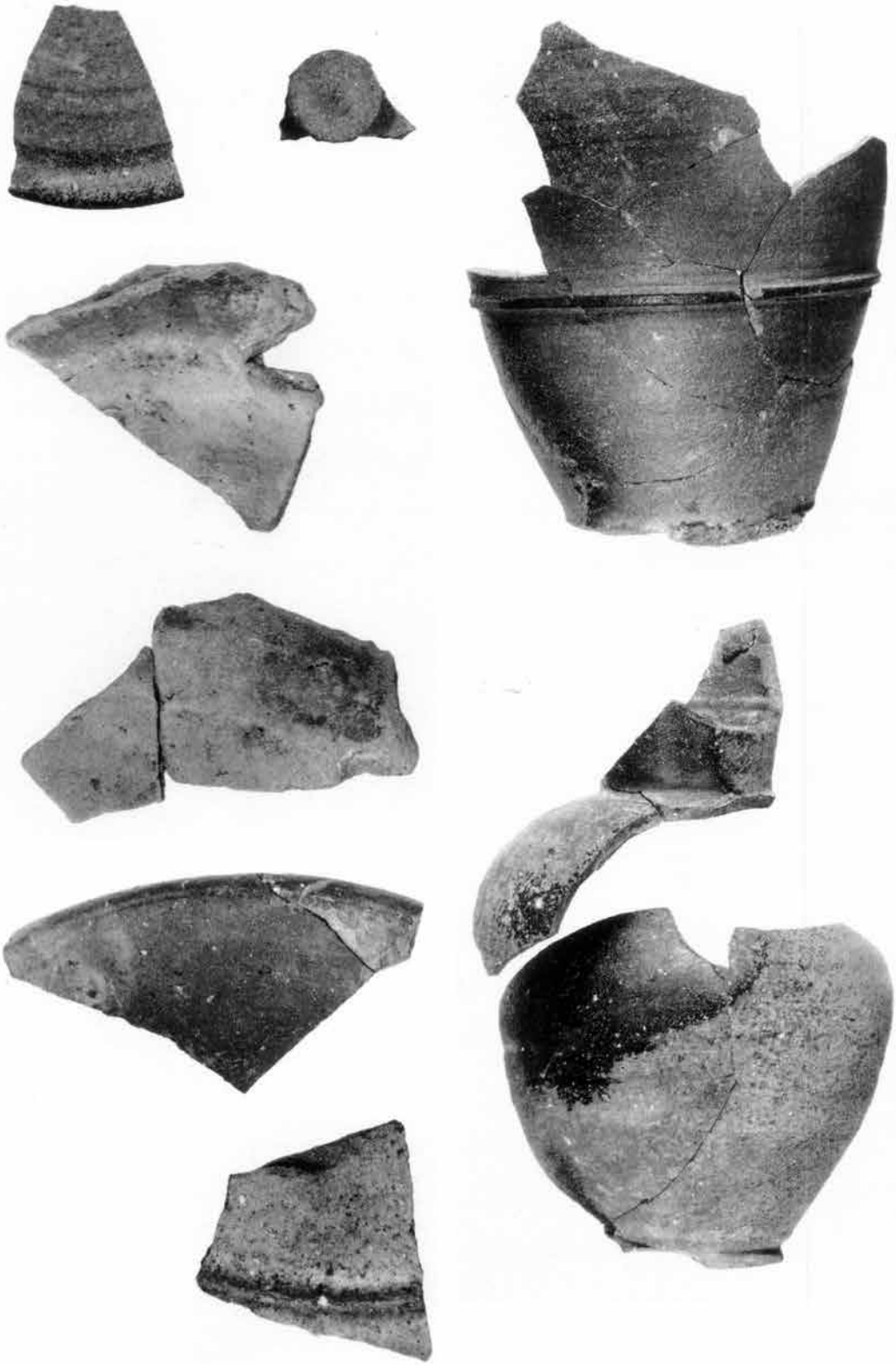
B－4号焼　土　坑



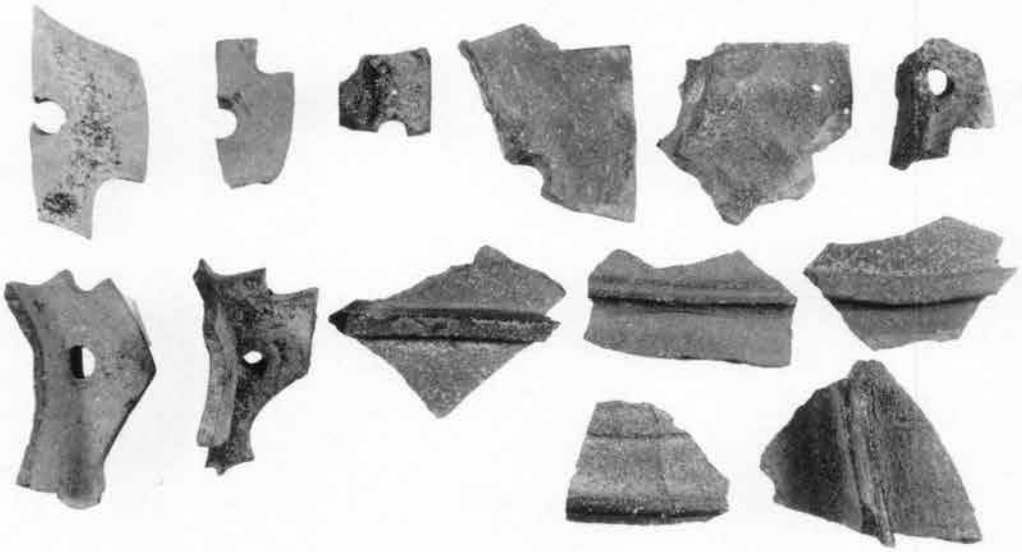
左　上:B－3号土坑　中:B－1号土坑　下:B区土層
右　上:B－5号土坑　中:B－2号土坑　下:B区土層



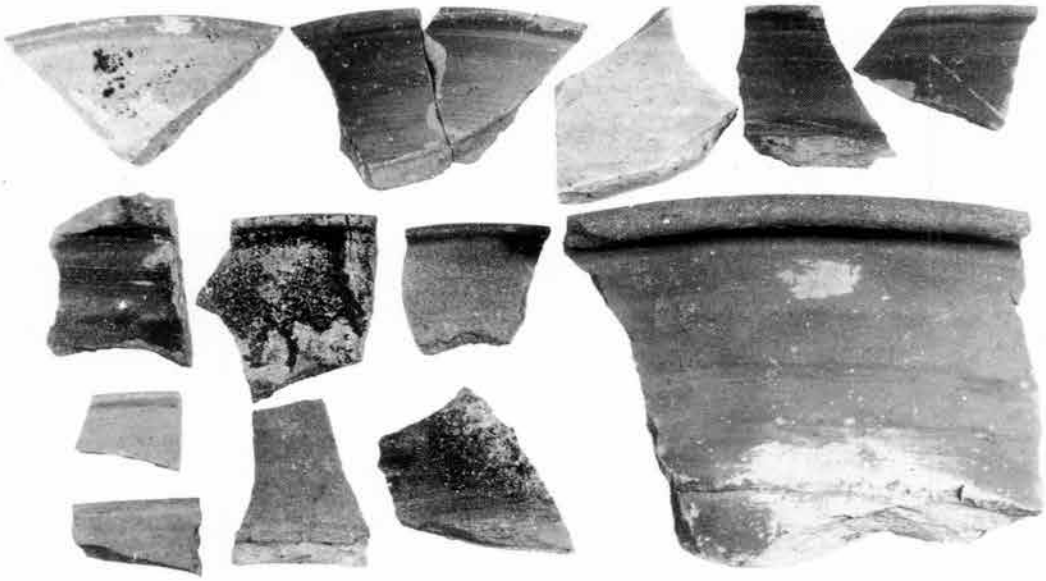
出土須恵器



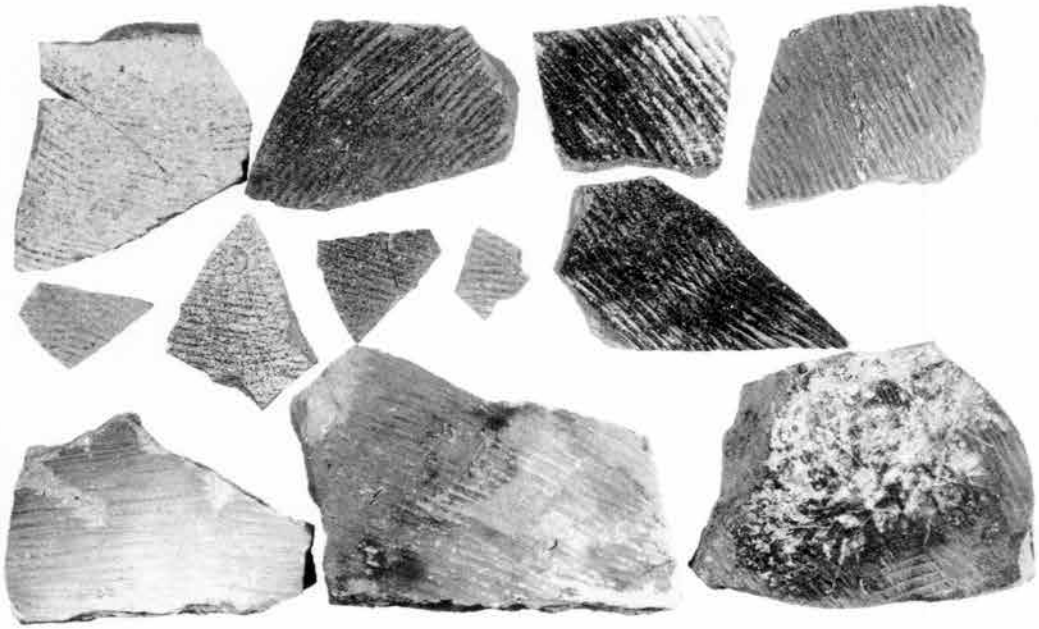
出土須恵器

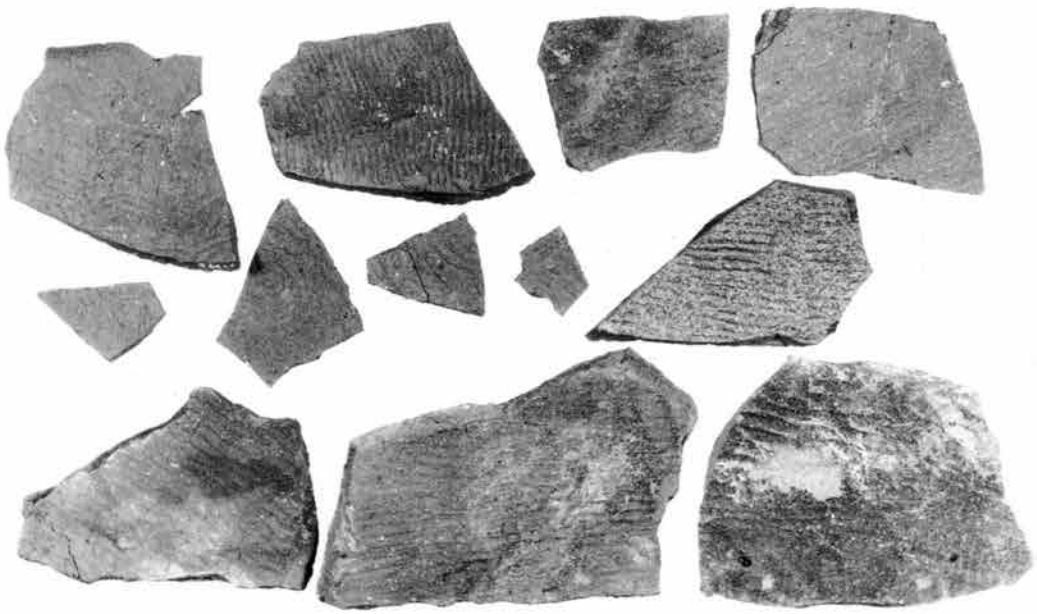


出土須恵器



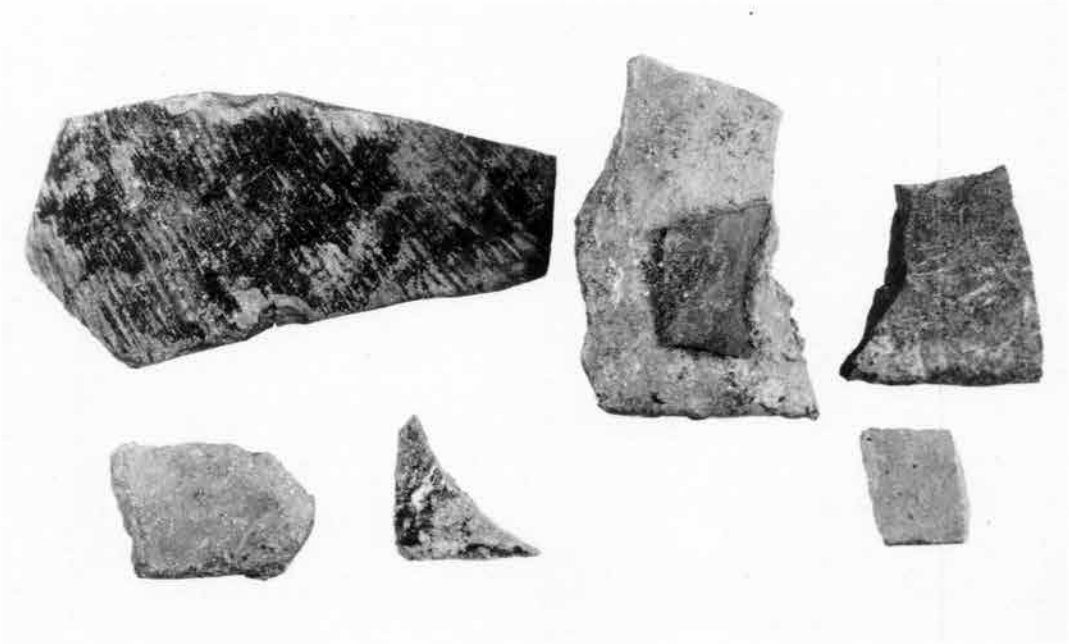
出土須恵器



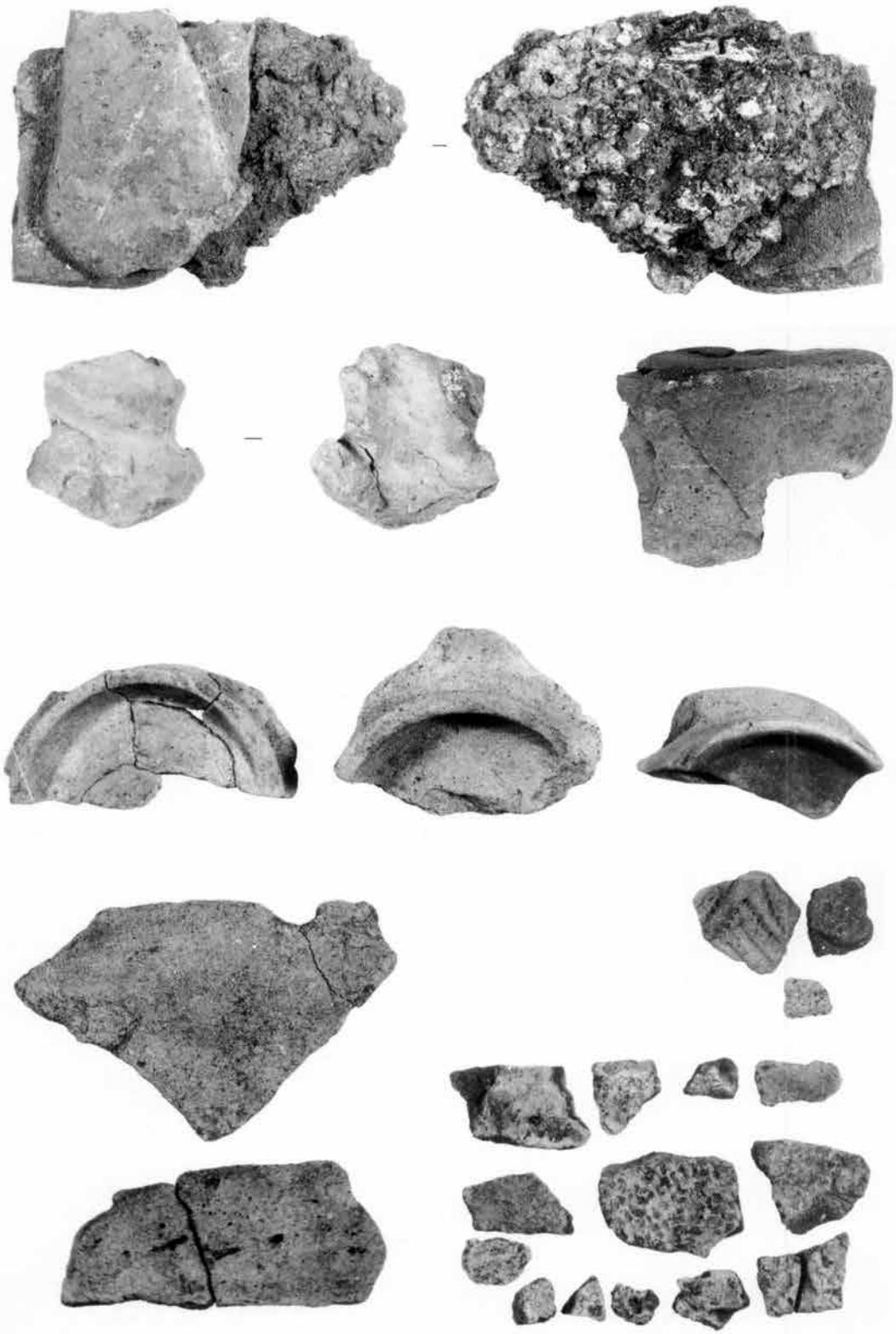


出土須恵器

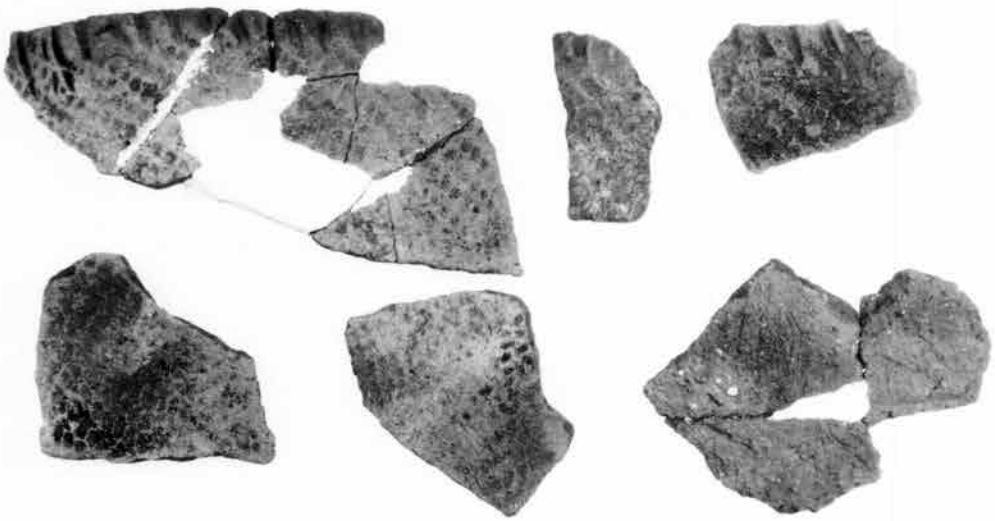
互　塔



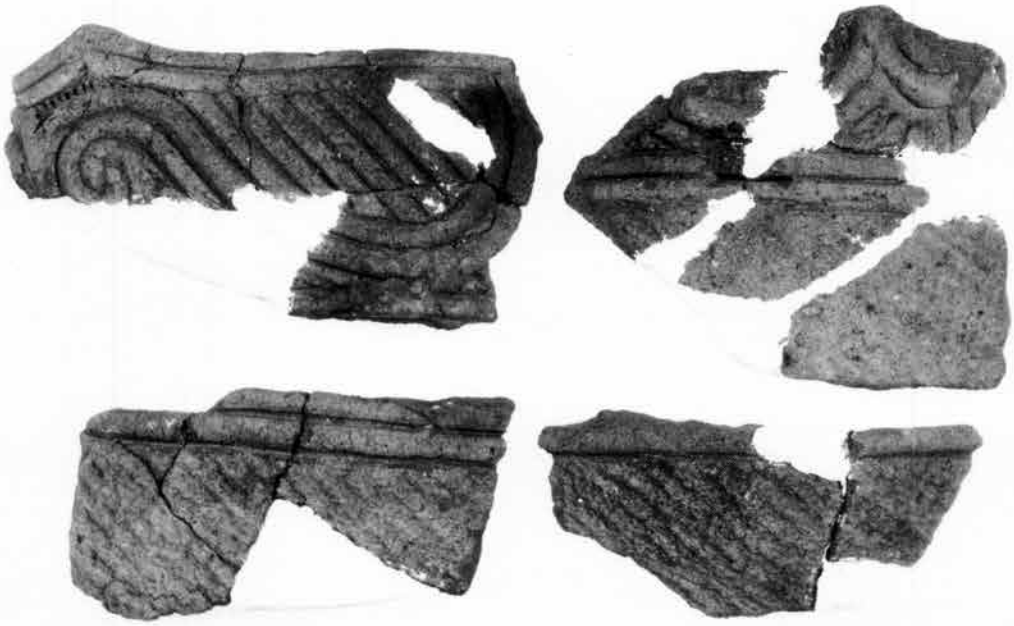
出土須恵器不明品

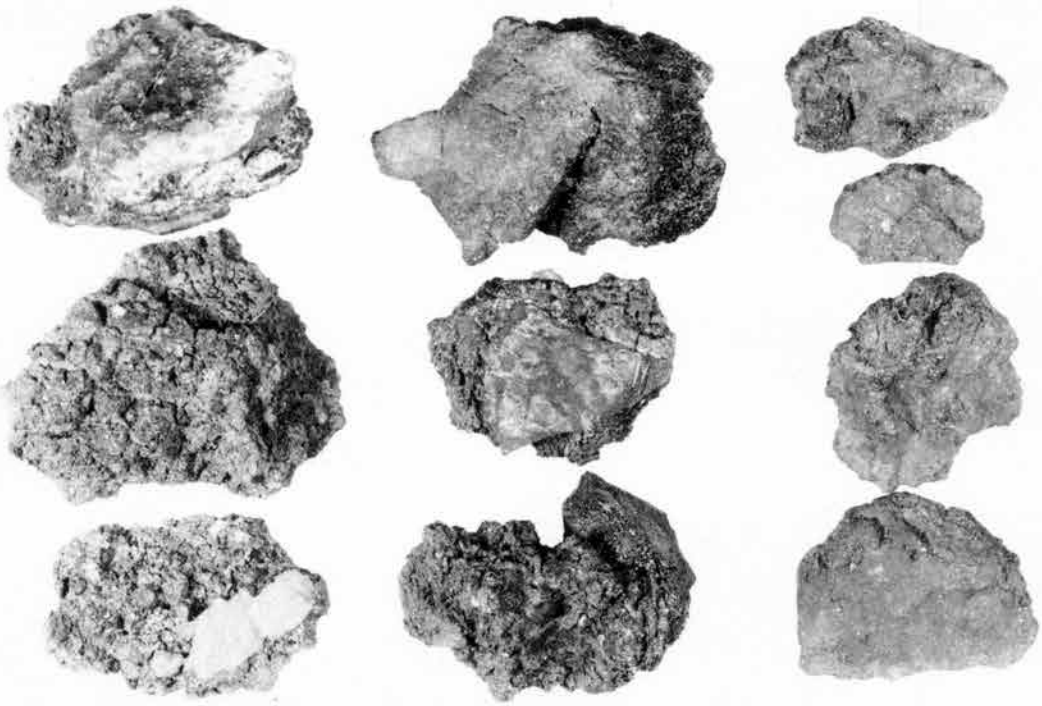


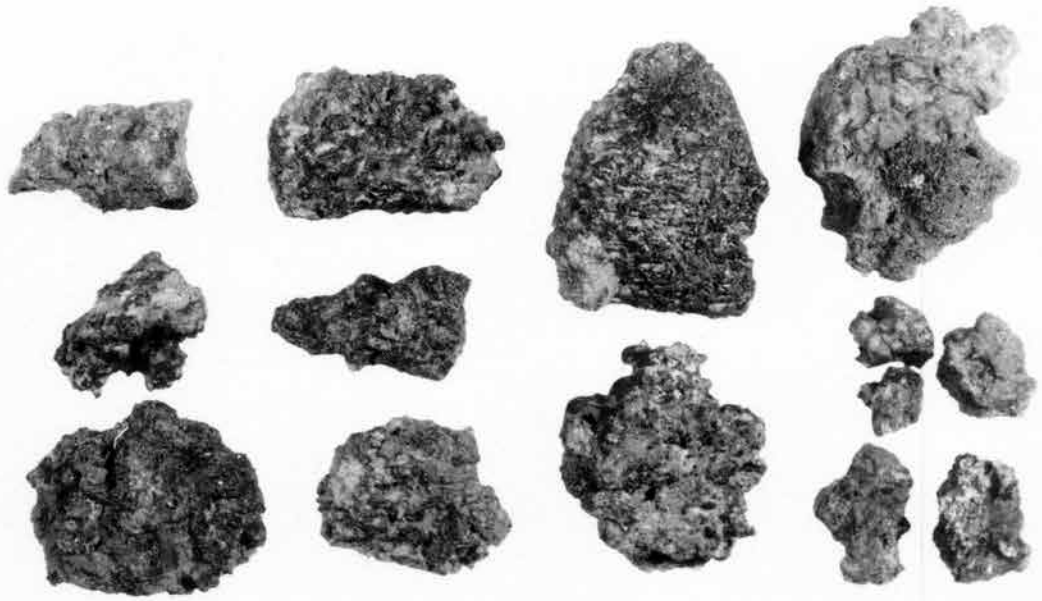
須恵器不明品、泥塔、土師器、縄文式土器



縄文式土器

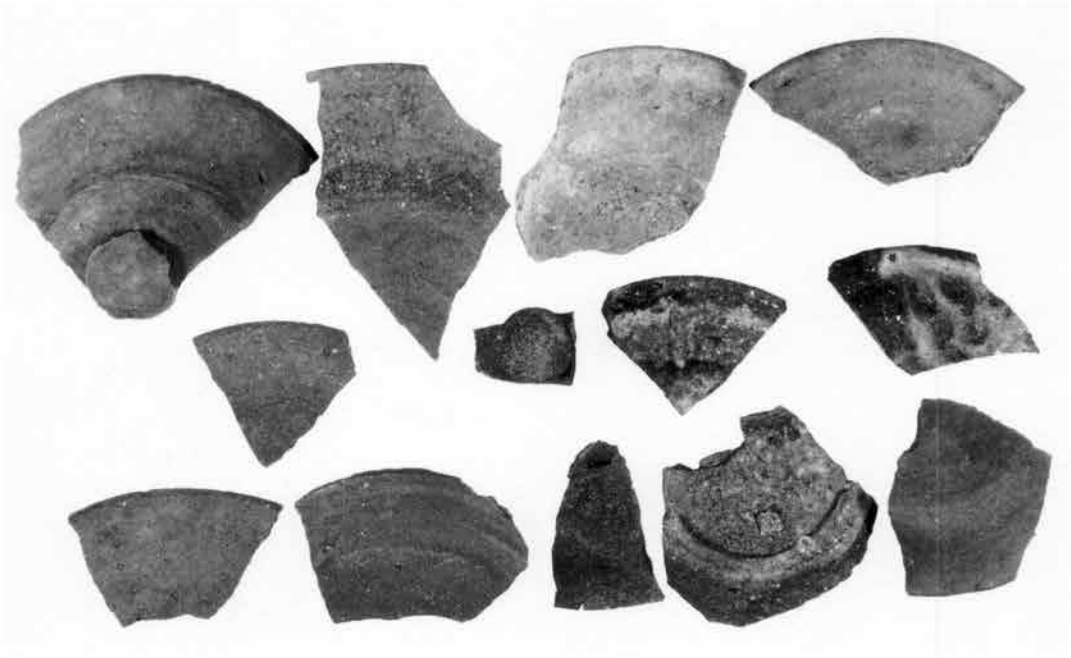




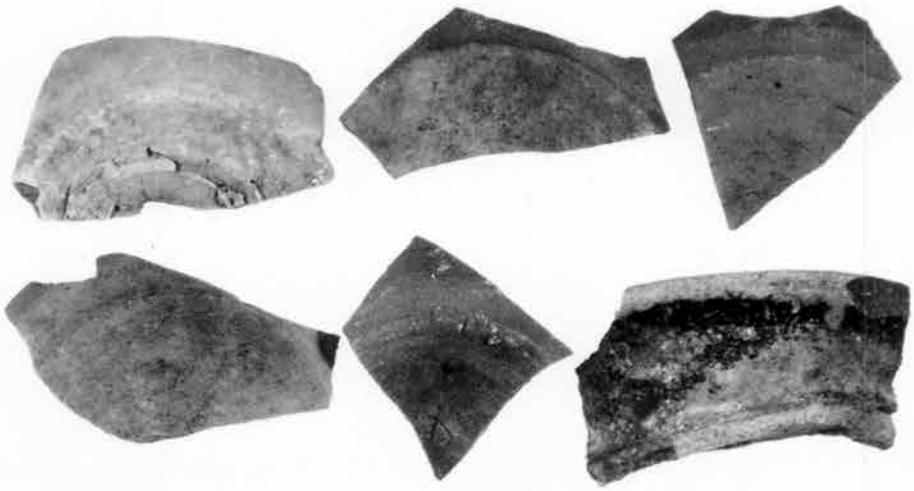


上：窯　壁　　下：鉱　滓

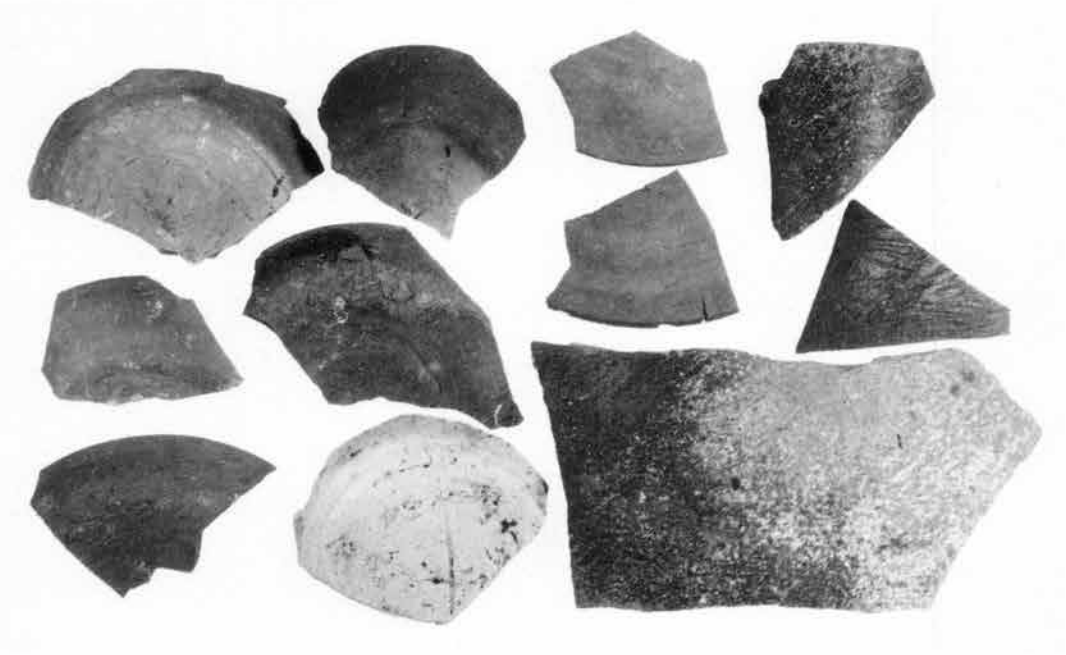
上：末坂A地点、末坂C地点、下：春木E地点の須恵器

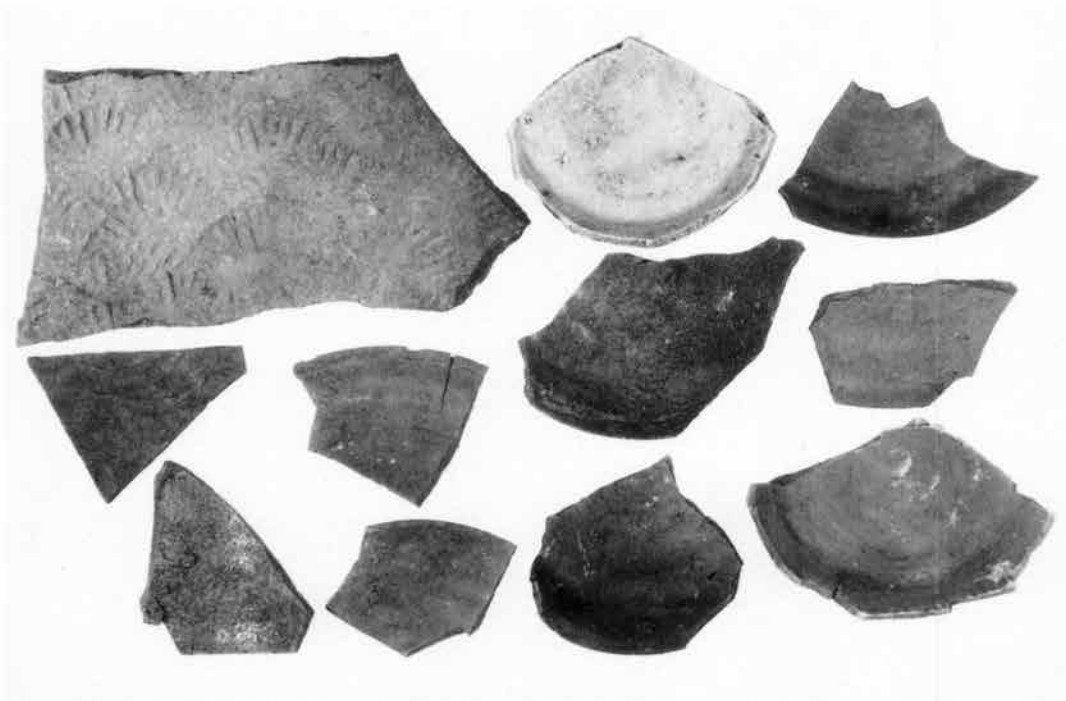


花見月G地点、花見月H地点の須恵器

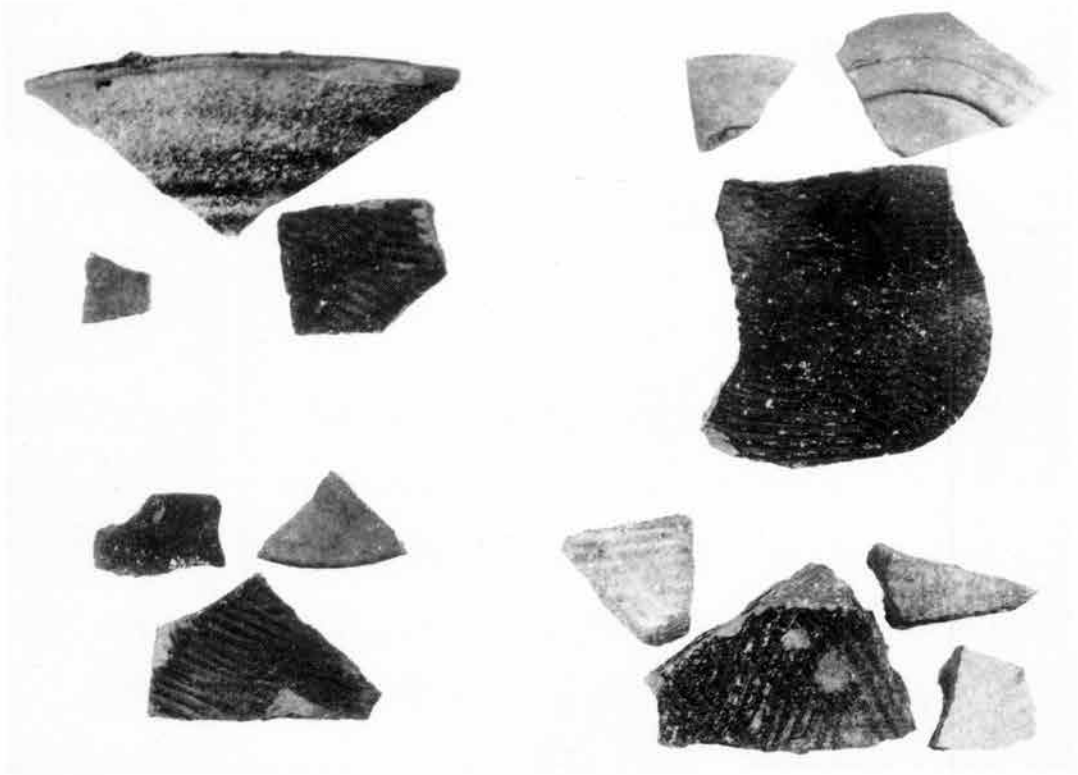


花見月Ⅰ地点、瀬戸F地点、花見月J地点の須恵器

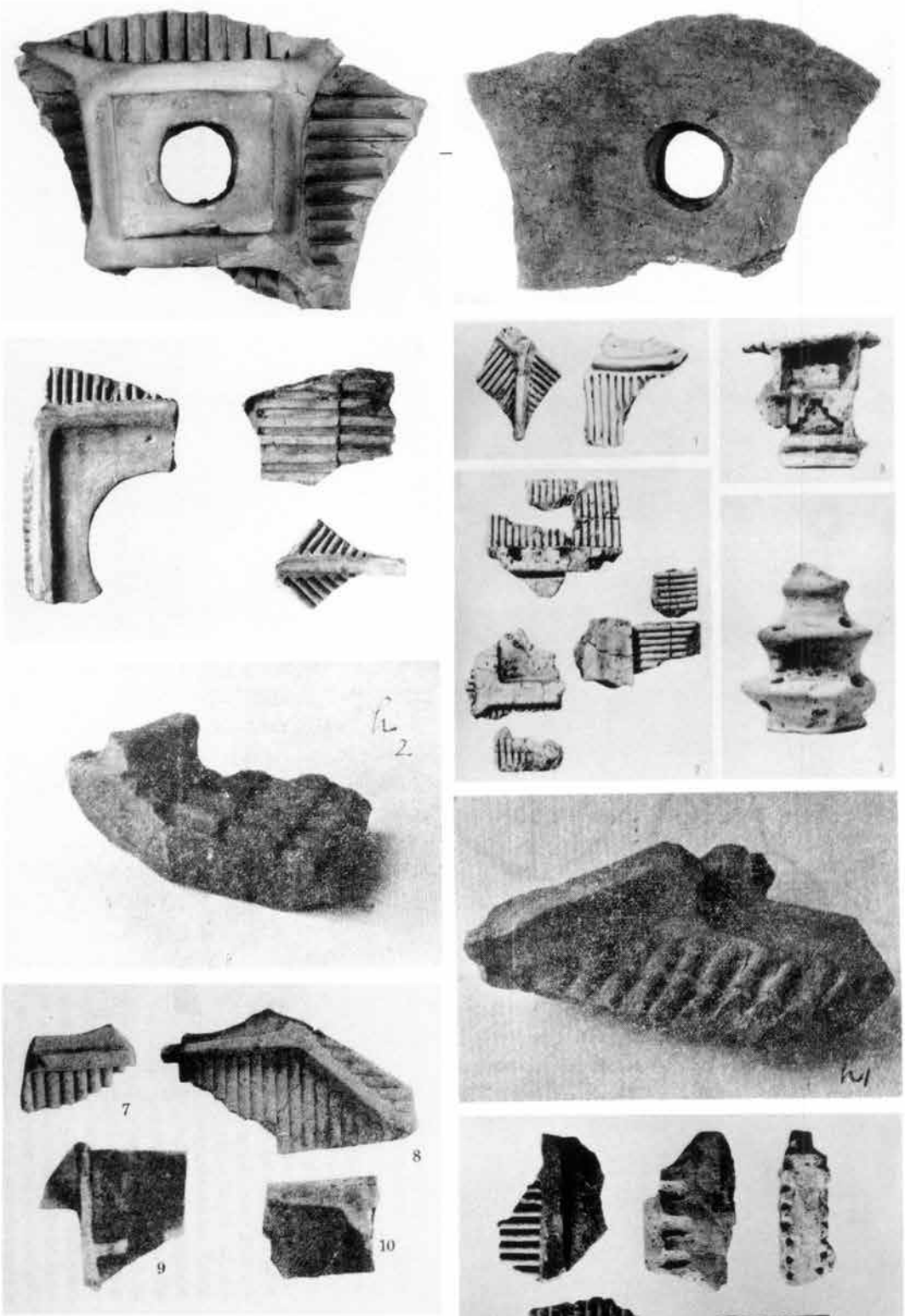




花見月K地点の須恵器



上：花見月L地点、下：若狭見M地点、三ッ池B地点、春木地内の須恵器



県内出土の互塔（七尾市史、能登国分寺跡、津幡町史、末松廃寺跡、より転載）

左　若緑イナバヤマ窯、池崎窯、押水中学校庭、加茂廃寺

右　若緑イナバヤマ窯、能登国分寺、子浦蓮華山、末松廃寺

花　見　月　遺　跡

発行日　昭和59年3月31日

編集・発行者　石川県立埋蔵文化財センター
金沢市米泉町4丁目133番地

印刷者　㈱　橋本確文堂
金沢市大手町2丁目35番